

第38図 溝状造構出土遺物実測図（2）

175は、内野山窯系の皿である。見込は蛇ノ目釉  
剥ぎが施されている。

#### S E 25（第24図）

S E 25は2区中央部に位置し、S E 5を切り東西  
に横断する。遺物の出土はほとんどない。

#### S E 25出土遺物（第37図159）

159は、福建・廣東系の青花皿。高台は葵瓣底。

その他の溝状造構の遺物出土状況

S E 29 遺物は、中世の小片1点のみである。

S E 30 遺物の出土はない。

S E 15 遺物は、近世から中世にかけての陶磁器の  
小片が僅かに出土している。

S E 13 遺物は、中世から近世にかけての陶磁器片  
が出土している。

S E 3 遺物は、土器小片と中世から近世の陶磁器  
類が出土しており、特に近世後半の陶磁器類が多い。

S E 1 遺物は、土器小片と中世から近世の陶磁器  
であるが、特に近世陶磁器の占める割合が高い。

### S B 3 (第39図)

1区から4区では調査区全体に柱穴が多数分布していたが、現地での検討の結果、52棟の掘立柱建物を確認した。これらの建物は区画溝とのセット関係を確認するまでは至っていないが、報告では建物と最も近い区画溝との位置関係も示すこととする。

なお、掘立柱建物の平面図については、実際に切り合う遺構や土坑については表現せずに、掘立柱建物を構成する柱穴のみを表現している。重複する遺構については、全体の遺構分布図(第5図)を参照されたい。

柱間寸法については、全ての柱穴間で柱掘方の中心同士を結んだ距離を( )書きで示し、柱痕跡のあるもの同士の柱間については心々距離を載せ( )書きも併記した。建物それぞれの柱穴は、北側を上として身舎部分の北西角を起点にSH1、SH2、SH3…とし、次いで庇部分という要領で順に名称を付した。

### S B 1 (第39図)

1区北部で検出した東面庇付建物である。梁行1間(2.0m)、桁行2間(3.9m)の南北棟である。梁行柱間は2.0m、桁行柱間は1.9~2.1mである。柱掘方は径0.26~0.36mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-1°-Wで、身舎の面積が7.8m<sup>2</sup>、庇部分を含めた面積が12.1m<sup>2</sup>を測る。

### S B 2 (第39図)

1区北部で検出した建物である。梁行2間(3.32m)、桁行3間(5.64m)の南北棟である。梁行柱間は1.5~2.0m、桁行柱間は1.8~2.0mである。柱掘方は径0.2~0.35mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-11°-Wで、身舎の面積が18.7m<sup>2</sup>を測る。

### S B 3 (第40図)

1区北部で検出した建物である。梁行2間(3.84m)、桁行2間(4.76m)の東西棟である。梁行柱間は1.9m、桁行柱間は2.3~2.4mである。柱掘方は径0.26~0.36mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-79°-Eで、身舎の面積が18.3m<sup>2</sup>を測る。

### S B 4 (第40図)

1区北部で検出した建物である。梁行2間(4.12m)、桁行1間(4.4m)の南北棟である。梁行柱間は1.9~2.2m、桁行柱間は4.4mである。柱掘方は径0.32~0.5mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-2°-Wで、身舎の面積が18.1m<sup>2</sup>を測る。

### S B 5 (第41図)

1区中央やや南西部で検出した建物である。梁行2間(3.92m)、桁行4間(8.04m)の東西棟である。梁行柱間は1.7~2.2m、桁行柱間は1.9~2.2mである。柱掘方は径0.3~0.58mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.14~0.18mである。主軸はN-83°-Eで、身舎の面積が31.5m<sup>2</sup>を測る。

### S B 5 出土遺物 (第73図196、197)

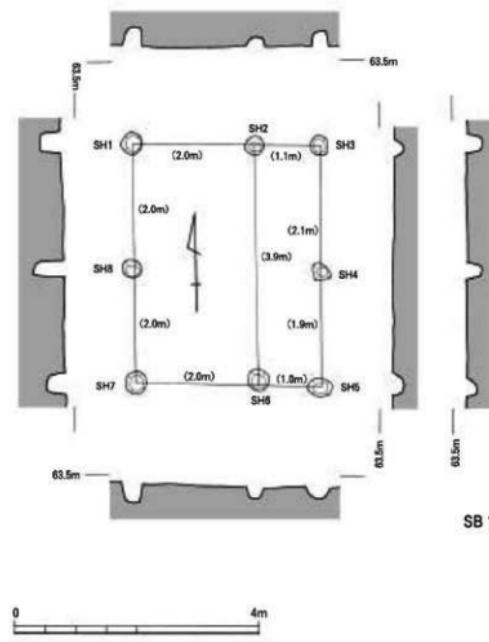
S H 8 から洪武通宝(196)と寛永通寶(197)がそれぞれ1枚出土している。

### S B 6 (第41図)

2区西部隅で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間(2.96m)、桁行3間(5.92m)の南北棟である。梁行柱間は1.4~1.6m、桁行柱間は1.9~2.1mである。柱掘方は径0.16~0.36mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.12~0.20mである。主軸はN-9°-Wで、身舎の面積が17.5m<sup>2</sup>を測る。

### S B 7 (第42図)

2区中央やや西で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行1間(3.5m)、桁行3間(5.48m)の東西棟である。梁行柱間は3.5m、桁行柱間は1.8~2.0mである。柱掘方は径2.0~0.28mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.10~0.16mである。主軸はN-82°-Wで、身舎の面積が19.2m<sup>2</sup>を測る。S B 8 と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。



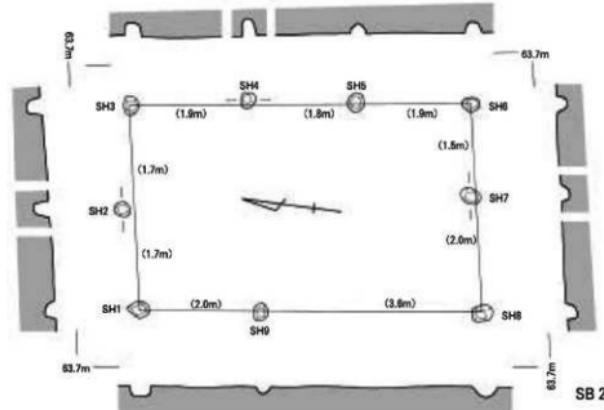
第9表 SB 1 柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	性質・遺物等
SH1	32×30	30	
SH2	30×28	14	
SH3	30×26	28	
SH4	28×26	24	
SH5	40×30	20	
SH6	34×34	20	
SH7	36×34	32	
SH8	32×26	50	

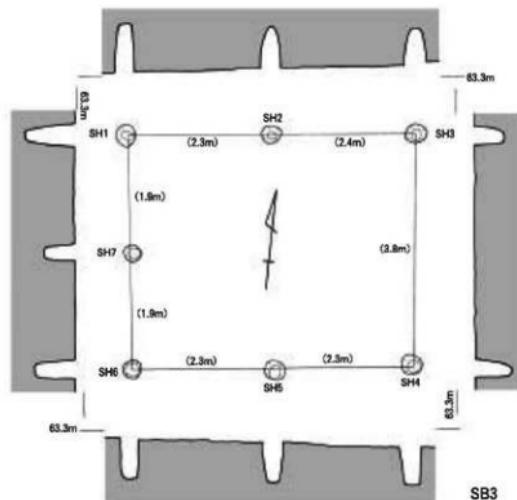
SB 1

第10表 SB 2 柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	性質・遺物等
SH1	28×26	16	
SH2	24×24	24	
SH3	30×26	22	
SH4	28×26	30	
SH5	32×24	14	
SH6	27×22	16	
SH7	35×24	10	
SH8	34×26	16	
SH9	26×22	10	



第39図 SB 1・SB 2 実測図 (S=1/80)

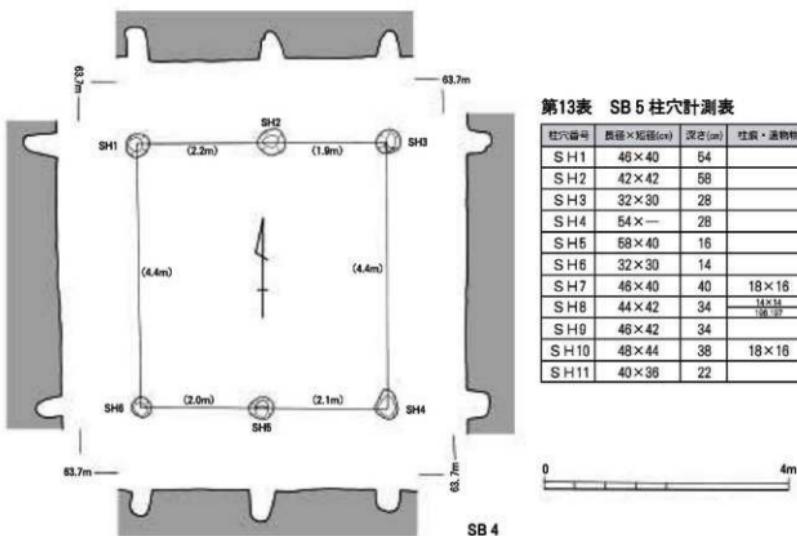


第11表 SB 3 柱穴計測表

柱穴番号	直径×短径(cm)	深さ(cm)	性質・遺物等
S H1	36×30	80	
S H2	30×28	70	
S H3	36×28	58	
S H4	34×30	60	
S H5	34×30	66	
S H6	30×30	66	
S H7	28×26	50	

第12表 SB 4 柱穴計測表

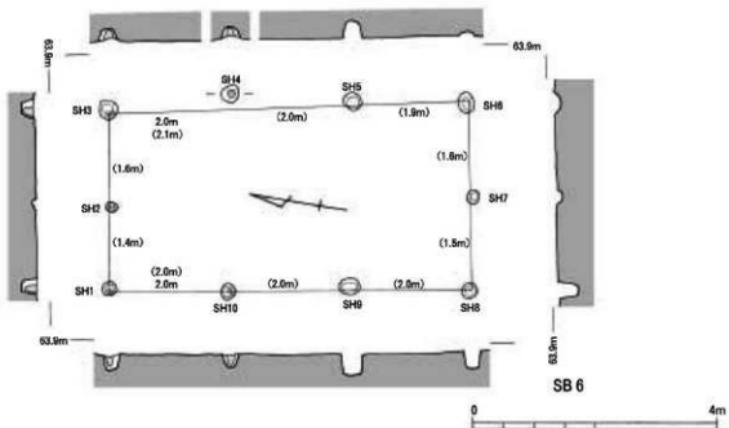
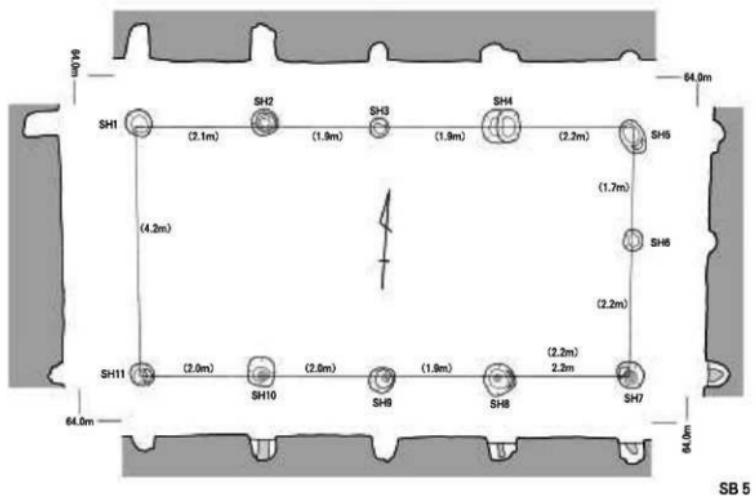
柱穴番号	直径×短径(cm)	深さ(cm)	性質・遺物等
S H1	36×36	54	
S H2	48×40	44	
S H3	40×40	42	
S H4	50×36	36	
S H5	40×36	52	
S H6	34×32	44	



第13表 SB 5 柱穴計測表

柱穴番号	直径×短径(cm)	深さ(cm)	性質・遺物等
S H1	46×40	54	
S H2	42×42	56	
S H3	32×30	28	
S H4	54×—	28	
S H5	58×40	16	
S H6	32×30	14	
S H7	46×40	40	18×16
S H8	44×42	34	14×16 16×16
S H9	46×42	34	
S H10	48×44	38	18×16
S H11	40×36	22	

第40図 SB 3・SB 4 実測図 (S=1/80)



第41図 SB 5・SB 6実測図 (S=1/80)

### S B 8 (第42図)

2区中央やや西で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行1間(3.9m)、桁行3間(6.96m)の南北棟である。梁行柱間は3.9m、桁行柱間は2.0~2.8mである。柱掘方は径0.2~0.44mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.10~0.16mである。主軸はN-5°-Eで、身舎の面積が27.1m<sup>2</sup>を測る。S B 7、S E 24と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

### S B 9 (第43図)

2区中央部で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間(3.08m)、桁行3間(5.92m)の南北棟である。梁行柱間は1.5~1.8m、桁行柱間は1.8~2.1mである。柱掘方は径0.34~0.6mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-9°-Wで、身舎の面積が18.2m<sup>2</sup>を測る。S E 24と重複するが、切り合い関係は不明である。

### S B 10 (第44図)

2区南西部で検出した両面庇付建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間(3.68m)、桁行5間(11.12m)で東西棟である。梁行柱間は1.8~2.0m、桁行柱間は2.2~2.3mである。柱掘方は径0.22~0.38mでほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、長径0.08~0.14mである。主軸はN-89°-Eで、身舎の面積が40.9m<sup>2</sup>、底部分を含めた面積が71.2m<sup>2</sup>を測る。S B 11、S B 12と重複する。S B 12とは柱穴の直接的な切り合い関係はない。S B 11を切る。建物の規模が同程度であることから、S B 10はS B 11を立て替えたものだと推定される。

### S B 10出土遺物（第73図191~193）

土師器(191、192、193)は、いずれも底部鉗切りの小皿で口径7.4~7.8cm、器高1.2~1.3cm、底径6~6.3cmである。191はSH 5、192はSH 3、193はSH 10からそれぞれ出土した。

### S B 11 (第45図)

2区南西部で検出した両面庇付建物で、区画溝5

内に位置する。梁行2間(3.96m)、桁行5間(11.52m)で東西棟である。梁行柱間は1.9~2.1m、桁行柱間は2.2~2.4mである。柱掘方は径0.16~0.42mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、長径0.10~0.14mである。主軸はN-87°-Eで、身舎の面積が45.6m<sup>2</sup>、底部分を含めた面積が74.2m<sup>2</sup>を測る。S B 10、S B 12と重複するが、S B 12とは柱穴の直接的な切り合い関係はない。S B 10に切られる。

### S B 12 (第46図)

2区南西部で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間(4.12m)、桁行5間(9.44m)の東西棟である。梁行柱間は1.9~2.4m、桁行柱間は1.8~2.1mである。柱掘方は径0.16~0.38mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、長径0.12~0.16mである。主軸はN-86°-Eで、身舎の面積が38.9m<sup>2</sup>を測る。S B 10、S B 11と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

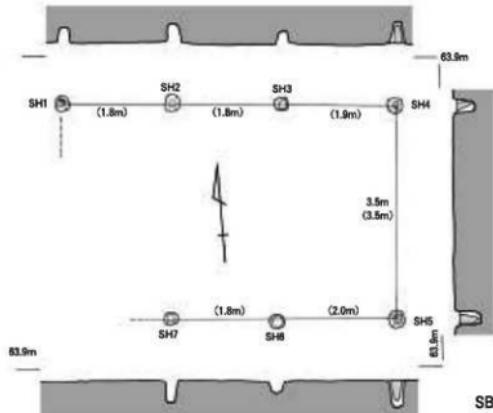
### S B 13 (第46図)

2区南西部で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間(4.0m)、桁行3間(7.08m)の南北棟である。梁行柱間は1.9~2.1m、桁行柱間は1.9~2.9mである。柱掘方は径0.16~0.46mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、長径0.10~0.20mである。主軸はN-6°-Eで、身舎の面積が28.3m<sup>2</sup>を測る。

### S B 14 (第47図)

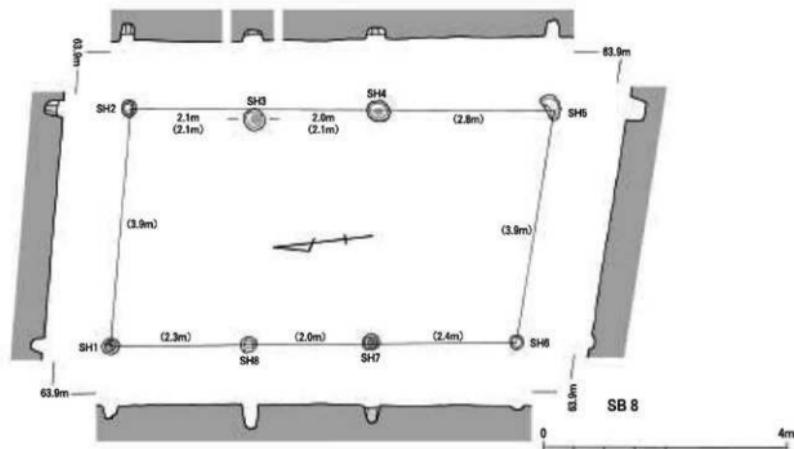
2区中央やや南で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間(3.8m)、桁行3間(6.88m)の南北棟である。梁行柱間は1.4~2.3m、桁行柱間は2.2~2.4mである。柱掘方は径0.22~0.50mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、長径0.14~0.20mである。主軸はN-16°-Wで、身舎の面積が26.1m<sup>2</sup>を測る。S B 15、S B 17、S B 9と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

第14表 SB 6 柱穴計測表



第15表 SB 7 柱穴計測表

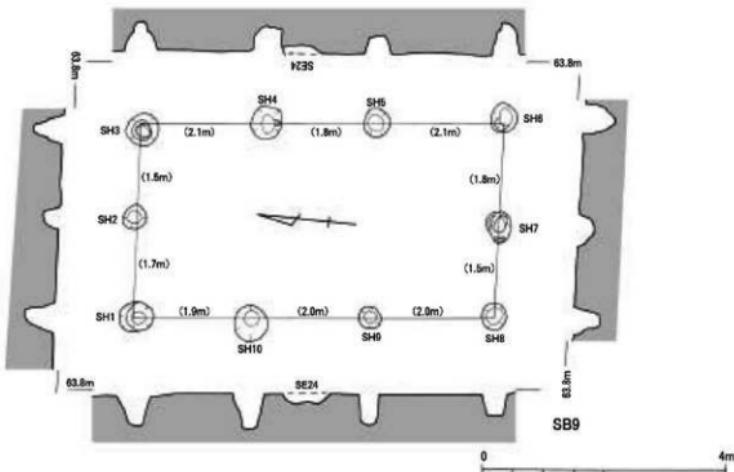
柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱頭・造物等
S H1	26×26	26	12×12
S H2	20×16	7	
S H3	32×30	20	20×12
S H4	30×30	20	12×12
S H5	30×26	28	
S H6	34×26	10	
S H7	24×20	8	
S H8	28×26	34	
S H9	36×26	36	
S H10	28×26	24	18×12



第16表 SB 8 柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱頭・造物	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱頭・造物	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱頭・造物等
S H1	28×28	22		S H4	36×34	18	14×12	S H7	28×26	28	16×14
S H2	28×22	28	12×10	S H5	44×22	26		S H8	26×24	40	
S H3	34×32	14	16×16	S H6	22×20	6					

第42図 SB 7・SB 8 実測図 (S=1/80)



第17表 SB9柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(m)	柱底・造物	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(m)	柱底・造物	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(m)	柱底・造物等
SH1	58×50	50		SH5	48×40	30		SH9	40×34	50	
SH2	40×36	28		SH6	50×42	52		SH10	60×52	58	
SH3	54×50	50		SH7	52×40	28					
SH4	54×48	40		SH8	44×42	44					

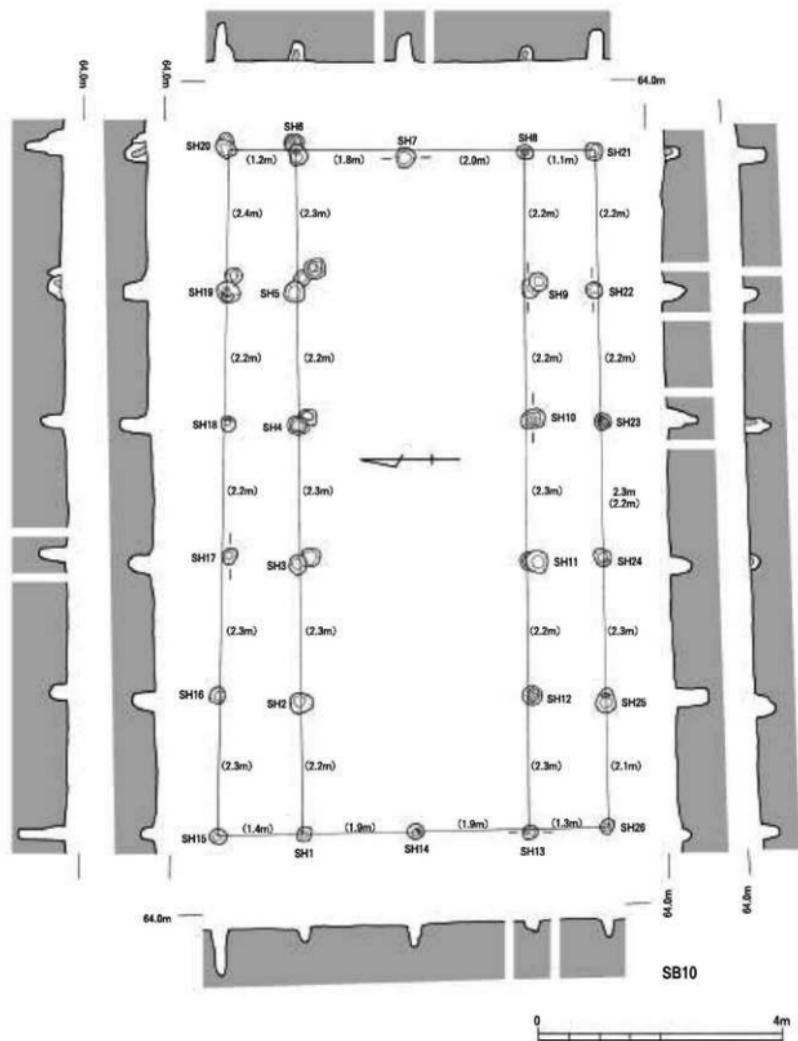
第18表 SB10柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(m)	柱底・造物	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(m)	柱底・造物	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(m)	柱底・造物等
SH1	24×24	20		SH10	38×32	52	193	SH19	38×38	24	10×8
SH2	38×32	36		SH11	30×—	32		SH20	34×26	60	
SH3	33×26	34	192	SH12	32×30	54		SH21	30×30	44	
SH4	34×30	46		SH13	22×22	14		SH22	28×24	22	
SH5	34×34	38	191	SH14	28×24	32		SH23	26×26	42	12×12
SH6	34×28	36	14×12	SH15	30×24	74		SH24	32×26	16	12×12
SH7	32×32	40		SH16	26×24	26		SH25	40×32	32	
SH8	26×24	26	14×10	SH17	26×24	44		SH26	26×20	30	
SH9	32×—	38		SH18	26×24	36					

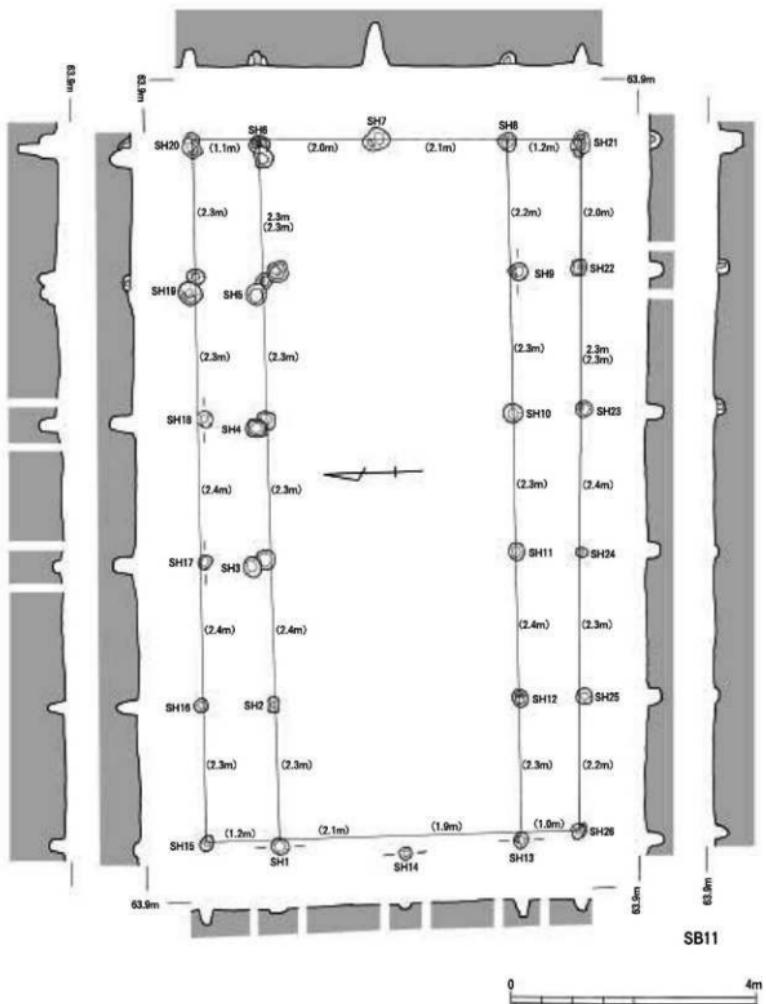
第19表 SB11柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(m)	柱底・造物	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(m)	柱底・造物	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(m)	柱底・造物等
SH1	28×24	5		SH10	30×28	28		SH19	30×34	28	
SH2	26×16	33		SH11	30×24	20		SH20	24×—	26	
SH3	32×30	30		SH12	28×26	20		SH21	30×—	34	
SH4	30×24	34		SH13	26×24	22		SH22	26×24	18	12×10
SH5	24×—	12	12×10	SH14	20×20	8		SH23	28×26	12	14×12
SH6	30×30	20	14×12	SH15	26×20	24		SH24	20×16	4	
SH7	42×38	70		SH16	22×20	26		SH25	26×26	6	
SH8	30×30	18	12×10	SH17	22×18	10		SH26	26×24	22	
SH9	32×28	22		SH18	24×24	26					

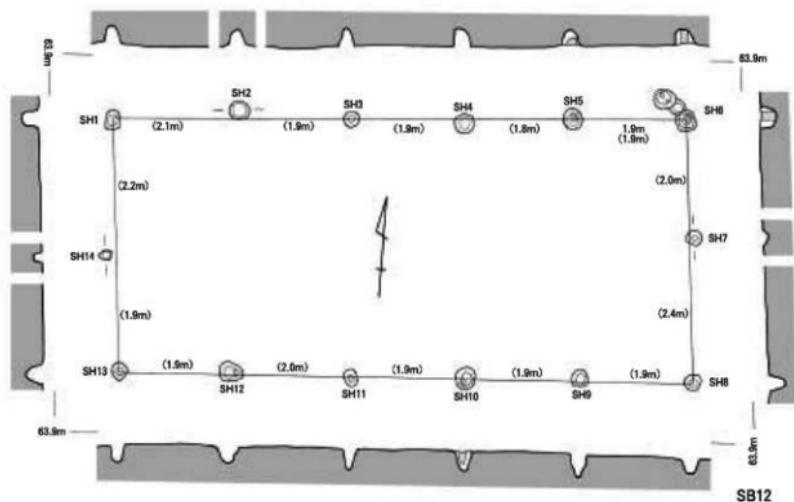
第43図 SB9実測図 (S=1/80)



第44図 S B10実測図 (S = 1/80)

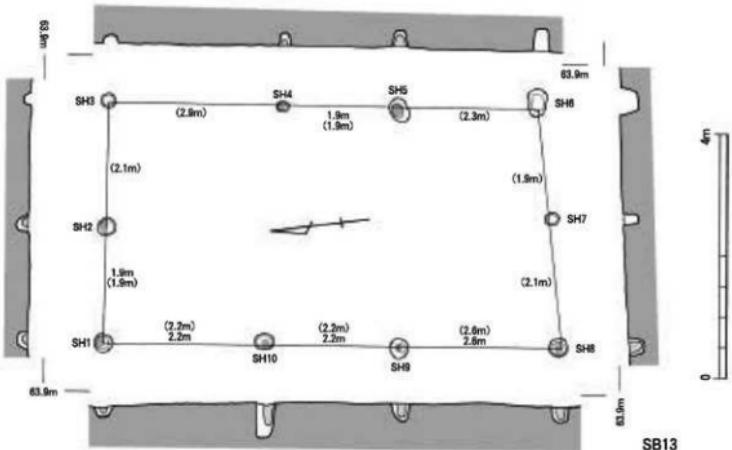


第45図 S B11実測図 ( $S = 1/80$ )



第20表 SB12柱穴計測表

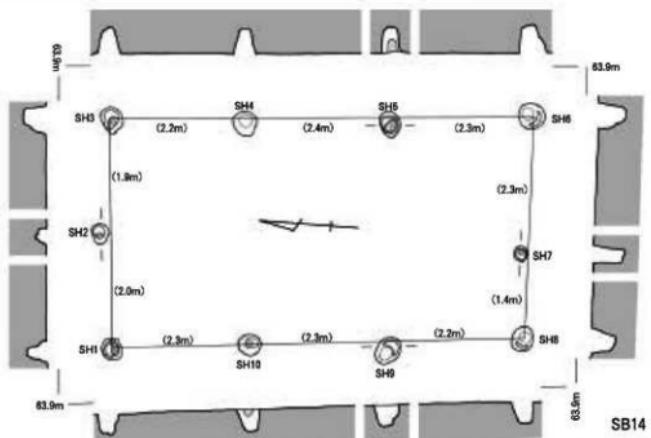
柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱面・底面	柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱面・底面	柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱面・底面等
SH1	32×24	30		SH6	34×32	27	14×12	SH11	30×20	36	
SH2	34×28	24		SH7	26×22	10		SH12	40×34	28	
SH3	26×24	30		SH8	26×26	25		SH13	26×28	26	
SH4	32×28	30		SH9	28×26	40		SH14	20×16	24	
SH5	34×30	26	16×14	SH10	38×33	34	14×14				



第46図 SB12・SB13実測図 (S=1/80)

第21表 SB13柱穴計測表

柱穴番号	直径×幅広(cm)	深さ(cm)	柱頭・造物	柱穴番号	直径×幅広(cm)	深さ(cm)	柱頭・造物	柱穴番号	直径×幅広(cm)	深さ(cm)	柱頭・造物等
SH1	30×30	14	18×14	SH5	42×28	26	22×20	SH9	32×32	28	14×12
SH2	30×28	20	16×14	SH6	46×34	38		SH10	30×24	56	14×12
SH3	22×22	12		SH7	22×22	24					
SH4	18×16	20	12×10	SH8	30×28	24			20×14		

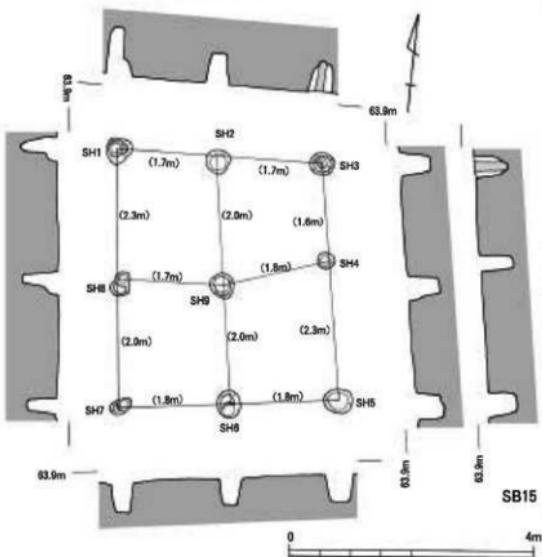


第22表 SB14柱穴計測表

柱穴番号	直径×幅広(cm)	深さ(cm)	柱頭・造物等
SH1	34×34	34	
SH2	34×30	20	
SH3	40×32	42	
SH4	40×38	40	
SH5	42×34	40	20×14
SH6	44×42	46	
SH7	26×22	52	
SH8	42×34	36	
SH9	50×40	34	
SH10	38×34	36	16×14

第23表 SB15柱穴計測表

柱穴番号	直径×幅広(cm)	深さ(cm)	柱頭・造物等
SH1	42×—	78	
SH2	40×36	60	
SH3	38×38	54	18×12
SH4	26×26	52	
SH5	48×38	44	
SH6	38×—	44	
SH7	22×—	50	
SH8	32×—	60	
SH9	40×38	50	



第47図 SB14・SB15実測図 (S=1/80)

### S B15（第47図）

2区中央やや南で検出した総柱建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間（3.32m）、桁行2間（3.92m）の南北棟である。梁行柱間は1.7～1.8m、桁行柱間は1.6～2.3mである。柱掘方は径0.22～0.48mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.12～0.18mである。主軸はN-13°-Wで、身舎の面積が13.8m<sup>2</sup>を測る。S B14、S D1と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

### S B16（第48図）

2区中央やや南で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間（4.14m）、桁行2間（4.18m）の南北棟である。梁行柱間は2.0～2.2m、桁行柱間は1.8～2.3mである。柱掘方は径0.22～0.5mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.14～0.20mである。主軸はN-7°-Wで、身舎の面積が17.1m<sup>2</sup>を測る。S E22と重複するが、切り合い関係は不明である。

### S B17（第48図）

2区南部で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間（5.16m）、桁行4間（7.88m）の東西棟である。梁行柱間は1.9～2.8m、桁行柱間は1.9～2.1mである。柱掘方は径0.24～0.52mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.12～0.36mである。主軸はN-87°-Eで、身舎の面積が40.7m<sup>2</sup>を測る。S B14、S B19、S B18、S E22と重複する。S B14、S B19、S B18とは、柱穴の直接的な切り合い関係はない。S E22との切り合い関係は不明である。

### S B17出土遺物（第73図189、190、198）

溝縁皿（189）、寛永通寶（198）、東播系の捏鉢口縁部（190）が出土している。189は、高台疊付部分に3つの砂目痕が確認される。189はS H 2、198はS H 8、190はS H11からそれぞれ出土した。

### S B18（第49図）

2区南部で検出した建物で、区画溝5・7内に位

置する。梁行1間（2.7m）、桁行2間（5.12m）の東西棟である。梁行柱間は2.6～2.7m、桁行柱間は2.4～3.1mである。柱掘方は径0.2～0.28mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.10～0.20mである。主軸はN-89°-Eで、身舎の面積が13.8m<sup>2</sup>を測る。S B17、S B24と重複する。柱穴の直接的な切り合い関係はない。

### S B19（第49図）

2区南部で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間（2.68m）、桁行2間（3.4m）の南北棟である。梁行柱間は1.1～1.5m、桁行柱間は1.5～1.9mである。柱掘方は径0.24～0.38mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.14～0.20mである。主軸はN-5°-Wで、身舎の面積が9.1m<sup>2</sup>を測る。S B17と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

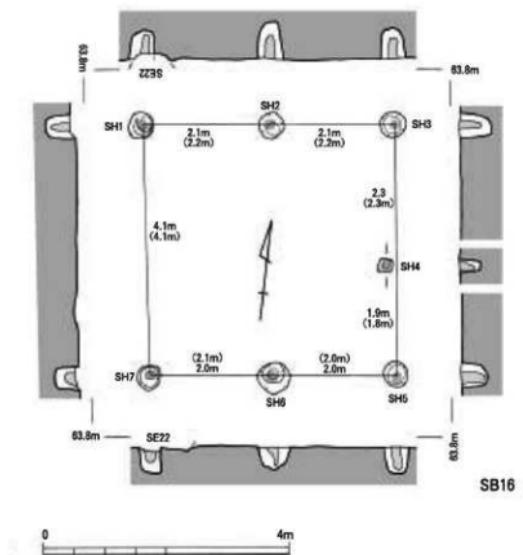
### S B20（第50図）

2区南西部隅で検出した両面庇付建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間（3.36m）、桁行4間（9.16m）で南北棟である。梁行柱間は1.5～1.9m、桁行柱間は2.1～2.5mである。柱掘方は径0.24～0.44mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.10～0.16mである。主軸はN-1°-Eで、身舎の面積が30.8m<sup>2</sup>、庇部分を含めた面積が47.6m<sup>2</sup>を測る。S B21と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

### S B21（第51図）

2区南西部隅で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行1間（3.4m）、桁行3間（6.28m）の東西棟である。梁行柱間は3.3～3.4m、桁行柱間は2.0～2.2mである。柱掘方は径0.22～0.32mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.10～0.18mである。主軸はN-89°-Wで、身舎の面積が21.4m<sup>2</sup>を測る。S B20と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

### S B21出土遺物（第73図194、195）

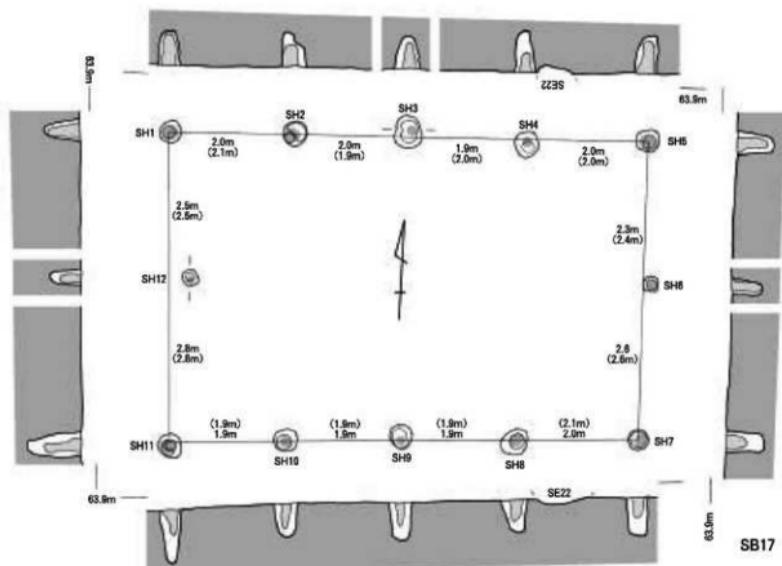


第24表 SB16柱穴計測表

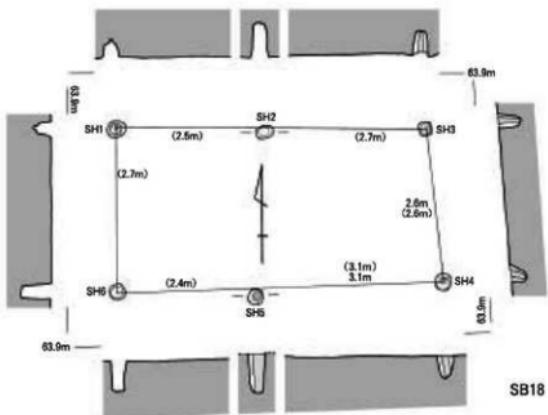
柱穴番号	直径×掘深(cm)	深さ(m)	柱頭・連物等
S H1	42×40	(50)	16×14
S H2	42×40	62	18×16
S H3	42×42	52	16×14
S H4	22×22	34	18×12
S H5	40×40	44	20×14
S H6	50×50	36	20×14
S H7	38×34	42	16×14

第25表 SB17柱穴計測表

柱穴番号	直径×掘深(cm)	深さ(m)	柱頭・連物等
S H1	38×36	56	36×24
S H2	40×42	58	40×24
S H3	52×46	54	20×14
S H4	42×38	70	18×16
S H5	38×38	64	30×28
S H6	24×24	50	18×16
S H7	34×34	62	24×16
S H8	48×40	54	20×24
S H9	40×36	60	16×14
S H10	40×40	54	18×16
S H11	42×38	90	20×24
S H12	28×24	50	14×12

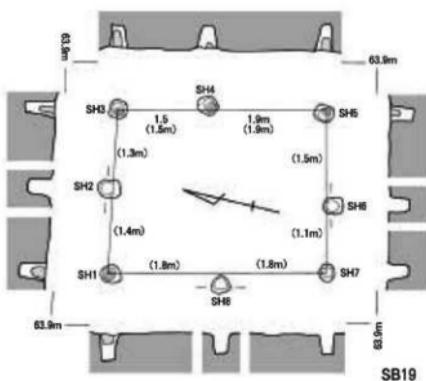


第48図 S B16・S B17実測図 (S = 1/80)



第26表 SB18柱穴計測表

柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
S H1	28×28	24	
S H2	28×22	56	
S H3	24×20	28	12×10
S H4	28×26	36	16×12
S H5	26×24	64	20×14
S H6	26×24	50	

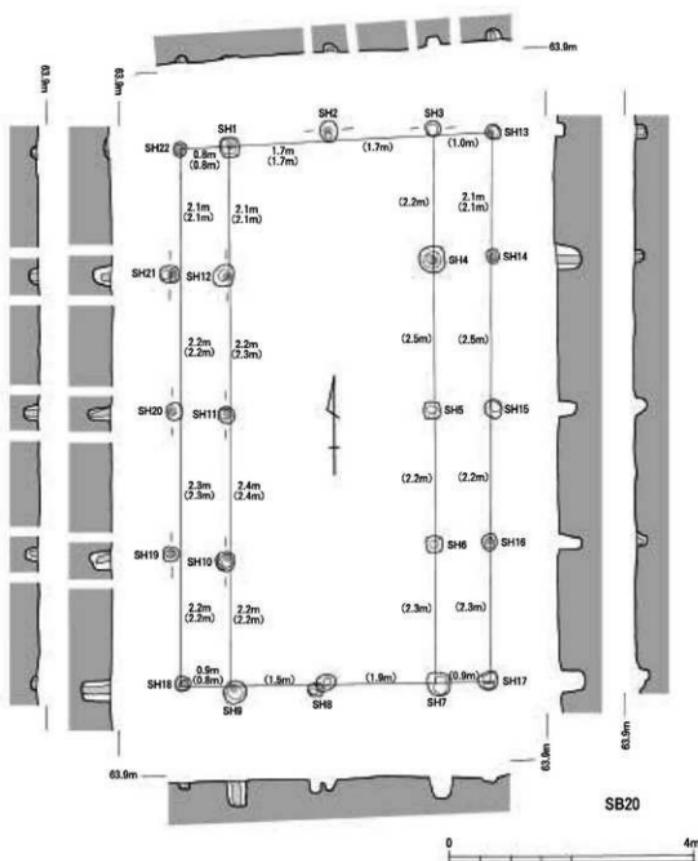


第27表 SB19柱穴計測表

柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
S H1	34×30	44	18×18
S H2	38×20	38	
S H3	30×28	48	18×14
S H4	34×30	36	20×14
S H5	30×24	40	18×14
S H6	32×26	32	
S H7	28×25	32	
S H8	30×30	32	

0 4m

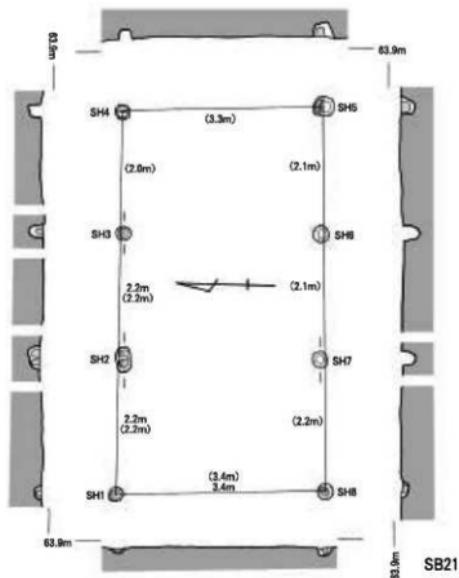
第49図 S B18・S B19実測図 (S=1/80)



第28表 SB20柱穴計測表

柱穴番号	直径×洞深(cm)	洞深(cm)	柱高・遺物等	柱穴番号	直径×洞深(cm)	洞深(cm)	柱高・遺物等	柱穴番号	直径×洞深(cm)	洞深(cm)	柱高・遺物等
SH1	34×32	4	14×12	SH9	38×38	47	16×14	SH17	32×30	14	
SH2	36×26	14	14×10	SH10	32×30	34	16×14	SH18	26×22	8	14×12
SH3	26×24	12		SH11	28×26	36	14×12	SH19	26×24	20	12×12
SH4	44×42	42	16×12	SH12	36×34	28	16×12	SH20	28×26	24	12×10
SH5	26×26	28		SH13	24×24	18	12×10	SH21	34×30	14	14×12
SH6	28×28	36		SH14	24×20	12	12×10	SH22	24×20	10	12×10
SH7	38×38	34		SH15	28×28	18					
SH8	32×28	20		SH16	28×24	16	16×10				

第50図 S B20実測図 (S=1/80)

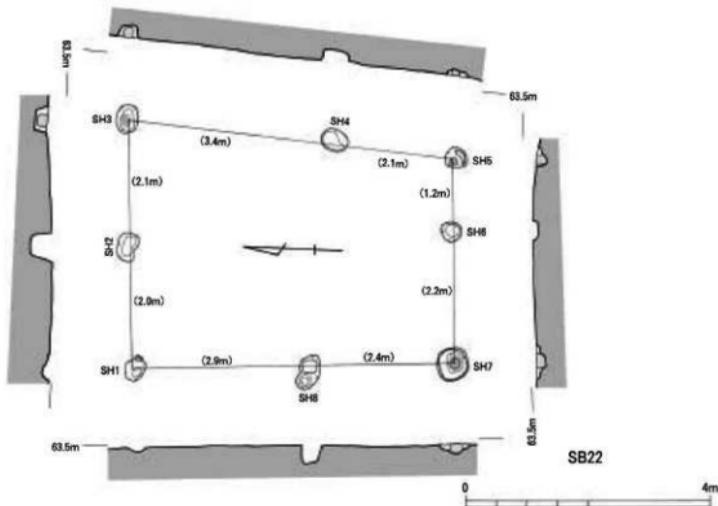


第29表 SB21柱穴計測表

柱穴番号	直径×縦深(cm)	深さ(cm)	柱面・測物等
S H1	22×22	12	14×12
S H2	22×—	16	12×10
S H3	24×22	24	12×10
S H4	24×22	22	
S H5	32×30	24	18×14
S H6	28×26	26	194
S H7	26×24	22	195
S H8	26×22	14	14×12

第30表 SB22柱穴計測表

柱穴番号	直径×縦深(cm)	深さ(cm)	柱面・測物等
S H1	38×32	12	
S H2	44×32	38	
S H3	48×34	20	22×16
S H4	44×34	18	
S H5	36×36	10	18×14
S H6	38×30	10	
S H7	52×52	12	24×20
S H8	36×—	30	



第51図 S B21・S B22実測図 (S = 1/80)

土鍤（194、195）の194はS H 6、195はS H 7から出土した。

#### S B22（第51図）

2区南東部で検出した建物で、区画溝5・7内に位置する。梁行2間（4.12m）、桁行2間（5.24m）の南北棟である。梁行柱間は1.2～2.2m、桁行柱間は2.1～3.4mである。柱掘方は径0.3～0.52mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.14～0.24mである。主軸はN-2°-Eで、身舎の面積が21.6m<sup>2</sup>を測る。S B23と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

#### S B23（第52図）

2区南東部で検出した建物で、区画溝5・7内に位置する。梁行2間（4.0m）、桁行4間（9.04m）の東西棟である。梁行柱間は1.9～2.1m、桁行柱間は1.8～2.9mである。柱掘方は径0.22～0.60mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.14～0.20mである。主軸はN-88°-Wで、身舎の面積が36.2m<sup>2</sup>を測る。S B22と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

#### S B24（第53図）

2区中央や南東部で検出した建物で、区画溝5・7内に位置する。梁行2間（4.0m）、桁行3間（7.04m）の南北棟である。梁行柱間は1.9～2.1m、桁行柱間は2.2～2.4mである。柱掘方は径0.26～0.4mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.12～0.20mである。主軸はN-3°-Eで、身舎の面積が28.2m<sup>2</sup>を測る。S B18と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

#### S B25（第53図）

2区南東部隅で検出した建物で、区画溝5・7内に位置する。梁行2間（2.88m）、桁行2間（4.04m）の南北棟である。梁行柱間は1.3～1.7m、桁行柱間は1.7～2.2mである。柱掘方は径0.16～0.36mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、長径0.16、短径0.12mである。主軸はN-2°-Wで、

身舎の面積が11.6m<sup>2</sup>を測る。S G 1と重複し、S G 1に切られる。

#### S B26（第54図）

2区南部隅で検出した建物で、区画溝5・7内に位置する。南側が調査区外へ続いたため全体の規模は明らかではないが、梁行2間（3.08m）、桁行2間以上（3.96m以上）の東西棟になると思われる。梁行柱間は1.4～1.7m、桁行柱間は1.9～2.1mである。柱掘方は径0.2～0.44mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.12～0.22mである。主軸はN-79°-Wで、身舎の面積が12.1m<sup>2</sup>以上を測る。

#### S B27（第54図）

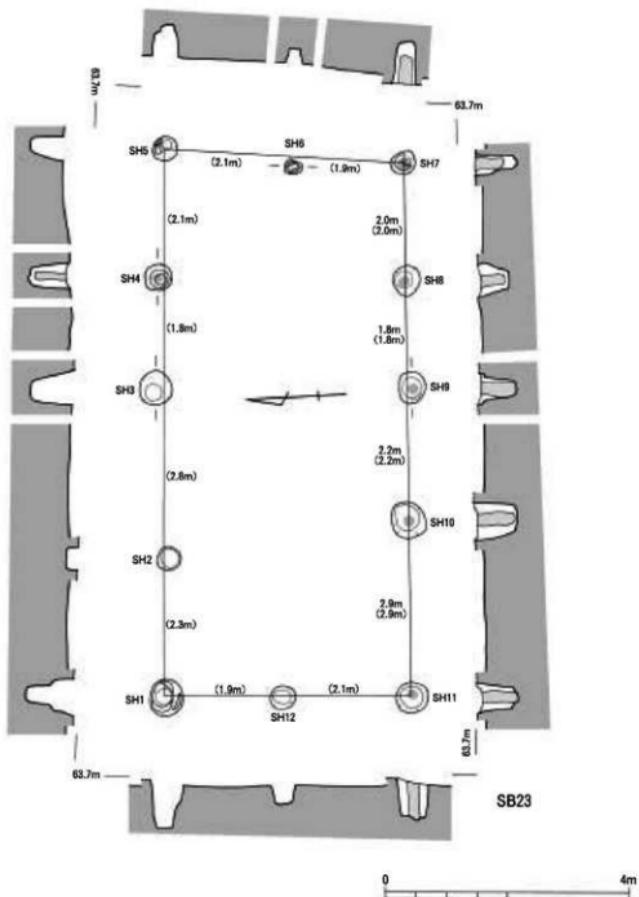
3区北部で検出した建物で、区画溝5内に位置する。梁行2間（2.88m）、桁行3間（5.56m）の南北棟である。梁行柱間は1.3～1.6m、桁行柱間は1.8～2.1mである。柱掘方は径0.16～0.46mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-2°-Wで、身舎の面積が16.0m<sup>2</sup>を測る。S G 3と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

#### S B28（第55図）

3区北西部で検出した建物である。梁行1間（3.1m）、桁行2間（4.0m）の東西棟である。梁行柱間は2.9～3.1m、桁行柱間は2.0～2.2mである。柱掘方は径0.24～0.4mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-84°-Eで、身舎の面積が12.4m<sup>2</sup>を測る。S E49 a、bと重複する。S E49 a、bに切られる。

#### S B29（第55図）

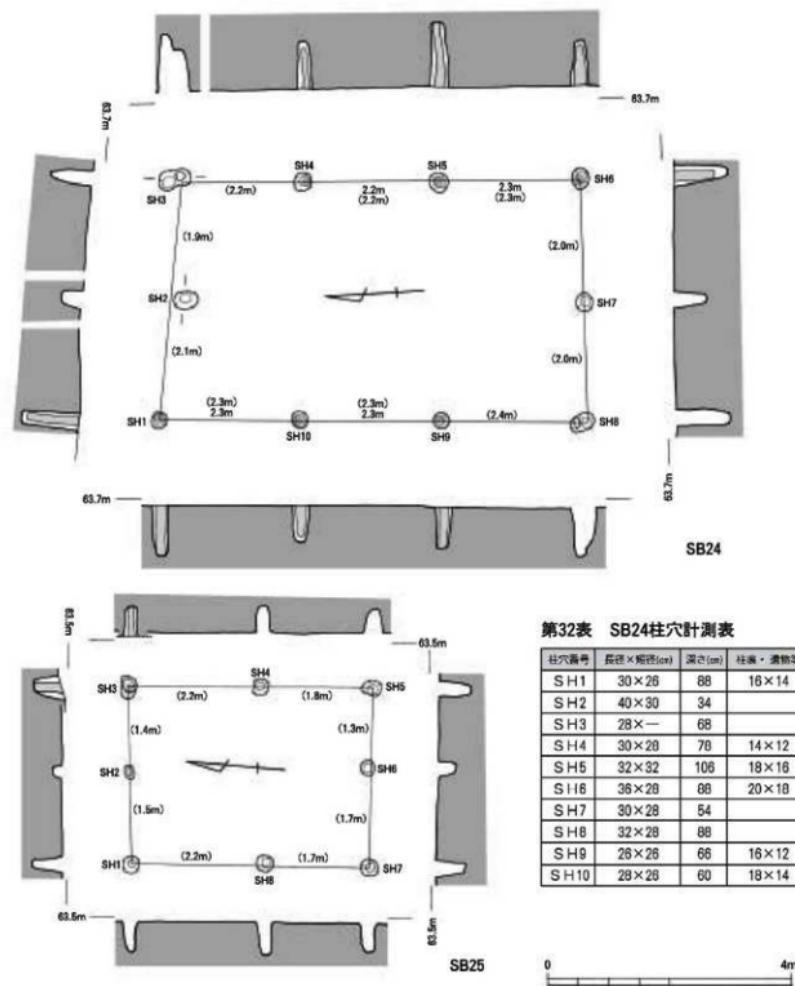
3区北東部隅で検出した建物で、区画溝6内に位置する。東側が調査区外へ延びているため全体の規模は明らかでないが、梁行2間（3.2m）、桁行2間以上（3.6m以上）の東西棟であると思われる。梁行柱間は1.6～1.7m、桁行柱間は1.7～1.8mである。柱掘方は径0.18～0.26mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-87°-Wで、身舎の面積が11.5m<sup>2</sup>以上を測る。S C24、S C23と重複するが、直接的な切り合い関係はない。



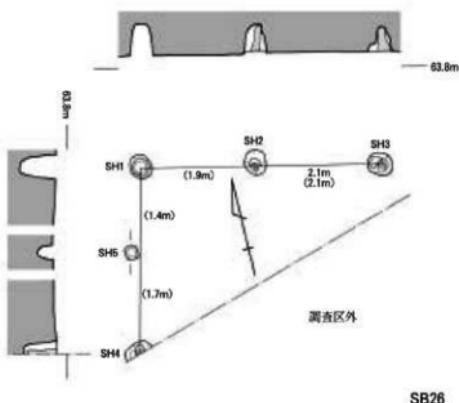
第31表 SB23柱穴計測表

柱穴番号	直径×深度(m)	深さ(cm)	柱頭・灌漿等	柱穴番号	直径×深度(m)	深さ(cm)	柱頭・灌漿等
S H1	60×54	(78)	被出面はK-An上黑色土	S H7	42×36	(70)	被出面はK-An上黑色土 20×18
S H2	40×38	(20)	被出面はK-An上黑色土	S H8	48×46	(50)	被出面はK-An上黑色土 20×16
S H3	56×54	70		S H9	54×44	(60)	被出面はK-An上黑色土 18×16
S H4	46×42	68	14×14	S H10	60×54	(70)	被出面はK-An上黑色土 18×16
S H5	40×40	56		S H11	54×50	(66)	被出面はK-An上黑色土 18×14
S H6	30×22	24		S H12	42×38	30	

第52図 S B23実測図 (S = 1/80)



第53図 S B24・S B25実測図 (S=1/80)

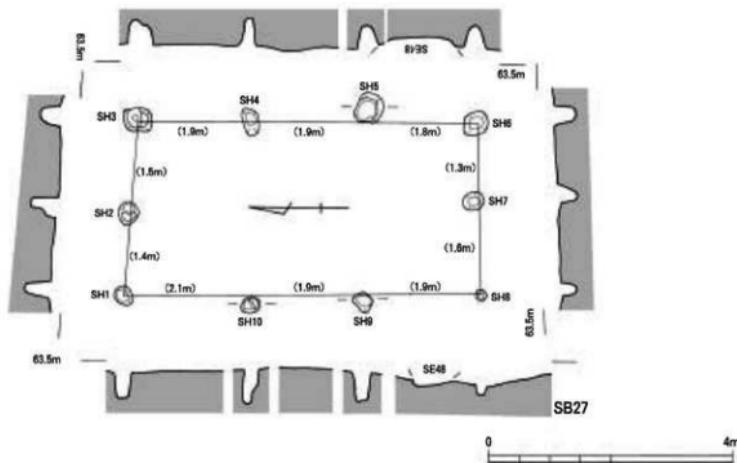


第34表 SB26柱穴計測表

柱穴番号	直径×短径(cm)	深さ(cm)	柱標・遺物等
S H1	40×36	56	
S H2	44×34	56	14×12
S H3	44×38	42	22×18
S H4	40×—	54	?
S H5	22×20	24	

第35表 SB27柱穴計測表

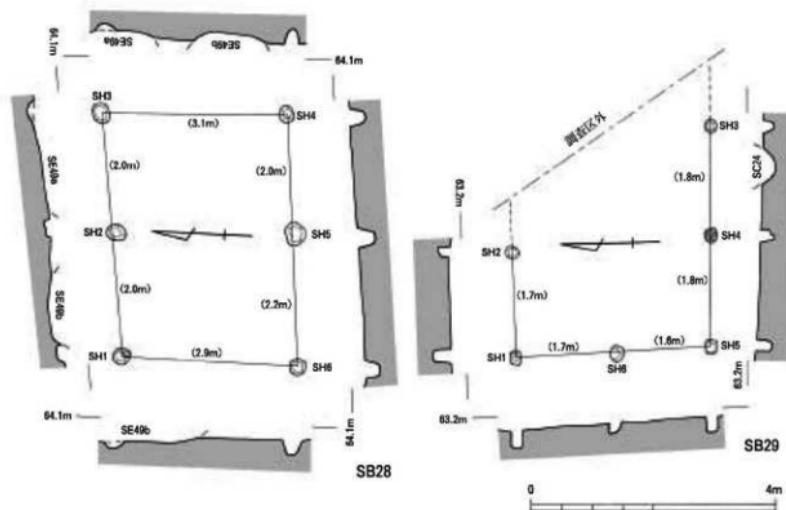
柱穴番号	直径×短径(cm)	深さ(cm)	柱標・遺物等
S H1	32×28	42	
S H2	40×32	44	
S H3	44×37	30	
S H4	42×22	45	
S H5	48×40	35	
S H6	38×38	32	
S H7	34×30	30	
S H8	18×16	24	
S H9	32×30	48	
S H10	30×26	54	



第54図 S B26・S B27実測図 (S=1/80)

第36表 SB28柱穴計測表

柱穴番号	直径×幅広(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	26×26	12		SH3	30×28	10		SH5	40×32	28	
SH2	32×26	8		SH4	30×24	24		SH6	28×26	26	



第37表 SB29柱穴計測表

柱穴番号	直径×幅広(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	24×18	30		SH3	22×20	16		SH5	22×20	26	
SH2	22×20	16		SH4	22×20	24		SH6	26×22	16	

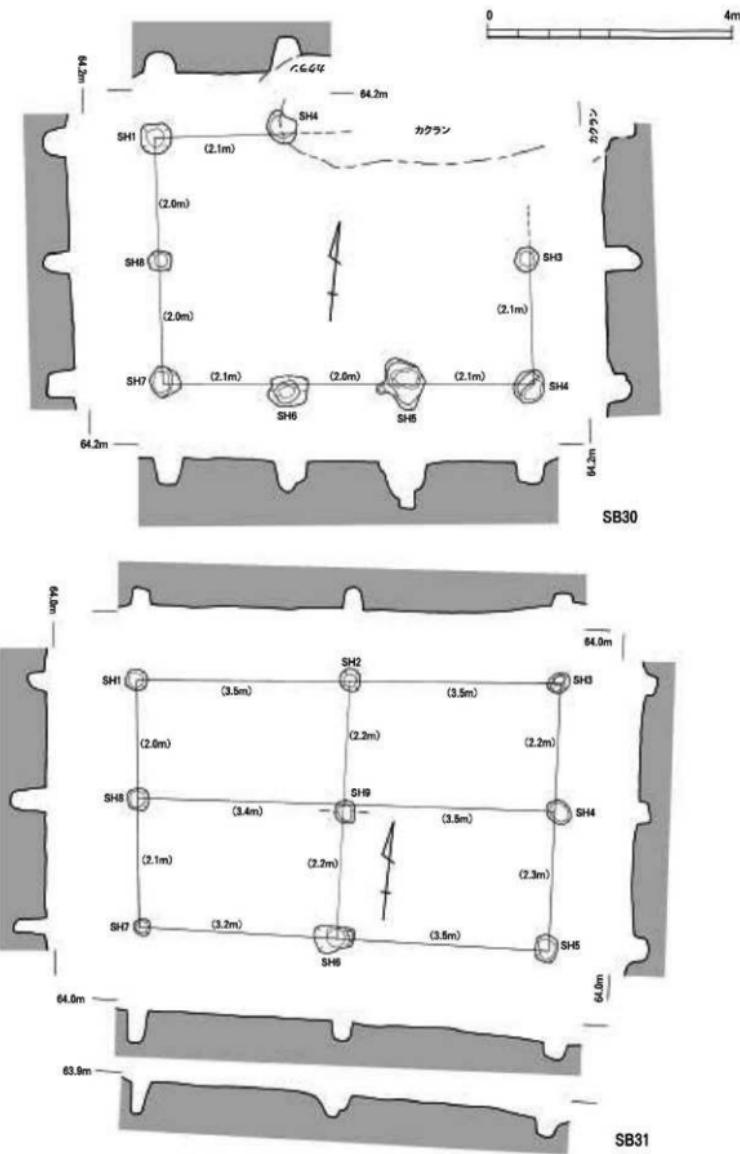
第38表 SB30柱穴計測表

柱穴番号	直径×幅広(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	50×50	38		SH4	54×52	36		SH7	48×48	44	
SH2	60×46	60		SH5	90×62	76		SH8	40×32	42	
SH3	42×36	58		SH6	60×50	48					

第39表 SB31柱穴計測表

柱穴番号	直径×幅広(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	34×34	24		SH4	46×34	18		SH7	30×27	48	
SH2	38×32	35		SH5	42×36	24		SH8	35×34	56	
SH3	38×32	16		SH6	65×42	32		SH9	33×33	28	

第55図 S B28・S B29実測図 (S = 1/80)



第56図 S B30・S B31実測図 (S = 1/80)

#### S B30（第56図）

3区南西部で検出した建物である。梁行2間(4.0m)、桁行3間(6.04m)の東西棟である。梁行柱間は2.0~2.1m、桁行柱間は2.0~2.1mである。柱掘方は径0.32~0.9mで、ほぼ円形または楕円形を呈している。主軸はN-83°-Eで、身舎の面積が24.2m<sup>2</sup>を測る。S B31、S B32、S B33と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

#### S B31（第56図）

3区南西部で検出した総柱建物である。梁行2間(4.36m)、桁行2間(6.92m)の東西棟である。梁行柱間は2.0~2.3m、桁行柱間は2.0~2.3mである。柱掘方は径0.27~0.65mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-85°-Eで、身舎の面積が30.2m<sup>2</sup>を測る。S B30、S B32と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

#### S B32（第57図）

3区南西部で検出した建物である。梁行2間(4.44m)、桁行5間(10.72m)の東西棟である。梁行柱間は2.2~2.5m、桁行柱間は2.0~2.5mである。柱掘方は径0.3~0.62mで、円形または楕円形を呈している。主軸はN-87°-Eで、身舎の面積が47.6m<sup>2</sup>を測る。西部分が2間×2間の総柱構造で東部分が2間×3間の側柱構造となっている。S B30、S B31、S B33と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

#### S B33（第58図）

3区南西部で検出した建物である。梁行2間(4.0m)、桁行1間(4.96m)の南北棟である。梁行柱間は1.8~2.1m、桁行柱間は5.0mである。柱掘方は径0.28~0.5mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-20°-Wで、身舎の面積が19.8m<sup>2</sup>を測る。S B30、S B32と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

#### S B34（第58図）

3区中央やや東で検出した建物で、区画溝8に重複し、区画溝11内に位置する。梁行1間(3.1m)、桁行3間(4.76m)の南北棟である。梁行柱間は2.9~3.1m、桁行柱間は1.5~1.7mである。柱掘方は径0.24~0.42mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-2°-Wで、身舎の面積が14.8m<sup>2</sup>を測る。S E38に切られる。

#### S B35（第59図）

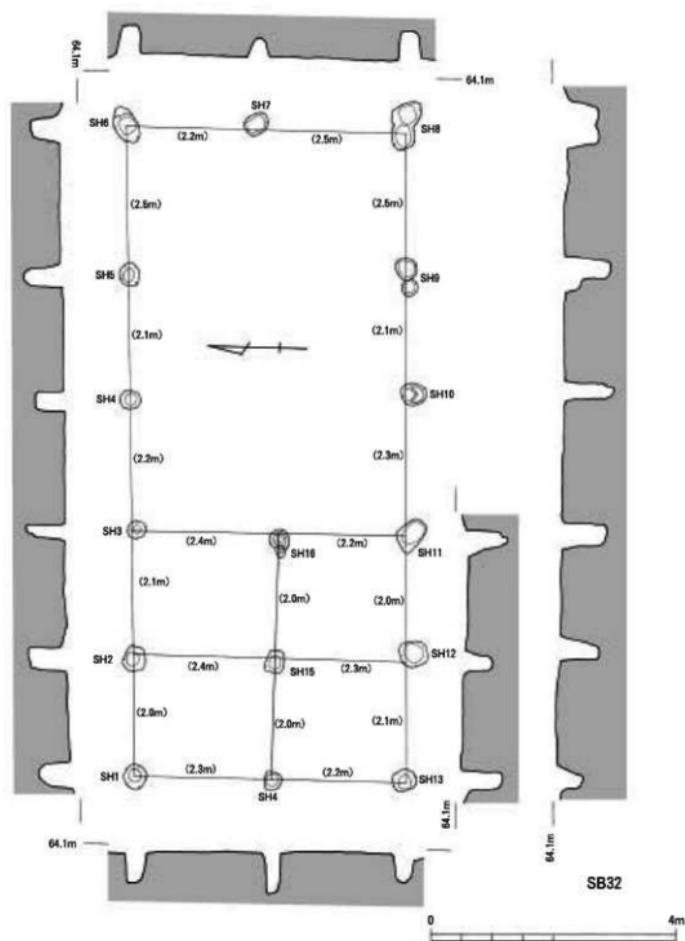
3区中央やや南で検出した建物で、区画溝8に重複し、区画溝11内に位置する。梁行1間(2.3m)、桁行2間(3.68m)の東西棟である。梁行柱間は2.2~2.3m、桁行柱間は1.6~2.1mである。柱掘方は径0.18~0.5mで、楕円形を呈している。主軸はN-88°-Wで、身舎の面積が8.5m<sup>2</sup>を測る。S E38に切られる。

#### S B36（第59図）

3区中央やや東で検出した建物で、区画溝8・11内に位置する。梁行1間(4.1m)、桁行3間(6.56m)の東西棟である。梁行柱間は4.0~4.1m、桁行柱間は2.1~2.4mである。柱掘方は径0.3~0.5mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.18~0.24mである。主軸はN-87°-Eで、身舎の面積が26.9m<sup>2</sup>を測る。S B37と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

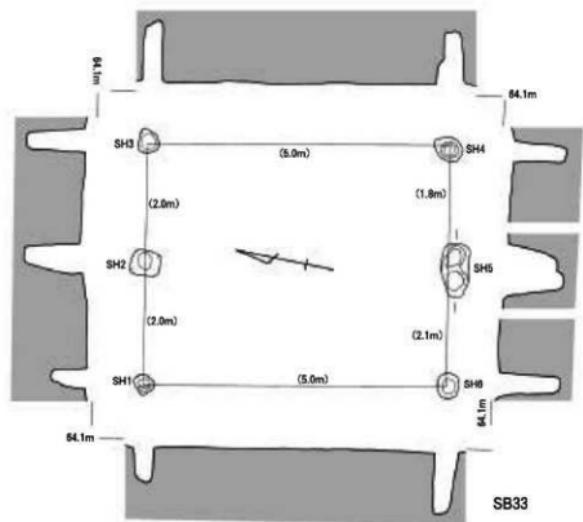
#### S B37（第60図）

3区中央やや東で検出した建物で、区画溝8・11内に位置する。梁行1間(4.3m)、桁行3間(6.76m)の東西棟である。梁行柱間は4.3m、桁行柱間は1.9~2.9mである。柱掘方は径0.3~0.44mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.12~0.20mである。主軸はN-84°-Eで、身舎の面積が29.1m<sup>2</sup>を測る。S B36、S B38と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。



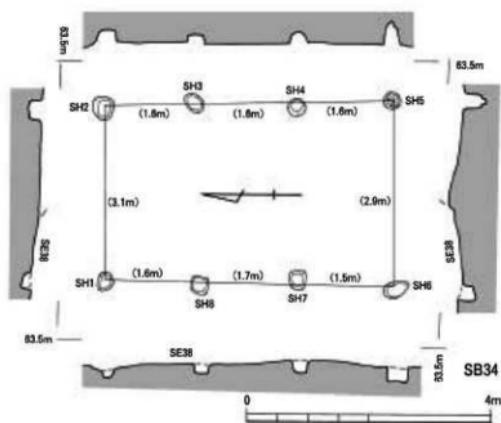
第40表 SB32柱穴計測表

第57図 S B32実測図 (S = 1/80)



第41表 SB33柱穴計測表

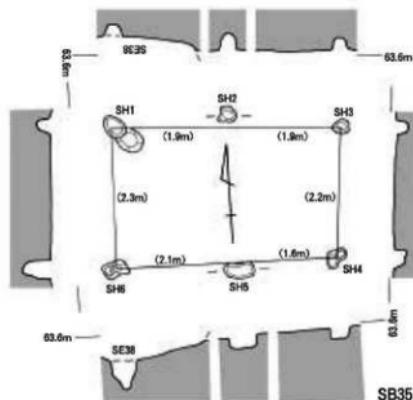
柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(m)	柱底・遺物等
S H1	30×28	56	
S H2	46×40	93	
S H3	42×36	100	
S H4	50×38	86	
S H5	45×—	82	
S H6	42×38	98	



第42表 SB34柱穴計測表

柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(m)	柱底・遺物等
S H1	26×26	36	
S H2	42×26	26	
S H3	30×26	20	
S H4	30×28	14	
S H5	30×24	12	
S H6	36×32	20	
S H7	36×25	17	
S H8	30×28	18	

第58図 S B33・S B34実測図 (S = 1/80)

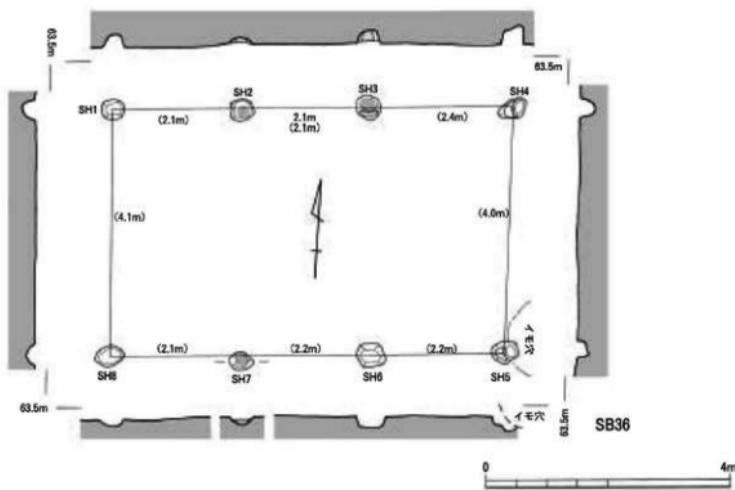


第43表 SB35柱穴計測表

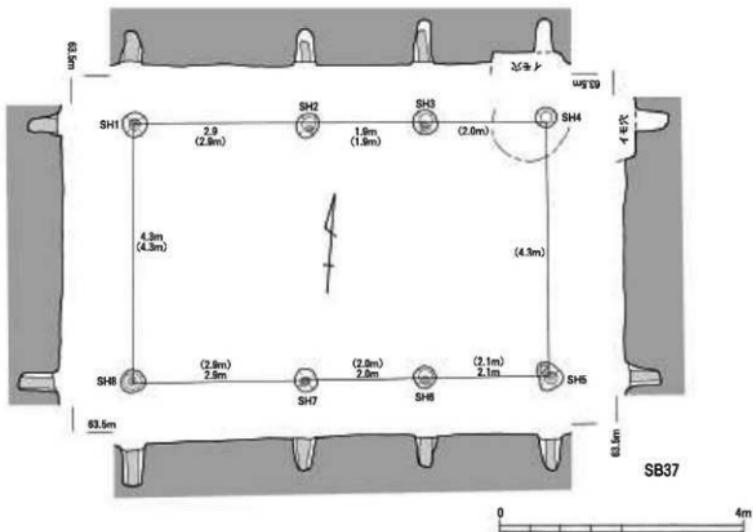
柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱種・造物等
S H1	44×30	20	
S H2	28×26	26	
S H3	28×24	18	
S H4	28×18	18	
S H5	50×22	18	
S H6	42×24	50	

第44表 SB36柱穴計測表

柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱種・造物等
S H1	38×32	20	
S H2	38×36	10	20×18
S H3	42×40	22	24×22
S H4	50×30	24	
S H5	44×35	10	
S H6	42×40	26	
S H7	42×30	24	20×18
S H8	46×34	12	



第59図 S B35・S B36実測図 (S = 1/80)



第45表 SB37柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	40×38	52	18×14	SH4	36×30	(52)		SH7	40×38	52	20×16
SH2	38×32	68	16×14	SH5	44×—	56	18×14	SH8	42×36	64	18×14
SH3	40×40	72	18×16 18×18 18×20	SH6	36×36	50	14×12				

第46表 SB38柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	32×32	28		SH5	36×30	48		SH9	42×36	30	
SH2	34×28	22		SH6	46×34	44		SH10	28×28	(30)	
SH3	30×26	24		SH7	30×28	(40)					
SH4	28×—	36		SH8	36×26	32					

第47表 SB39柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	30×30	46		SH5	42×32	24		SH9	38×36	32	
SH2	40×28	22		SH6	50×42	24		SH10	40×26	30	
SH3	40×36	24		SH7	26×20	(20)					
SH4	38×32	16		SH8	30×30	34					

第60図 SB37実測図 (S=1/80)

### S B37出土遺物（第73図199～201）

寛永通宝（199、200、201）の199と200はともに2枚重なり、201は4枚重なる。いずれもS H 3の上部（検出面から15～20cm）から出土している。

### S B38（第61図）

3区東部で検出した建物で、区画溝8・11内に位置する。梁行2間（4.16m）、桁行3間（6.48m）の南北棟である。梁行柱間は1.9～2.2m、桁行柱間は1.9～2.5mである。柱掘方は径0.26～0.46mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-6°-Wで、身舎の面積が27.0m<sup>2</sup>を測る。S B37、S B39、S B40と重複するが、柱穴の直接的な切り合い関係はない。

### S B39（第61図）

3区東部で検出した建物で、区画溝11に重複し、区画溝8内に位置する。梁行2間（3.0m）、桁行3間（5.28m）の東西棟である。梁行柱間は1.4～1.6m、桁行柱間は1.6～1.8mである。柱掘方は径0.2～0.42mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-87°-Eで、身舎の面積が15.8m<sup>2</sup>を測る。S B40、S B38、S E42と重複する。S B40、S B38は、柱穴の直接的な切り合い関係はないが、S E42に切られる。

### S B40（第62図）

3区東部で検出した建物で、区画溝11に重複し、区画溝8内に位置する。梁行2間（3.48m）、桁行3間（6.0m）の東西棟である。梁行柱間は1.6～1.8m、桁行柱間は1.9～2.1mである。柱掘方は径0.18～0.5mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-90°-Wで、身舎の面積が20.9m<sup>2</sup>を測る。S B39、S B38、S E42と重複する。S B39、S B38は、柱穴の直接的な切り合い関係はないが、S E42に切られる。

### S B41（第62図）

3区東部隅で検出した建物で、区画溝8内に位置する。東側が調査区外へ続くため、全体の規模は明らかでないが、梁行1間（4.4m）、桁行3間以上（6.88m以上）の東西棟であると思われる。梁行柱間は4.4m、桁行柱間は2.1～2.6mである。柱掘方は

径0.28～0.46mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-86°-Eで、身舎の面積が31.7m<sup>2</sup>以上を測る。S B42、S E52と重複する。S B42は柱穴の直接的な切り合い関係はない。S E52との切り合い関係は不明。

### S B42（第63図）

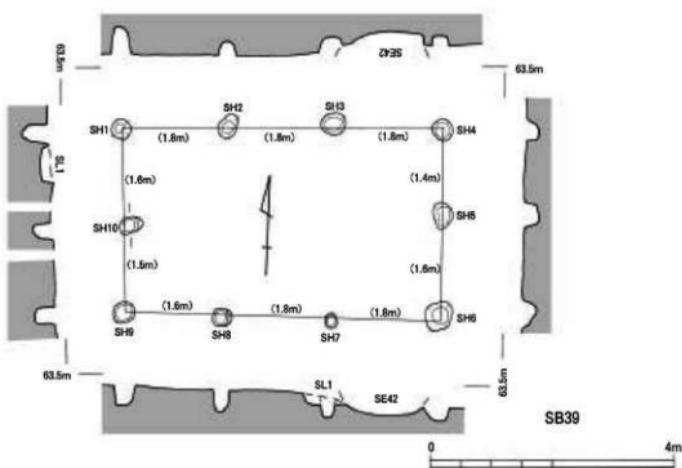
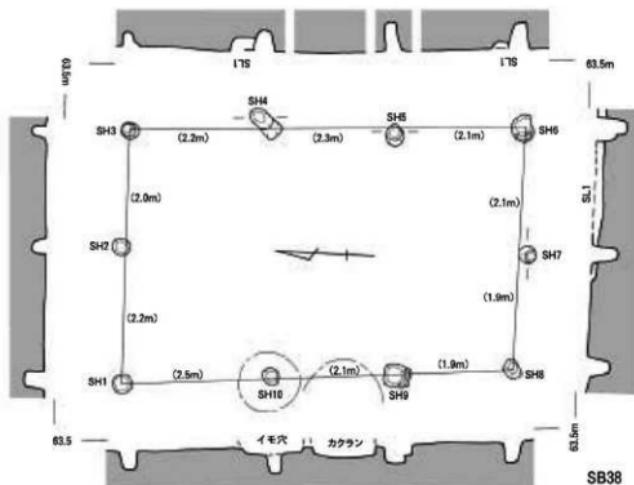
3区東部隅で検出した建物で、区画溝8内に位置する。梁行1間（4.3m）、桁行4間（8m）の東西棟である。梁行柱間は4.0～4.3m、桁行柱間は1.6～2.3mである。柱掘方は径0.34～0.6mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-85°-Eで、身舎の面積が34.4m<sup>2</sup>を測る。S B41、S B43、S E43、S E52と重複する。S B41、S B43、S E43に切られる。S E52との切り合い関係は不明である。

### S B43（第64図）

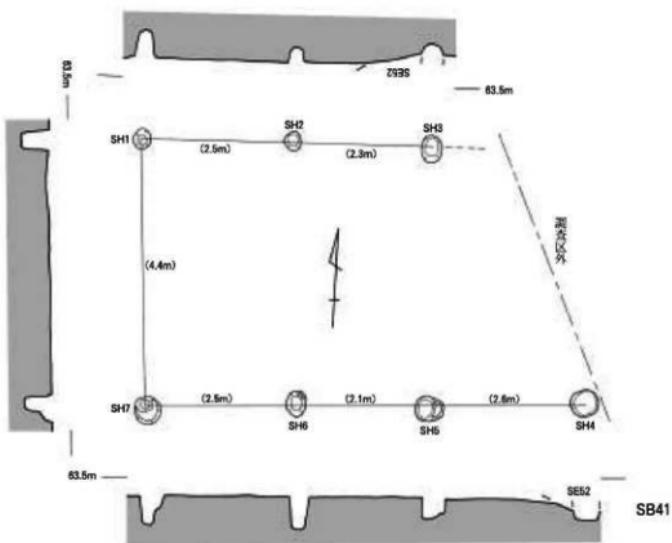
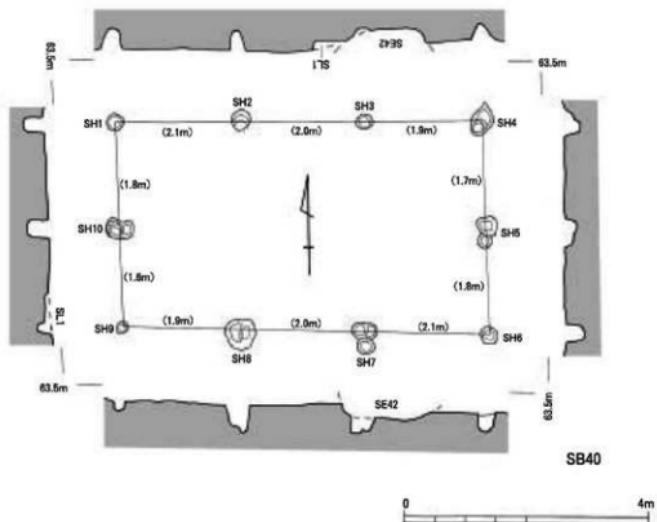
3区南東部で検出した建物で、区画溝8内に位置する。梁行2間（5.2m）、桁行4間（7.96m）の南北棟である。梁行柱間は2.4～2.8m、桁行柱間は1.9～2.0mである。柱掘方は径0.3～0.54mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-1°-Wで、身舎の面積が41.4m<sup>2</sup>を測る。S B42、S B44、S B45、S E52と重複する。S B42、S B44、S B45は、柱穴の直接的な切り合い関係はないが、S E52を切る。

### S B44（第65図）

3区南東部隅で検出した四面庇付建物で、区画溝11に重複し、区画溝8内に位置する。梁行1間（3.9m）、桁行5間（11.84m）の東西棟である。梁行柱間は3.9m、桁行柱間は2.3～2.4mである。柱掘方は径0.2～0.3mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.10～0.18mである。主軸はN-85°-Eで、身舎の面積が46.2m<sup>2</sup>、庇部分を含めた面積が82.3m<sup>2</sup>を測る。S B45、S B43、S E42と重複する。S B45、S B43は、直接切り合い関係はないが、S E42に切られる。



第61図 S B38・S B39実測図 (S = 1/80)



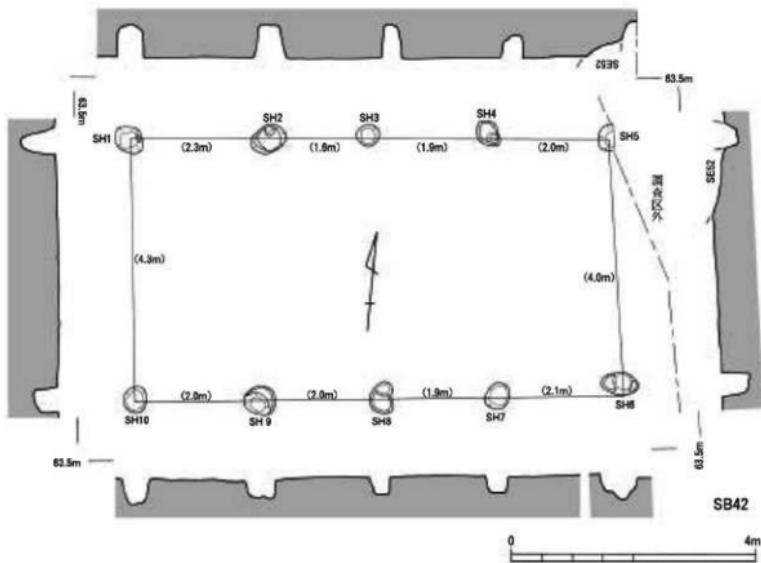
第62図 SB40・SB41実測図 (S = 1/80)

第48表 SB40柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
S H1	30×28	32		S H5	30×30	20		S H9	18×18	22	
S H2	34×30	32		S H6	28×28	28		S H10	30×—	34	
S H3	26×24	(10)		S H7	26×—	(22)					
S H4	48×34	26		S H8	50×48	46					

第49表 SB41柱穴計測表

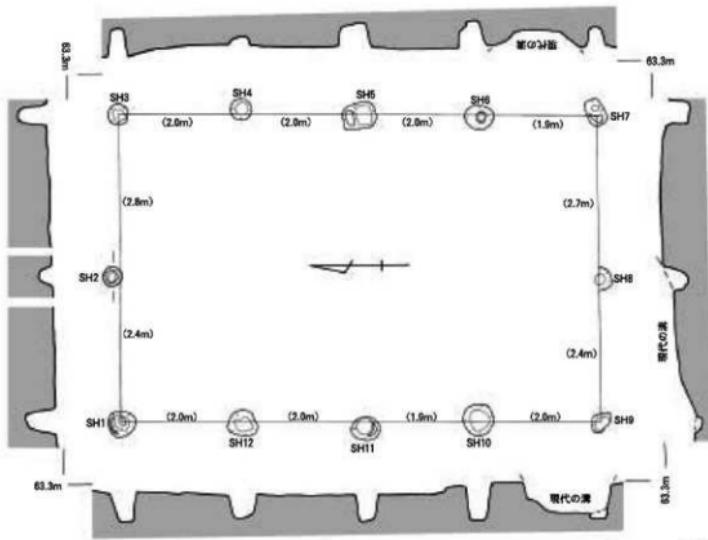
柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
S H1	34×30	44		S H4	46×40	(14)		S H7	44×44	44	
S H2	30×28	22		S H5	45×40	38					
S H3	44×34	(14)		S H6	42×32	54					



第50表 SB42柱穴計測表

柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
S H1	44×42	52		S H5	40×—	(30)		S H9	52×48	28	
S H2	60×44	52		S H6	38×—	34		S H10	42×40	40	
S H3	36×34	52		S H7	44×40	26					
S H4	46×36	36		S H8	52×38	26					

第63図 S B42実測図 (S = 1/80)



SB43

第51表 SB43柱穴計測表

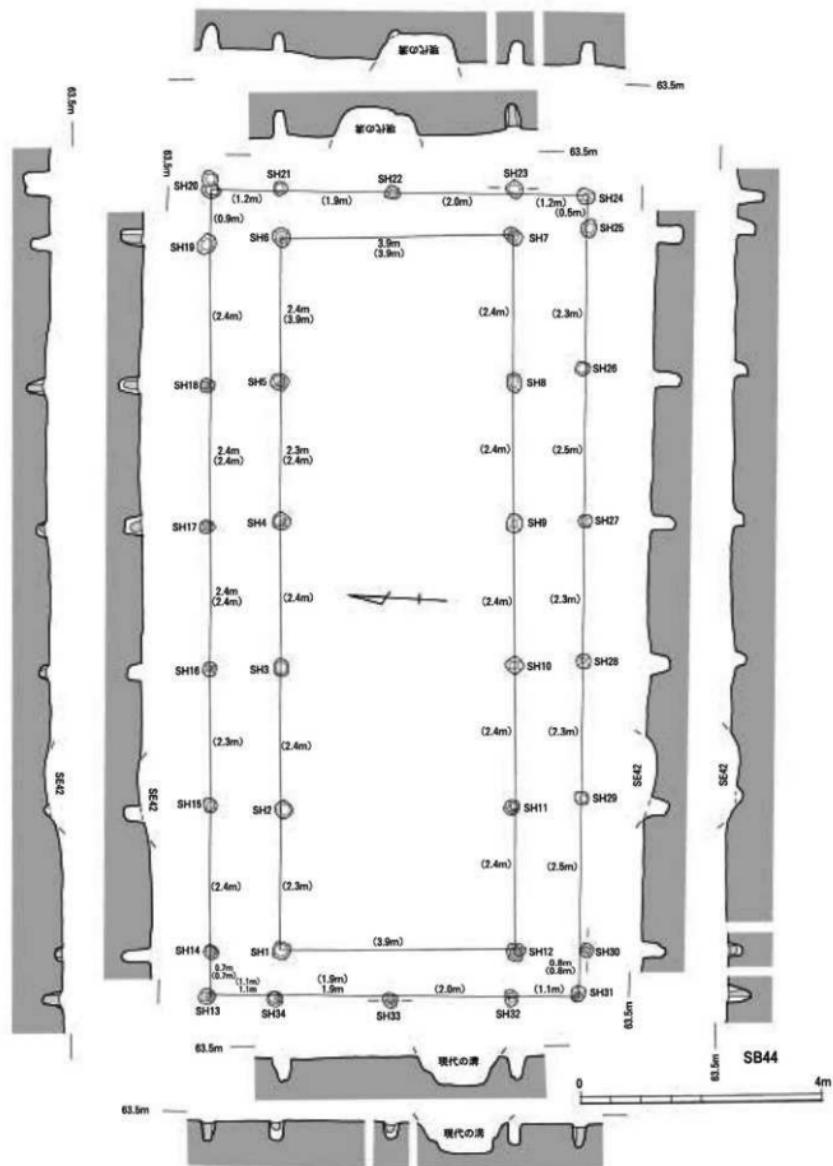
柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	45×42	46		SH5	54×40	42		SH9	30×30	(10)	
SH2	30×30	22		SH6	54×40	44		SH10	50×50	56	
SH3	34×34	44		SH7	44×30	34		SH11	48×38	42	
SH4	34×32	10		SH8	40×—	40		SH12	50×42	36	

第52表 SB44柱穴計測表

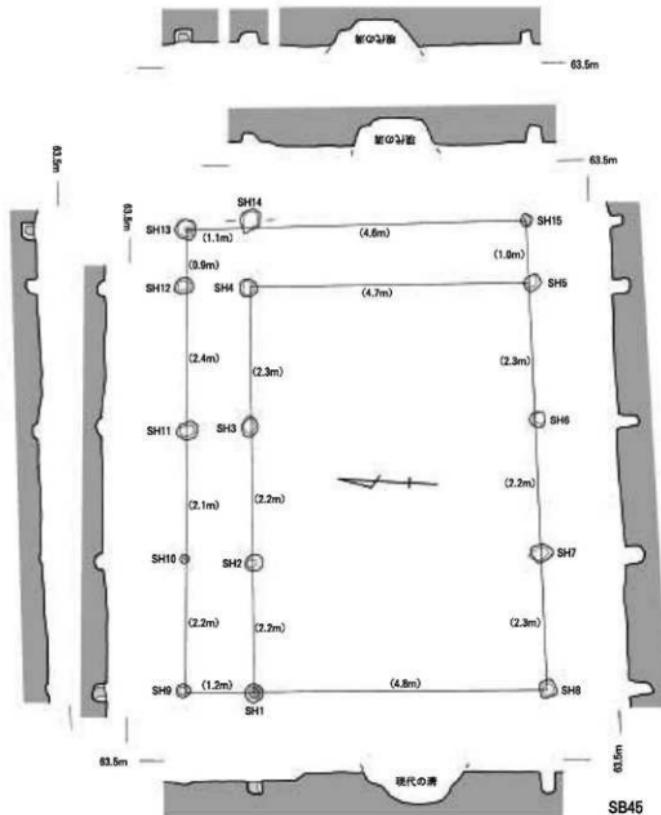
柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	28×26	44		SH13	26×26	32	16×14	SH25	30×24	28	
SH2	26×26	(32)		SH14	24×24	10	16×14	SH26	24×22	20	
SH3	28×26	22		SH15	22×20	(8)		SH27	20×20	16	
SH4	28×28	26	18×12	SH16	22×22	16	12×10	SH28	24×24	18	
SH5	30×28	32	18×12	SH17	22×22	16	14×12	SH29	22×20	(12)	
SH6	30×30	36	12×10	SH18	24×24	30	16×12	SH30	22×22	22	14×10
SH7	30×26	44	14×12	SH19	34×26	32		SH31	26×24	36	14×12
SH8	30×22	42		SH20	34×—	40		SH32	30×22	36	
SH9	30×24	38		SH21	24×22	28		SH33	24×22	26	16×10
SH10	26×26	30		SH22	20×16	(18)		SH34	26×26	30	18×10
SH11	24×20	40		SH23	30×26	36					
SH12	30×30	36		SH24	28×26	38					



第64図 S B43実測図 (S = 1/80)



第65図 SB44実測図 ( $S = 1/80$ )

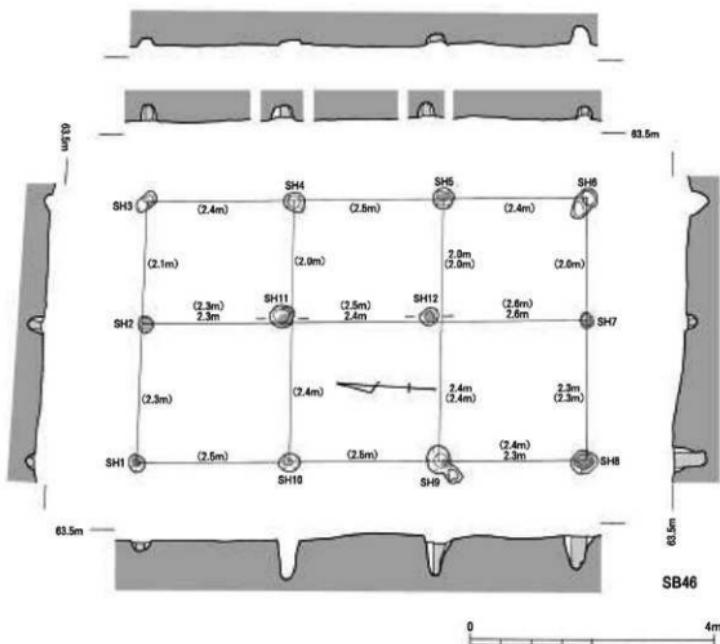


第53表 SB45柱穴計測表

柱穴番号	直径×延長(cm)	深さ(cm)	柱底・造物等	柱穴番号	直径×延長(cm)	深さ(cm)	柱底・造物等	柱穴番号	直径×延長(cm)	深さ(cm)	柱底・造物等
S H1	30×28	22	18×14	S H6	26×24	36		S H11	38×26	8	
S H2	30×28	14		S H7	30×30	32		S H12	32×24	20	
S H3	34×28	10		S H8	30×26	32		S H13	34×32	22	
S H4	28×28	14		S H9	22×20	5		S H14	34×30	16	
S H5	28×24	30		S H10	12×12	4		S H15	20×18	20	

0 4m

第66図 S B 45実測図 (S =1/80)



第54表 SB46柱穴計測表

柱穴番号	直径×総深(㎝)	深さ(㎝)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×総深(㎝)	深さ(㎝)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×総深(㎝)	深さ(㎝)	柱底・遺物等
SH1	30×28	18	14×14	SH5	34×34	16	20×16	SH9	46×38	62	16×14
SH2	26×24	24	10×10	SH6	34×—	—	—	SH10	34×30	82	—
SH3	40×24	12	—	SH7	26×20	20	14×12	SH11	40×36	22	20×16
SH4	34×30	8	—	SH8	44×38	52	28×18	SH12	30×26	22	16×16

第55表 SB47柱穴計測表

柱穴番号	直径×総深(㎝)	深さ(㎝)	柱底・遺物等	柱穴番号	直径×総深(㎝)	深さ(㎝)	柱底・遺物等	柱穴番号	直径×総深(㎝)	深さ(㎝)	柱底・遺物等
SH1	32×28	28	—	SH11	30×—	40	20×20	SH21	30×28	32	—
SH2	30×26	(12)	18×14	SH12	36×32	30	—	SH22	22×—	22	—
SH3	30×24	20	—	SH13	30×30	48	—	SH23	30×—	20	—
SH4	30×26	34	16×14	SH14	35×32	20	—	SH24	30×30	34	—
SH5	26×25	(30)	—	SH15	30×28	(18)	14×12	SH25	30×28	20	—
SH6	34×30	34	—	SH16	44×42	20	—	SH26	28×24	26	—
SH7	26×24	30	—	SH17	30×26	35	—	SH27	35×28	28	—
SH8	38×32	30	18×18	SH18	26×22	20	—	SH28	30×26	20	188
SH9	30×30	27	—	SH19	26×26	32	16×16	SH29	28×25	16	—
SH10	38×27	30	16×14	SH20	28×26	50	—				

第67図 S B46実測図 (S = 1/80)

#### S B45（第66図）

3区南東部隅で検出した二面庇付建物で、区画溝8内に位置する。梁行1間（4.8m）、桁行3間（6.68m）の東西棟である。梁行柱間は4.7～4.8m、桁行柱間は2.2～2.3mである。柱掘方は径0.24～0.34mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、長径0.18m、短径0.14mである。主軸はN-83°-Eで、身舎の面積が32.1m<sup>2</sup>、庇部分を含めた面積が44.1m<sup>2</sup>を測る。S B44、S B43と重複する。柱穴の直接的な切り合い関係はない。

#### S B46（第67図）

3区南東部で検出した総柱建物で、区画溝8内に位置する。梁行2間（4.32m）、桁行3間（7.24m）の南北棟である。梁行柱間は2.0～2.3m、桁行柱間は2.4～2.5mである。柱掘方は径0.2～0.44mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.10～0.28mである。主軸はN-4°-Wで、身舎の面積が31.3m<sup>2</sup>を測る。S E39と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

#### S B47（第68図）

3区南東部隅で検出した四面庇付建物で、区画溝11に重複し、区画溝8内に位置する。南部隅が調査区外にかかるが、梁行2間（4.08m）、桁行5間（12.28m）の南北棟であると想定される。梁行柱間は2.0～2.1m、桁行柱間は2.3～2.6mである。柱掘方は径0.24～0.38mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.12～0.20mである。主軸はN-6°-Wで、身舎の面積が50.1m<sup>2</sup>、庇部分を含めた面積が98.0m<sup>2</sup>を測ることが想定される。S E39、S E50、S E42と重複する。S E50とは、直接的な切り合い関係はないが、S E39、S E42に切られる。

#### S B47出土遺物（第73図188）

188は、中国産白磁皿で口唇部の釉を剥いだいわゆる口禿である。

#### S B48（第69図）

3区南部隅で検出した建物で、区画溝8内に位置

している。梁行1間（3.1m）、桁行2間（4.84m）の南北棟である。梁行柱間は3.1m、桁行柱間は2.4～2.6mである。柱掘方は径0.22～0.44mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-1°-Wで、身舎の面積が15.0m<sup>2</sup>を測る。

#### S B49（第69図）

4区北部で検出した建物で、区画溝8・区画溝9内に位置している。梁行1間（3.4m）、桁行3間（7.56m）の東西棟である。梁行柱間は3.4m、桁行柱間は2.2～2.8mである。柱掘方は径0.2～0.28mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-82°-Eで、身舎の面積が25.7m<sup>2</sup>を測る。S D3と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

#### S B50（第70図）

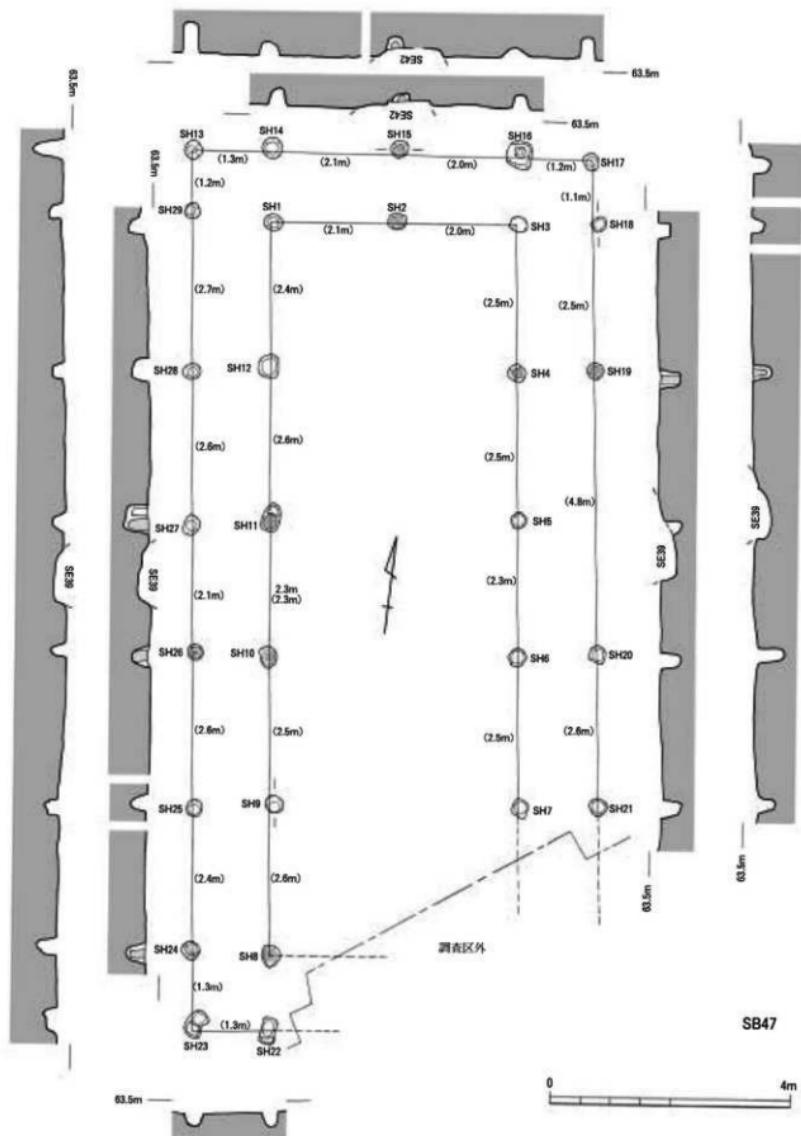
4区北部で検出した建物で、区画溝8・9内に位置する。梁行2間（3.52m）、桁行2間（4.56m）の東西棟である。梁行柱間は1.4～2.1m、桁行柱間は2.1～2.3mである。柱掘方は径0.16～0.28mで、ほぼ円形を呈している。主軸はN-81°-Eで、身舎の面積が16.1m<sup>2</sup>を測る。S E37、S B51と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

#### S B51（第71図）

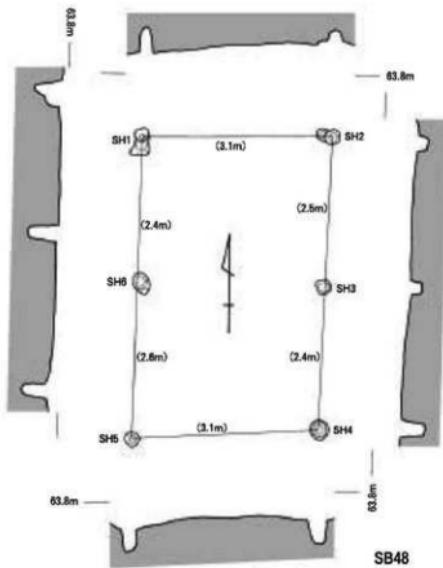
4区北部で検出した建物で、区画溝8・9内に位置する。東側が削平を受けているため全体の規模は明らかではないが、梁行2間（3.56m）、桁行4間以上（8.68m以上）で2面以上の庇をもつ東西棟であると思われる。梁行柱間は1.7～1.9m、桁行柱間は2.0～2.4mである。柱掘方は径0.22～0.44mで、ほぼ円形を呈している。確認された柱痕は、径0.12mである。主軸はN-82°-Eで、身舎の面積が30.9m<sup>2</sup>以上、庇部分を含めた面積が43m<sup>2</sup>以上を測る。S E37、S B50と重複し、S E37に切られる。S B50とは直接的な切り合い関係はない。

#### S B52（第72図）

4区中央や北で検出した四面庇付建物で、区画溝8・9に重複する。梁行1間（3.5m）、桁行3間

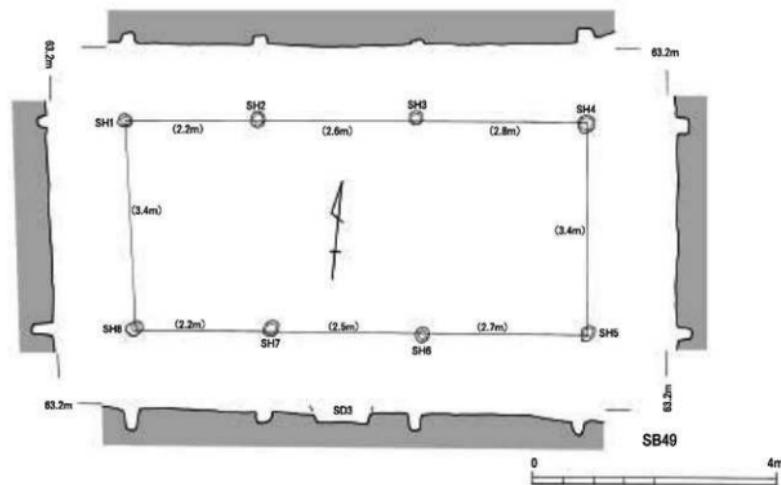


第68図 S B47実測図 (S = 1/80)



第56表 SB48柱穴計測表

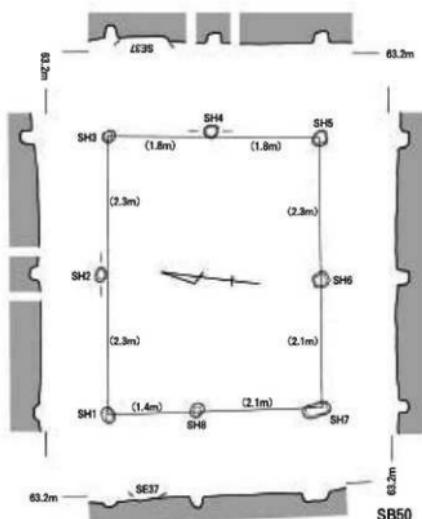
柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱幅・溝幅
SH1	20×20	14	
SH2	26×20	12	
SH3	24×20	6	
SH4	28×26	24	
SH5	28×20	20	
SH6	26×22	26	
SH7	26×24	16	
SH8	26×20	34	



第57表 SB49柱穴計測表

柱穴番号	直径×高さ(cm)	深さ(cm)	柱幅・溝幅
SH1	28×20	8	
SH2	24×16	16	
SH3	22×18	22	
SH4	22×20	16	
SH5	24×22	20	
SH6	26×24	20	
SH7	20×—	16	
SH8	26×20	16	

第69図 S B48・S B49実測図 (S=1/80)



第58表 SB50柱穴計測表

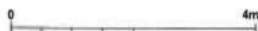
柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	28×20	8	
SH2	24×16	16	
SH3	22×18	22	
SH4	22×20	16	
SH5	24×22	20	
SH6	28×24	20	
SH7	20×—	16	
SH8	28×20	16	

第59表 SB51柱穴計測表

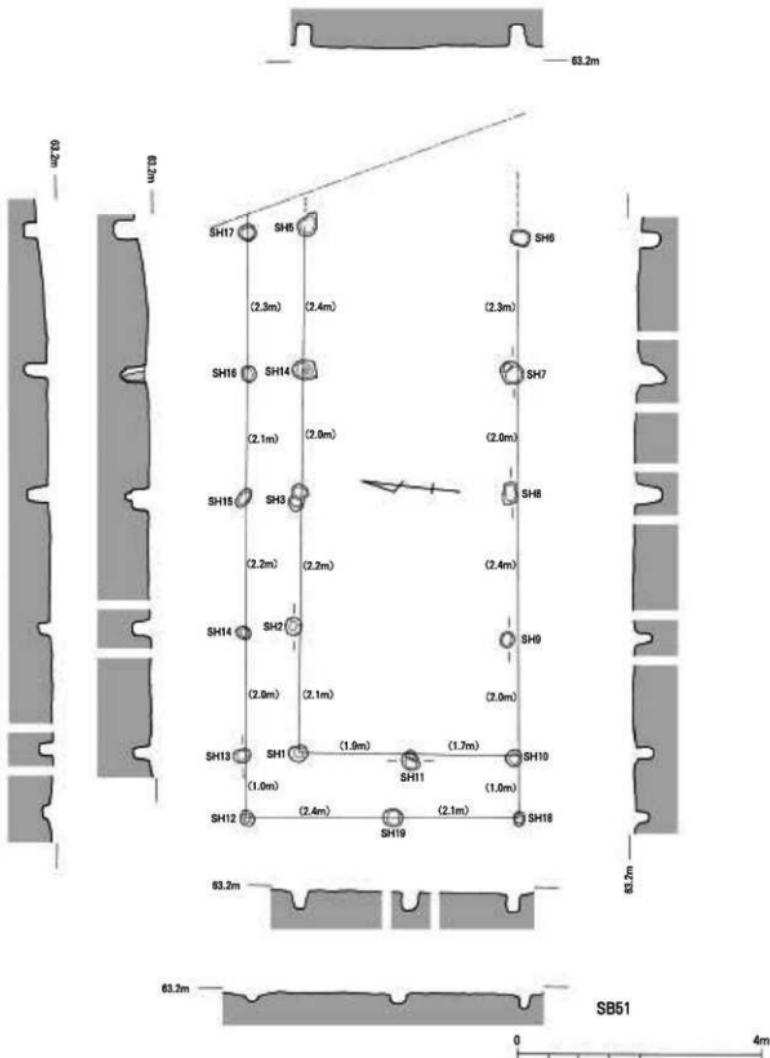
柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	30×24	28		SH8	36×22	40	
SH2	30×28	30		SH9	26×22	24	
SH3	28×—	35		SH10	28×26	28	
SH4	38×28	36	12×12	SH11	30×26	26	
SH5	44×30	36		SH12	24×24	10	
SH6	32×26	34		SH13	28×22	20	
SH7	40×36	44		SH14	28×20	18	

第60表 SB52柱穴計測表

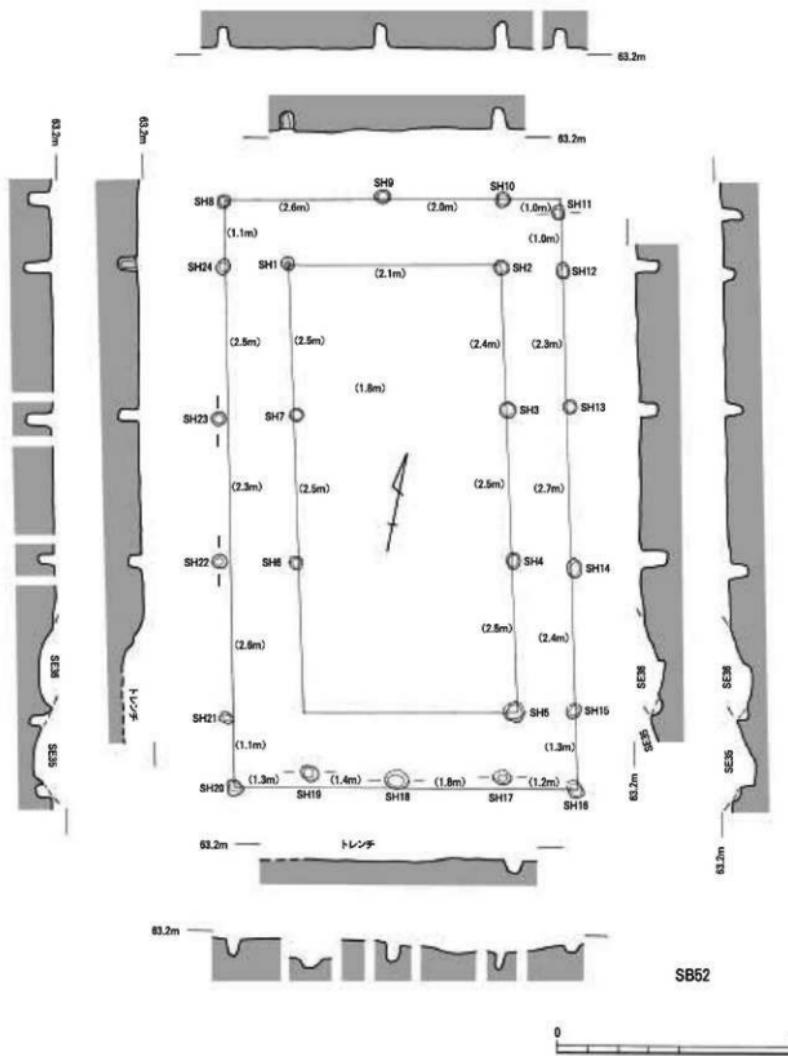
柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等	柱穴番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)	柱底・遺物等
SH1	22×20	30	12×10	SH9	26×20	36	
SH2	24×22	38		SH10	24×24	42	
SH3	26×24	28		SH11	22×20	32	
SH4	28×22	40		SH12	26×20	26	
SH5	34×—	(18)		SH13	22×22	26	
SH6	22×20	20		SH14	32×22	30	
SH7	22×22	30		SH15	26×—	(20)	
SH8	22×22	32		SH16	22×—	12	



第70図 SB50実測図 (S=1/80)

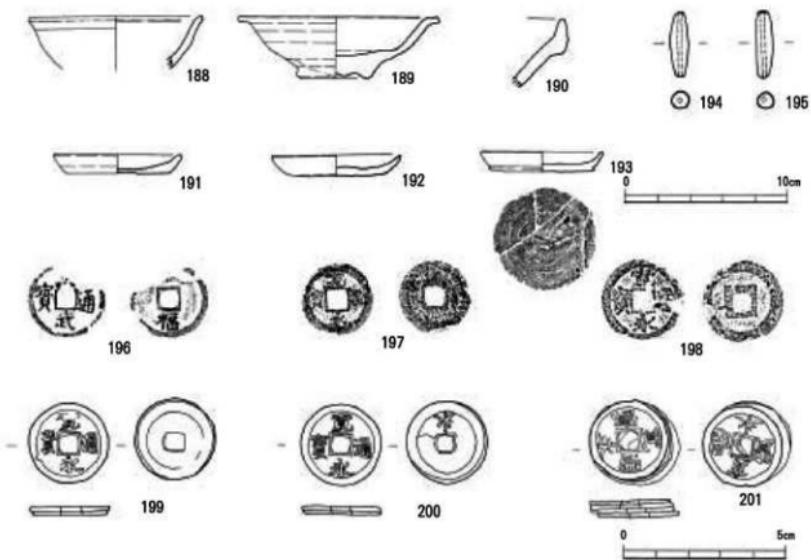


第71図 SB51実測図 ( $S = 1/80$ )

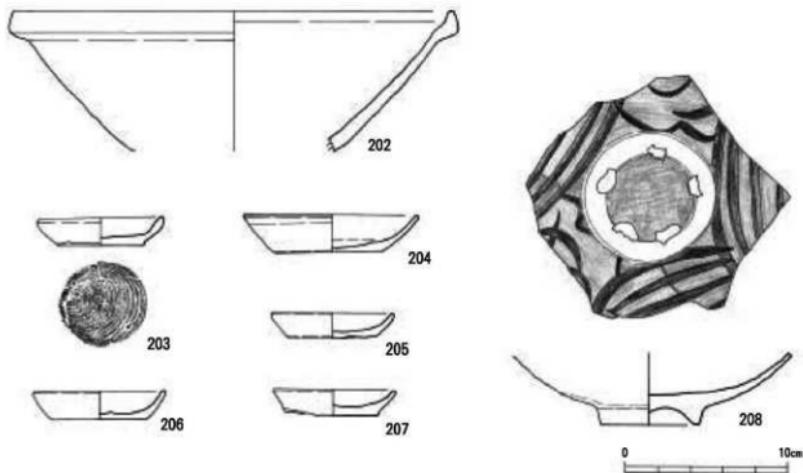


第72図 SB52実測図 (S = 1/80)





第73図 堀立柱建物出土遺物実測図



第74図 ピット出土遺物実測図

## 5 土坑（SC；第75～79図、第70表）

1区から4区では大小多数の土坑が検出された。いずれも、埋土の状況や他遺構との重複関係等から中世から近世のものであると判断される。

### SC 1（第75図）

隅丸長方形プランで、長軸3m、短軸1.3mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.2mである。

遺物は、土器小片1点が出土しているのみである。

### SC 2（第75図）

楕円形プランで、長軸1m、短軸0.7mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.6mである。

大きな円礫が中心部に置かれ、周りを小～中程度の大円礫や被熱の作用を受けて割れたと思われる角礫が閉む。礫はほとんどが赤化礫であり、底に近い所に集中する。他の出土遺物はない。

### SC 3（第75図）

隅丸長方形プランで、長軸2.8m、短軸2.3mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.5mである。

遺物は、土器小片、中世の陶器等小片が、僅かに出土している。

### SC 4（第75図）

ややいびつな隅丸長方形プランで、長軸2.5m、短軸1.9mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは、0.4mである。

遺物は、中世の土師皿小片や陶磁器等小片が、僅かに出土している。

### SC 5（第75図）

隅丸長方形プランで、長軸2.6m、短軸1.2mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは、0.2mである。

遺物は、土器小片や中世から近世の陶磁器等小片が、僅かに出土している。

## SC 6（第76図）

隅丸長方形プランで、長軸2.2m、短軸1.3mで、底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは、0.1mである。複数のビットと切り合った関係があり、全てビットがSC 6を切っている。

遺物は、近世の陶磁器小片が、僅かに出土している。

### SC 7（第76図）

東側が調査区外のため平面プラン等の状況は不明である。壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は、土器小片、中世から近世の陶磁器等小片が僅かに出土している。

### SC 8（第76図）

楕円形プランで、西側にテラスを有し、底面は平底を呈する。長軸1.2m、短軸1mで断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.3mである。

出土遺物は無い。SE 5と重複し、SE 5に切られる。

### SC 9（第76・80図210）

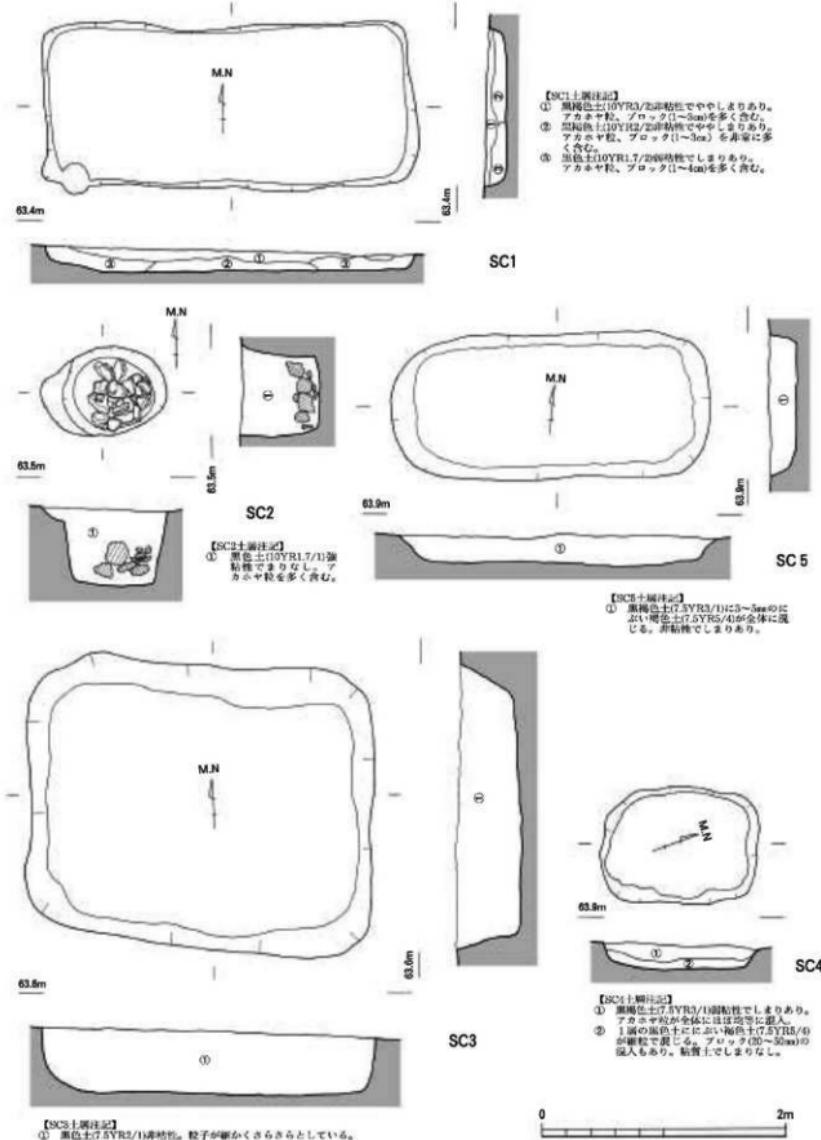
円形プランで、長軸1m、短軸0.9mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.1mである。西側に位置するビットをSC 9が切っている。

遺物は、壺(210)である。肩部に櫛描き波状文が施され、外面は口縁部から頸部にかけて僅かに自然釉が見られる。内面は口縁部分にまとまった状態で自然釉が見られる。褐灰色で目の細かい良質の胎上で焼成は堅緻である。SE 3、6と重複し、SE 3、6を切る。

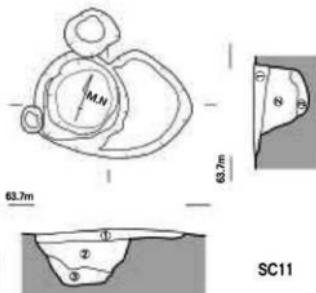
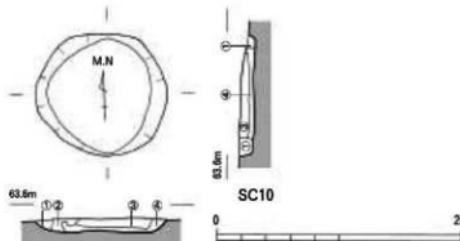
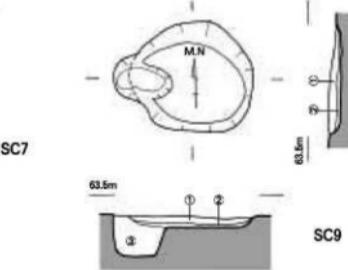
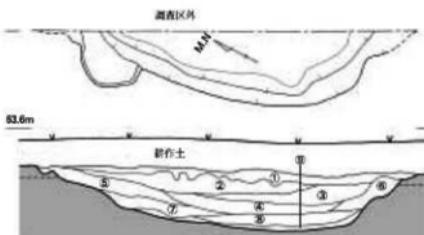
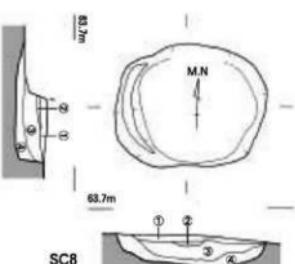
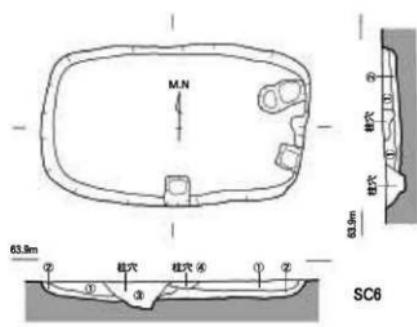
### SC 10（第76・80図209）

円形プランで、長軸1.1m、短軸1mで底面は平底を呈する。壁は東側よりも西側が緩く立ち上がる。検出面からの深さは0.1mである。

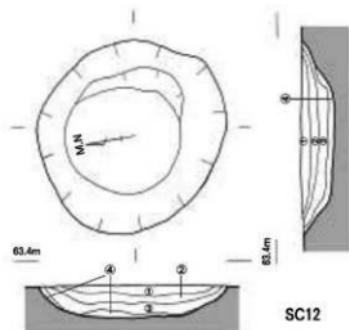
遺物は、土師質の鉢(209)である。外面にススの付着が確認される。その他、中世の器種不明土師質小片が1点出土している。



第75図 SC1～SC5実測図 (S=1/40)

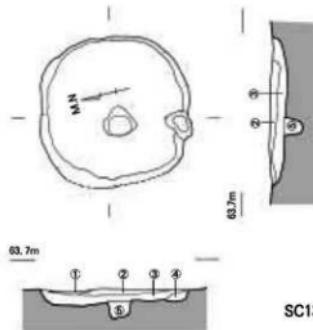


第76図 SC 6~SC 11実測図 (S=1/40)



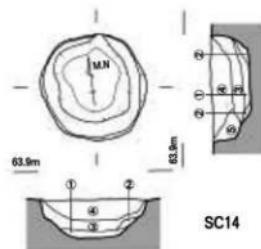
SC12

**[SC12土層注記]**  
 ① 黒褐色土(10YR3/1)粘性。しまりあり。底(10cm)を多量に含む。  
 ② 黑褐色土(10YR3/1)粘性。しまりなし。アカホヤ粒を僅に含む。  
 ③ 黄褐色土(10YR3/1)粘性。しまりなし。  
 ④ 黑褐色土(10YR3/1)粘性。しまりなし。  
 ⑤ 黑褐色土(10YR3/1)粘性。しまりなし。



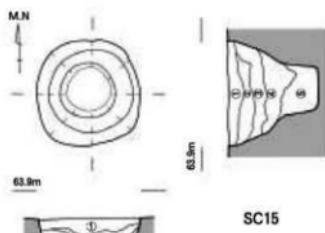
SC13

**[SC13土層注記]**  
 ① 黒褐色土(10YR2/2)非粘性でしまりあり。アカホヤ粒(5~5mm)を多く含む。  
 ② 黑褐色土(10YR2/1)粘性でしまりあり。第1層と似るがアカホヤ粒の混じる割合が多い。  
 ③ 黑褐色土(10YR1/7/1)粘性でややしまりなし。  
 ④ 黑褐色土(10YR1/7/1)粘性でしまりなし。アカホヤ粒(5mm以下)を全体に含む。  
 ⑤ 黑褐色土(10YR1/7/1)非粘性で非常にしまりがない。アカホヤ粒(5mm以下)を全体に含む。



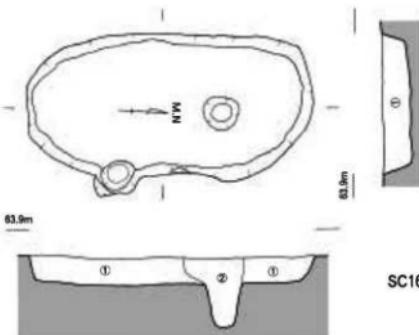
SC14

**[SC14土層注記]**  
 ① 黄褐色土(7.5YR3/1)粘性。しまりあり。アカホヤ粒を少額含む。アカホヤブロック(10mm)を含む。  
 ② 黑褐色土(10YR1/7/1)第1層と似ているが5cm程度のアカホヤブロックを含む。  
 ③ 黄褐色土(7.5YR3/1)粘性あり。アカホヤ粒を全体に含む。褐褐色土(7.5YR3/3)を少額含む。  
 ④ 黑褐色土(10YR1/7/1)粘性がありしまりなし。アカホヤ粒、アカホヤブロックを全体に含む。  
 ⑤ 褐褐色土(7.5YR3/1)第1層と同じだが褐褐色土(7.5YR3/3)ブロックを多く含む。



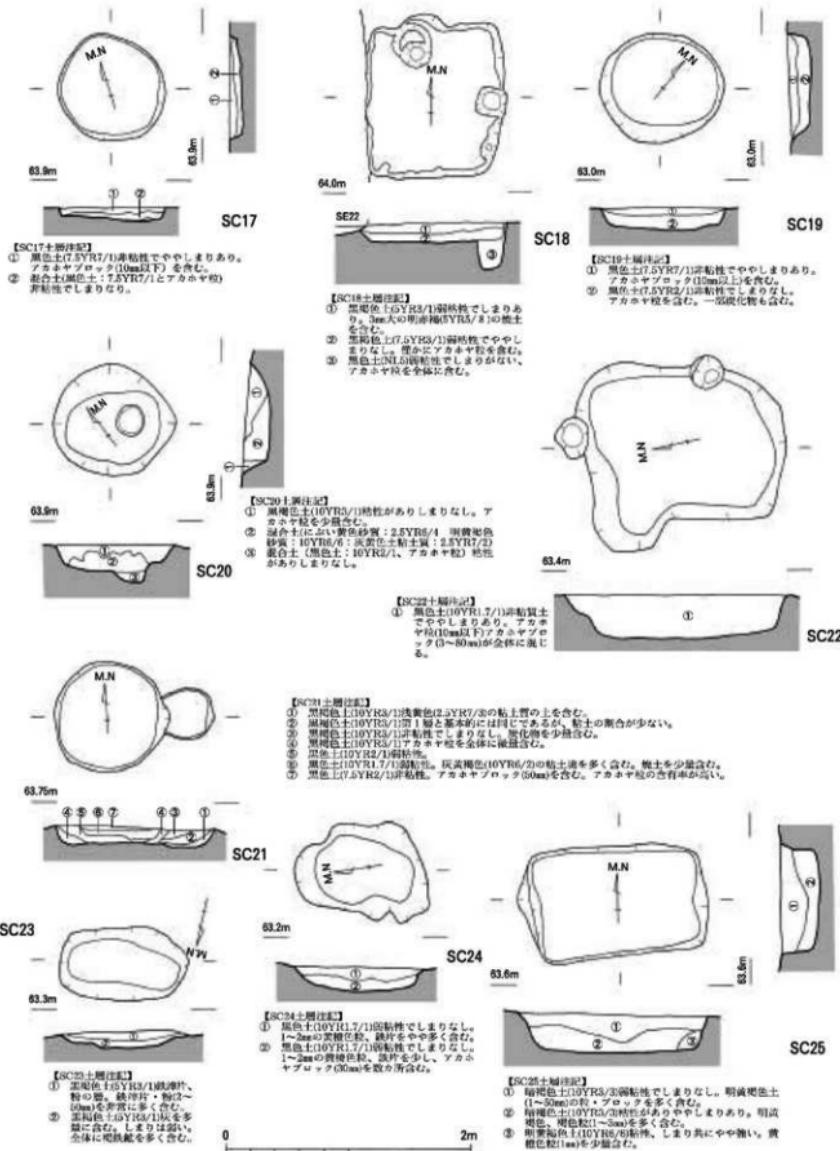
SC15

**[SC15土層注記]**  
 ① 黑褐色土(7.5YR2/1)非粘性でしまりあり。カホヤブロック(5mm以下)を含む。  
 ② 黑褐色土(7.5YR3/1)非粘性。50~70mmの厚い褐褐色土(7.5YR3/3)ブロック。アカホヤブロック(3mm以下)を含む。  
 ③ 黑褐色土(7.5YR3/1)非粘性でしまりなし。  
 ④ 混合土(7.5YR3/1)第1層: 黑褐色土(7.5YR3/1), 褐褐色土: 10YR3/3, アカホヤ粒、アカホヤブロックを含む。  
 ⑤ 黑褐色土(黑褐色土: 10YR3/1, 褐褐色土: 10YR3/3)にわざりにアカホヤ粒を含む。非粘質土で軟質。

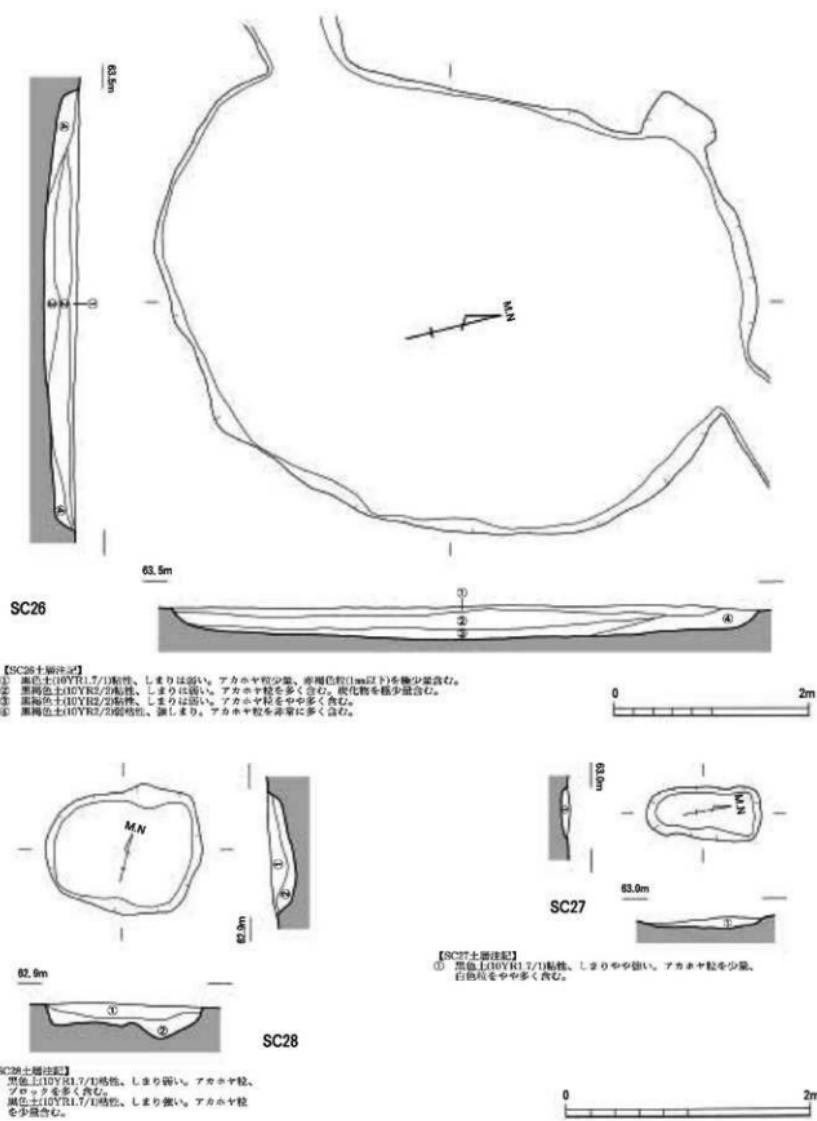


SC16

第77図 S C 12~S C 16実測図 (S = 1/40)



第78図 S C17~S C25実測図 (S=1/40)



第79図 S C 26～S C 28実測図 ( $S=1/50 \cdot 1/40$ )

#### S C11 (第76図)

不整形プランで上部にテラスを有する土坑である。長軸1.2m・短軸0.8mで底面は平底を呈する。壁は北側がやや急に立ち上がり、検出面からの深さが0.5m（テラス部分で0.1m）である。3基のピットとの切り合い関係が見られるが、いずれもピットがS C11を切っている。

遺物は、土器小片、中世の土師皿小片が僅かに出土している。

#### S C12 (第77図)

円形プランで、長軸1.6m、短軸1.4mで底面は平底を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは0.3mである。

遺物は、時代、器種共に不明な小片が1点出土している。

#### S C13 (第77図)

円形プランで、西側上場が一部削平を受けている。2基の柱穴と切り合い関係にあるが、共に柱穴をS C13が切っている。長軸0.6m、短軸0.6mで底面は平底を呈する。壁は西側が緩く立ち上がり、検出面からの深さは0.1mである。

遺物は無い。

#### S C14 (第77図)

円形プランで、直径0.9mで底面は擂鉢状を呈する。断面形は舟底形で、検出面からの深さは0.3mである。

遺物は無い。

#### S C15 (第77図)

円形プランで、直径0.9mで平底を呈する。壁は過半部まではほぼ直角に立ち上がるが、それ以降は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは、0.7mである。

遺物は無い。

#### S C16 (第77図)

楕円形プランで、長軸2.3m、短軸1.2mで底面は

平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.2mである。中央や北側に1基、中央から東側に1基ピットが見られるが、ともにピットが土坑を切っている。

遺物は、土器小片が僅かと中世土師皿小片が、やまとまって出土している。

#### S C17 (第78図)

円形プランで、直径0.9で底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは、0.1mである。

遺物は無い。

#### S C18 (第78図)

隅丸長方形プランで、長軸1.3m、短軸1.2mで底面は平底を呈する。検出面からの深さは0.2mである。S E22、ピット2基と切り合い関係がある。西側はS E22に切られている。中央東側のピットは、S C18が切っており、北側のピットは、S C18を切っている。

遺物は、土器小片、中世から近世の陶磁器等が僅かと、中世土師皿小片がやまとまって出土している。S E22と重複し、S E22に切られる。

#### S C19 (第78図)

円形プランで、長軸1m、短軸0.9mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは、0.2mである。

遺物は、土器小片、中世の土師皿小片が僅かに出土している。

#### S C20 (第78図)

円形プランで、直径0.9mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.2mである。中央や東側にピットが1基あるが、ピットをS C20が切っている。

遺物は、土器小片が1点のみである。

#### S C21 (第78図)

円形プランで、直径0.9mで底面は平底を呈する。

断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.2mである。東側ピットをS C21が切っている。

遺物は無い。

#### S C22 (第78図)

不整形プランで、長軸0.8m、短軸0.6mで底面は平底を呈する。断面形は、逆台形状で、検出面からの深さは0.2mである。2基のピットと切り合い関係が見られるが、ともにピットをS C22が切っている。

遺物は、土器小片と中世の陶器、土師皿小片が僅かに出土している。

#### S C23 (第78図)

梢円形プランで、長軸1m、短軸0.6mで底面は平底を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは0.1mである。

直径2~50mm程の鉄片や鉄滓が多く含むが、焼土は確認されない。その他遺物は無い。鍛造鉄片等を廃棄した製鉄に関連する遺構の可能性が考えられる。  
S B29と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

#### S C24 (第78図)

不整形なプランで、長軸1.1m、短軸0.8mで底面はほぼ平底を呈する。壁は緩く立ち上がり、検出面からの深さは0.2mである。

直径3cm程の鉄滓が多く検出される。その他遺物は無く、焼土も確認されない。S B29と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

#### S C25 (第78・80図211)

隅丸長方形プランで、長軸1.5m、短軸0.9mで底面は平面を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.3mである。

遺物は、薩摩焼の土瓶蓋(211)である。口径7cm、器高2.5cmである。その他、近世後半の陶器小片が1点出土している。

#### S C26 (第79図)

梢円形プランで、長軸6m、短軸4.5mで底面は平面を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは0.4mである。

遺物は無い。S E39、53と重複するが、切り合い関係は不明である。

#### S C27 (第79図)

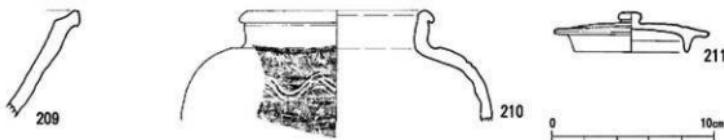
ややいびつな隅丸長方形プランで、長軸0.9m、短軸0.4mで、底面は平面を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは0.1mである。

遺物は土師皿小片1点のみである。

#### S C28 (第79図)

梢円形プランで、長軸1.3m、短軸1mで底面は、東西にかけて大きな波状の曲面を呈する。検出面からの深さは浅いところで0.2m、深いところで0.3mである。

遺物は無い。



第80図 土坑出土遺物実測図

## 6 土壙 (SD; 第81~83図、第71表)

平面形が隅丸長方形を基調とし底面が平坦な土坑のうち、副葬品と考えられる遺物を有する墓を土壙とした。

### SD 1 (第81図)

【立地】 SD 1は2区中央からやや南側に位置し、検出面は標高63.7mである。SB15と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

【規模】 隅丸長方形状のプランで、長軸0.9m、短軸0.5mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.2mである。表土を取り除いた所での検出であり、実際の掘り込み面よりもかなり下がった面での遺構検出となっている。長軸方向はN-10°-Wを指す。埋土は全体に径3~20mm程のアカホヤ火山灰ブロックを平均的に含んだ粘性の弱い黒色土の單一層である。

【遺物】 出土遺物は中央部床面から3cm程の浮いた位置で、2枚の銭貨が銹着した状態で確認された。「五銖銭」(212)の他は、風化が激しく種類を特定することができない。五銖銭の穿に縄と思われる繊維質が残存していることから、埋葬された時にはこれらの銭貨は一本の縄に通されていたものと推測される。

### SD 2 (第82図)

【立地】 SD 2は、3区中央からやや北側に位置し、検出面は標高63.5mである。

【規模】 隅丸長方形プランで、長軸1.2m、短軸0.6mで底面は平底を呈する。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.4mである。長軸方向はN-2°-Eを指す。

【遺物】 出土遺物は、床面から6cm程の浮いた位置で、中央から北東寄りに土師器の壺(213、214)が横に並ぶようにして2つ完形で出土した。

213は、口径12.9cm、底径7.7cm、器高4.4cm。214は、口径12.2cm、底径6.7cm、器高3.9cmで、ほぼ同程度の大きさである。ともに底部は笠切りで、外面には強いナデを施し、内面は粘土紐の痕が残る。体部がやや内湾気味で口縁部が丸みを帯びている。

### SD 3 (第83図)

【立地】 SD 3は、4区北側に位置し、検出面は標高63mである。SB49と重複するが、直接的な切り合い関係はない。

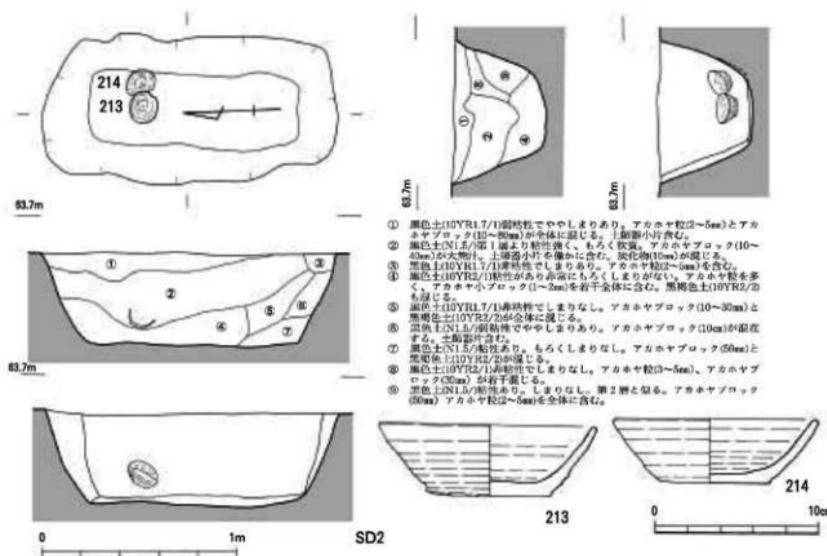
【規模】 隅丸長方形プランで、長軸1.7m、短軸1mで、底面は平面を呈する。壁は北側が緩く立ち上がり、検出面からの深さは0.2mである。長軸方向は、N-16°-Wを指す。

【遺物】 中央部の床面から3~5cm程の浮いた位置で銹着した銅錢数枚とガラス製の玉(216)1点が出土した。銭貨は中央部10cm四方の範囲に1枚~2枚重なった状態で碎け、3箇所ほどに分散して出土している。1枚は、「洪武通宝」(215)であることが確認されたが、それ以外は銭貨の風化が激しく、正確な枚数と種類は不明である。

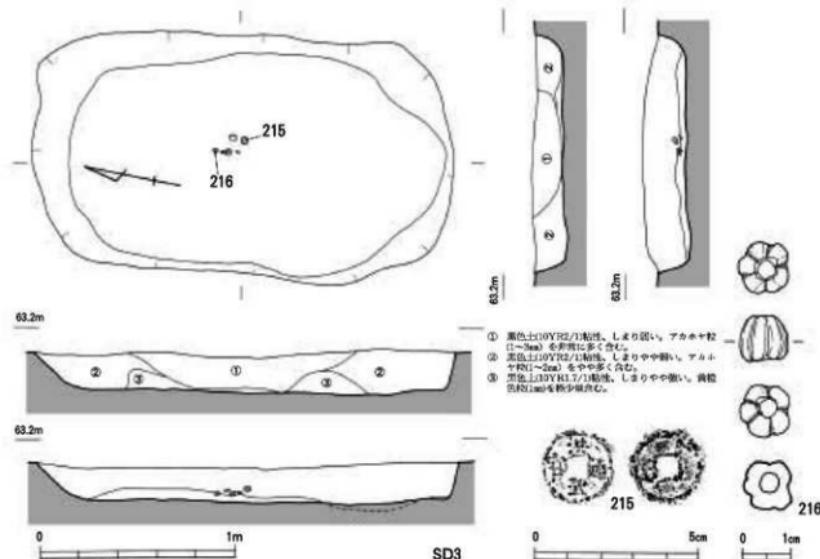
216は、直径1cm、重さ1.3gで、五弁の花形をしている。中心に3.5mmの穴があいた白色のガラス玉である。



第81図 SD 1実測図及び出土遺物実測図



第82図 SD 2 実測図及び出土遺物実測図



第83図 SD 3 実測図及び出土遺物実測図

## 7 石組遺構

本遺跡では、掘込みの床面及び壁面に川原石を組み上げた土抗が1基検出された。ここでは、この遺構を石組遺構と呼ぶ。構築時期は中世である。

### 1号石組遺構（第84図）

1号石組遺構は、2区北東部に位置する。SE13の埋土を掘り下げる途中でSE13と重複した形で検出したが、SE13との切り合い関係を明らかにすることはできなかった。また、石組遺構の東・西・北壁上部はSE13の埋土に含まれる疊と判断し、一部取り上げてしまった箇所があるが、本來は南壁と同じように疊が組まれて直方体の空間をつくり出していたと推測される。

主軸はN-90°-Eである。掘り込みは、長軸約1.3m、短軸約1.0mの方形を呈し、検出面からの深さは約0.6mである。床面は壁面の構成疊よりも少し大きい円疊を平らな面を内側に向けて配置するとともに、疊厚に応じて掘り窪めることで床面全体が平らになるよう微調整している。壁面には長軸20~30cm前後の梢円形状の円疊が小口積みにされ、疊間には黒褐色土が詰められていた。また、遺構内の埋土は、黒色土(Hue N 2/1)層であるが、敷石上に約10cmの厚さで灰や炭化物が堆積していた。

遺構内面に露出している疊表面は赤化している部分があり、床面に灰や炭化物が堆積していたことなどから、内部で火が使用された可能性が高い。

㈱古環境研究所による放射性炭素年代測定（遺構内底部の炭化物）と植物珪酸体分析（底部の埋土）を行った結果、放射性炭素年代測定では、ほぼ鎌倉時代に相当する810±50年BP（西暦1190~1270年）の年代値が得られた。植物珪酸体分析では、遺構底部で、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、ススキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型も比較的多く検出された。遺構埋土では、遺構底部と比較してメダケ節型が増加しており、ススキ属型やネザサ節型は減少していた。以上のことから、石組遺構の内部には、何らかの目的でおもにメダケ属（メダケ節やネザサ節）等の竹節類の葉（枝）が入れられていたと推定される。また、ススキ属、イネ、ムギ属（穀殻）などが混在していた可能性も考えられる。

## 8 道路状遺構（SG：第85・86図）

### SG1（第85図）

2区南東部に位置する。検出全長は直線距離にして約6.3mを測り、主軸は概ね真北方向を取る。短軸0.3~0.5m、長軸0.7~1.1mの梢円形を呈し、僅かに光沢を伴う硬化面が飛び石状に連続して検出された。硬化面同士の間隔は、約0.3mを測る。埋土は、硬化層のみの1層であり、硬化層を外した深さは1~6.5cmと浅く、上部をかなり削平されているものと考えられる。底面は顯著な高低差ではなく、特別な下部構造は認められない。SB25と重複し、SG1がSB25を切る。出土遺物はない。

### SG2・SB3（第85・86図）

3区北部を東西に延びる。それを南北に走るSE1とSE23が切り、東側にSG2、西側にSG3が位置している。方向や位置関係、掘り込み部分の形状等から考えて、同一の道路状遺構であると考えられる。検出全長は、SE1とSE23に分断された部分を含めて、直線距離にして約39mである。

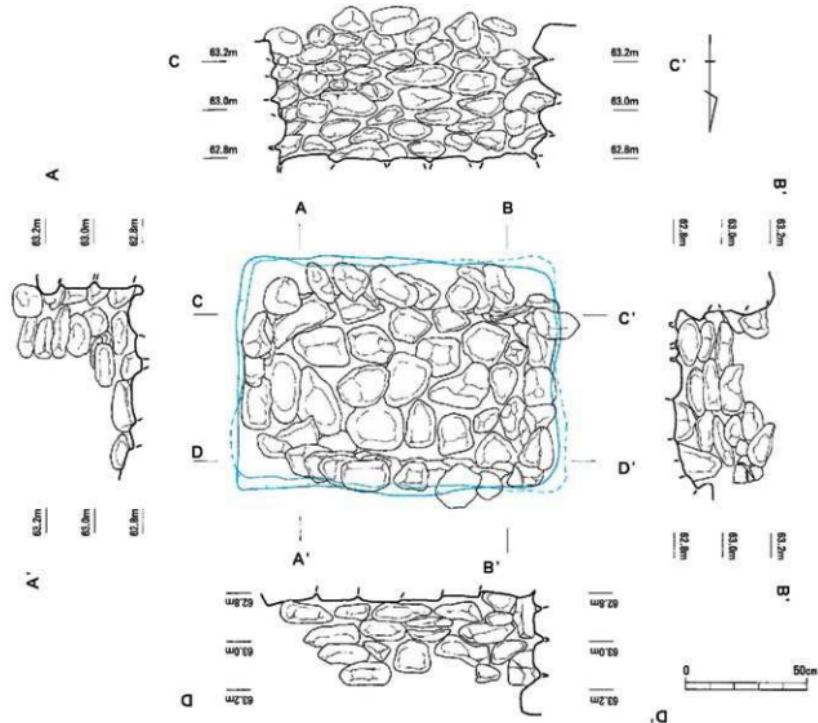
### SG2

幅0.9~1.2mで西に延びる。検出全長は直線距離にして、約14.5mである。波板状の掘り込みが見られ一部に硬化した凹凸部を有する。波板状の掘り込みは、長軸30~50cm、短軸25~30cmで10~30cmの間隔をおいて並んでいる。平面プラン、土層断面から判断すると、少なくとも3つの遺構の切り合いが確認される。

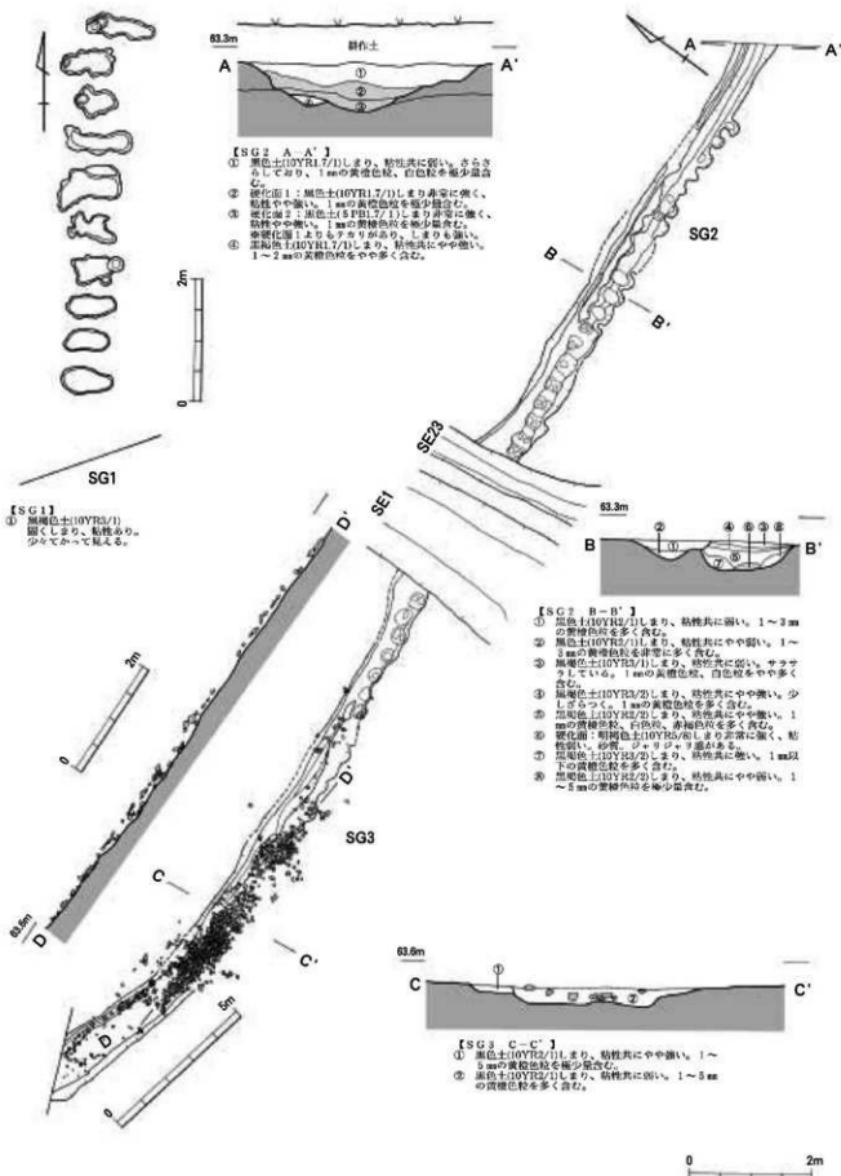
A-A'ラインの断面図からは、2枚の硬化層が重なり、その下にバックされた層④が確認される。2枚の硬化層は共に、版築等の形跡はない。道として利用され上部に負荷が加わることにより、層が締まり硬化していったものと推察される。2枚の層に分かれているのは、補修後再び道として利用された結果ではないかと考えられる。

切り合い関係は、層④を埋土とする小溝状の遺構があり、それを2枚の硬化層を埋土とする道路状遺構が切っていることが観察される。

B-B'ラインの断面図は、波板状遺構のくびれ部分にかかるように断面を切ったものである。この



第84図 石組造構実測図 ( $S = 1/20$ ) 及び石組造構埋土除去状況（北から）



第85図 SG1～SG3実測図及び土層図

断面からは、波板状を呈する遺構が埋土①・②の小溝状の遺構に切られていることが確認される。波板状のくびれ部分を少しづつ掘り下げていったところ、底の方に円形状に硬く締められた厚さ1cm程の砂層が確認された。B-B'ラインの断面図第⑥層がこれにあたる。また、A-A'ラインで確認された硬化層は、B-B'ラインの断面図からは観察されない。平面プランにおいても東から西に向かう途中で確認できなくなる。おそらく、硬化層は東から西へと続いていることが予想されるが、上部が削平されたことにより消滅したものと考えられる。

土層断面をもとに構築順を整理すると、まず、波板状の道路状遺構（B-B'③～⑧）ができ、次に道路状遺構を切る形で小溝状の遺構（A-A'④）が作られ、最後に硬化面を伴う道路状遺構（A-A'②③）が造られたのではないかと考えられる。

なお、A-A'ラインの断面図の硬化層上の第①層にあたる層からは、常滑焼や備前焼の小片等、中世の遺物のみが出土している。このことから考えると、これら3つの切り合いは、全て中世における切り合い関係だと考えられる。

### SG 3

SG 2を延長した部分に位置し、西に延びながらやや北側へと向かっている。幅0.7～1.5mで直線距離にして約19mである。直線部分は殆ど高低差は見

られないが、緩やかにカーブをするあたりから東から西に向かって高くなっている。SE 1、SE 23の横断部分から約4m西までは、形状等SG 2と同じ様相を呈しているが、それより西側については、最大25cm大の礫から3cm大の小さな礫の密集が確認される。西側端部は削平により礫が検出されていない部分もあるが、礫が確認できた部分の検出全長は、直線距離にして約15mである。しかし、この部分が路面として活用されていたのか、路面下の基礎部分なのかについては確定できていない。礫の平坦面を緻密に敷き並べている様子ではないが、意図的に礫の間に礫を隙間なく詰めるなどした様子が観察される。礫を外した部分の深さは0.05～0.15mである。硬化層は礫を外す過程でも確認されなかった。また、特別な下部構造も確認されなかった。

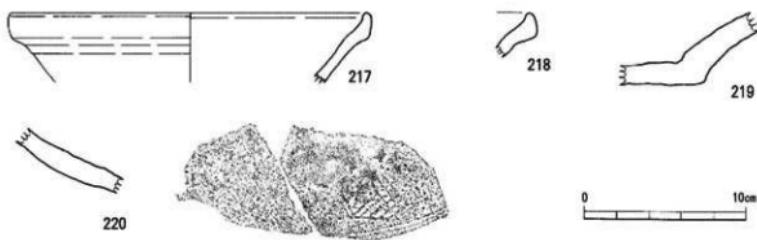
SG 2、SG 3ともに出土した遺物は、中世の陶磁器に絞られていた。

217は、東播系の捏鉢の口縁部である。SG 3とSE 49間で接合関係があった。

218は、東播系の捏鉢の口縁部である。SG 2からの出土である。

219は、備前の壺の底部である。SG 3からの出土である。

220は、常滑焼の大甕の肩部である。押印が施されており、全体に自然釉が掛かる。SG 3とSE 46間で接合関係があった。



第86図 SG 2・SG 3出土遺物実測図

## 9 調査区内出土遺物（第87・88図221～269）

221は、龍泉窯系青磁碗である。内面に片切り彫りで草花文が施され、外面には丸彫による蓮弁文が施されている。

222は、龍泉窯系青磁である。外面は蓮弁文が施されているが、粗野な作りとなっており劍頭が蓮弁としての単位を意識しないで施されている。

223は、中国産青磁皿である。見込の蛇ノ目釉割ぎ部分と外面の露胎部分は、胎土中の鉄分により赤化が見られる。

224は、白磁の蓋である。外面に菊花文が施されている。

225は、中国産青白磁の梅瓶である。内面にも釉が施されている。

226は、景德鎮窯系青花碗である。外面と見込に丸を三つ結合した様な文様が見られる。薄手の作りとなっている。

227は、中国産蓮子碗である。胴部に芭蕉葉文、見込には蓮花が描かれている。疊付は竈で面取りがしてあり、高台内まで釉が施してある。

228は、福建・広東系の青花碗である。見込に文様（寿文か？）が描かれている。高台内面まで釉が施されている。

229は、中国産青花碗である。外面に唐草花文、見込に文様が描かれている。

230は、中国産白磁皿である。端反りの皿で葵筋底である。見込の釉は輪状にはぎ取られている。

231は、朝鮮李朝の青花碗である。高台内面まで釉が施されているが、疊付の釉は割り取っている。

232は、器種不明の三彩である。水注か。

233は、瀬戸・美濃の天目茶碗である。古瀬戸後期様式。

234は、東播系の捏鉢である。

235は、器種不明の備前焼である。水差しか。

236は、土師器の皿である。底部鏝切りで口径13.2cm、器高3.5cm、底径8.0cmである。

237は、土師器の小皿である。底部鏝切りで推定口径8.4cm、器高1.9cm、推定底径6.4cmである。

238～240は茶臼である。238は上臼の破片である。供給口の一部が残る。平面的には約4分の1に破碎

している。239は上臼の一部である。臼面は残ってはいるが、彫っている溝が非常に粗く、目を切り直していることが観察される。240は下臼の受皿で、臼面は全く残存しない。被熱による赤化が見られる。また、割れ口にタルが付着していることから割れた後に被熱したと考えられる。

241～247は、錢貨である。241、242は熙寧元寶。243は聖宋元寶。244は元祐通寶。245、246は元豐通寶。247は寛永通寶。

248～250は煙管である。248は延べ煙管である。銅製の体部に象嵌が施されている。断面が楕円を呈するいわゆる「刀豆形」の延べ煙管である。表面に金を塗布した跡が認められる。

251～269は火打ち石である。251～256は玉隨、257～260は石英、261～269はチャートを石材とする。261には所々点状の赤茶色に変色した部分が観察される。火打ち金の鉄分が付着し、酸化したものと考えられる。

## 第6節 その他の遺物（第89図270～282）

270～276は砥石である。271は砂岩製の砥石である。断面は台形状で四面全て研磨面として使用されている。

270は砂岩製の大振りな礫を利用した砥石である。据え置いて利用したと考えられる。上下の二面と側面の一面が研磨面として使用されている。

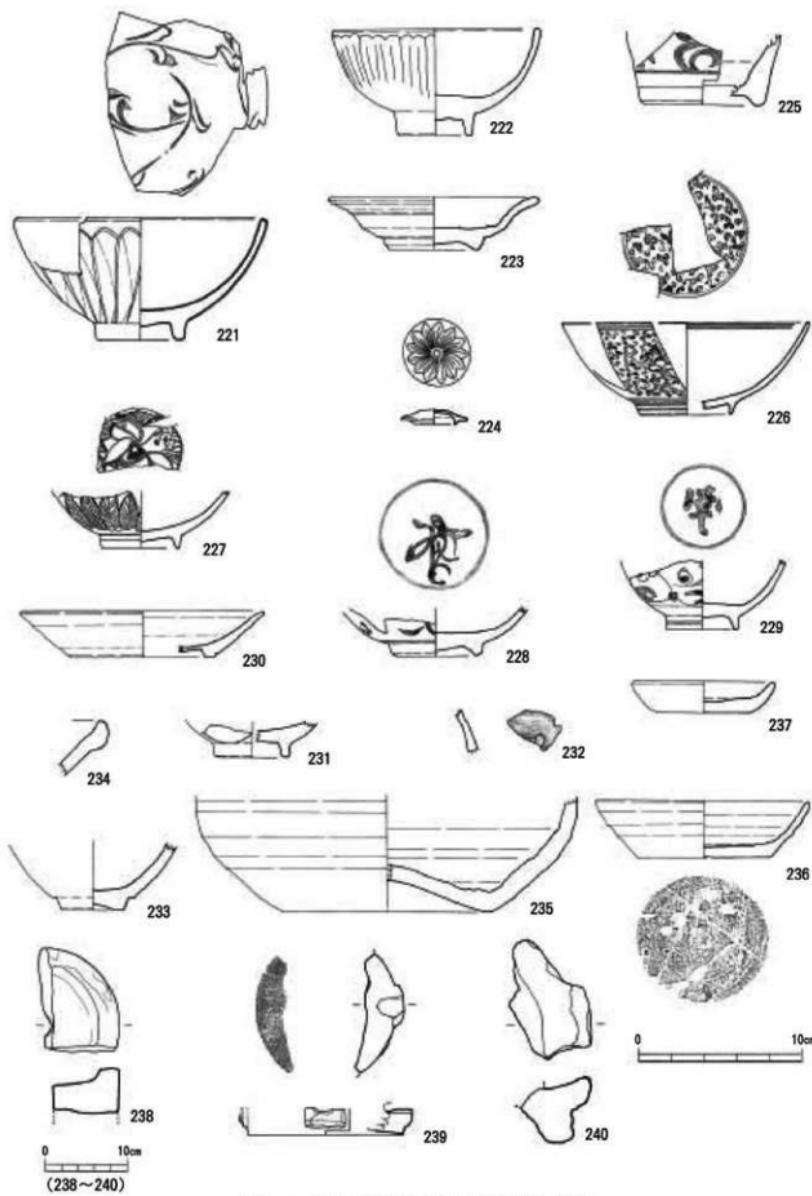
272、273は、自然礫をほとんど加工せずに砥石に転用したと考えられる。272は砂岩製で、273は頁岩製である。

274は頁岩製の砥石である。これも自然礫を殆ど加工せずに砥石に転用したと考えられる。凹面状になった研磨面を一面もつ。

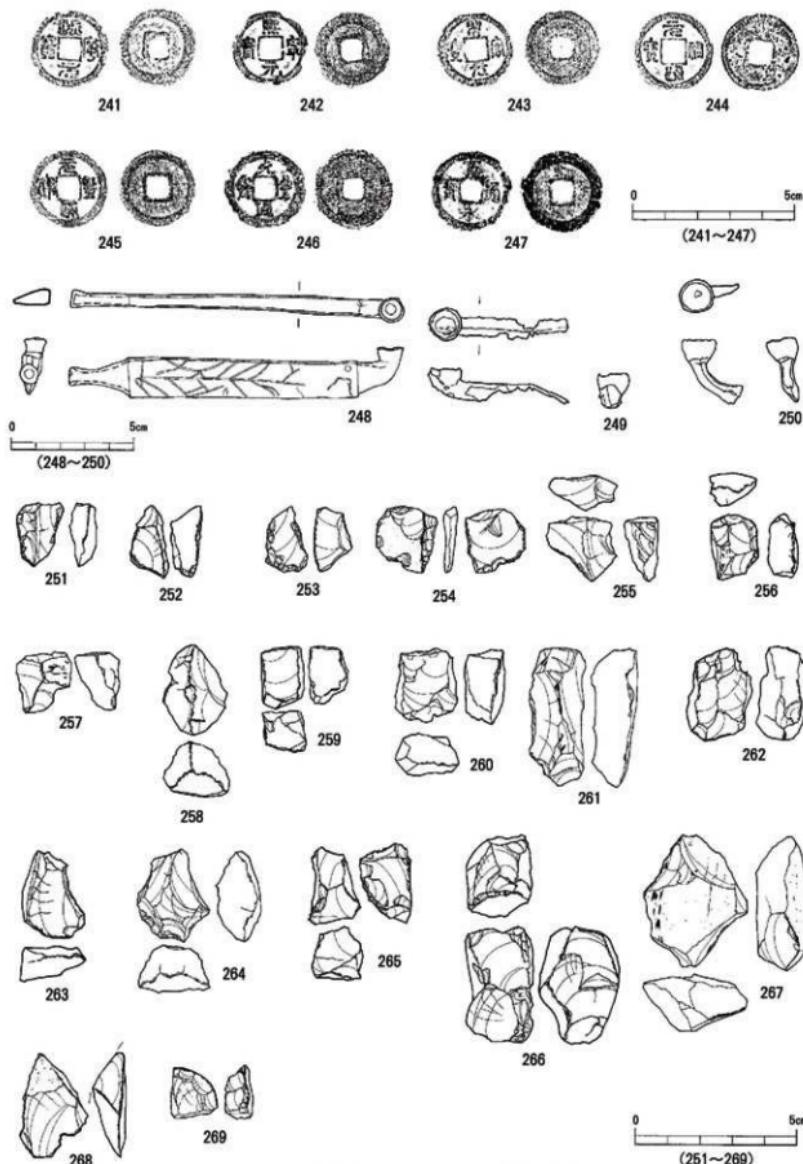
275は頁岩製の砥石である。研磨面は表裏の裏面である。手に持つて使用した可能性がある。

276は頁岩（緑色）製の砥石である。直方体の整った形に成形してあったものが折れたものと考えられる。研磨面がやや凹面状に瘤む。

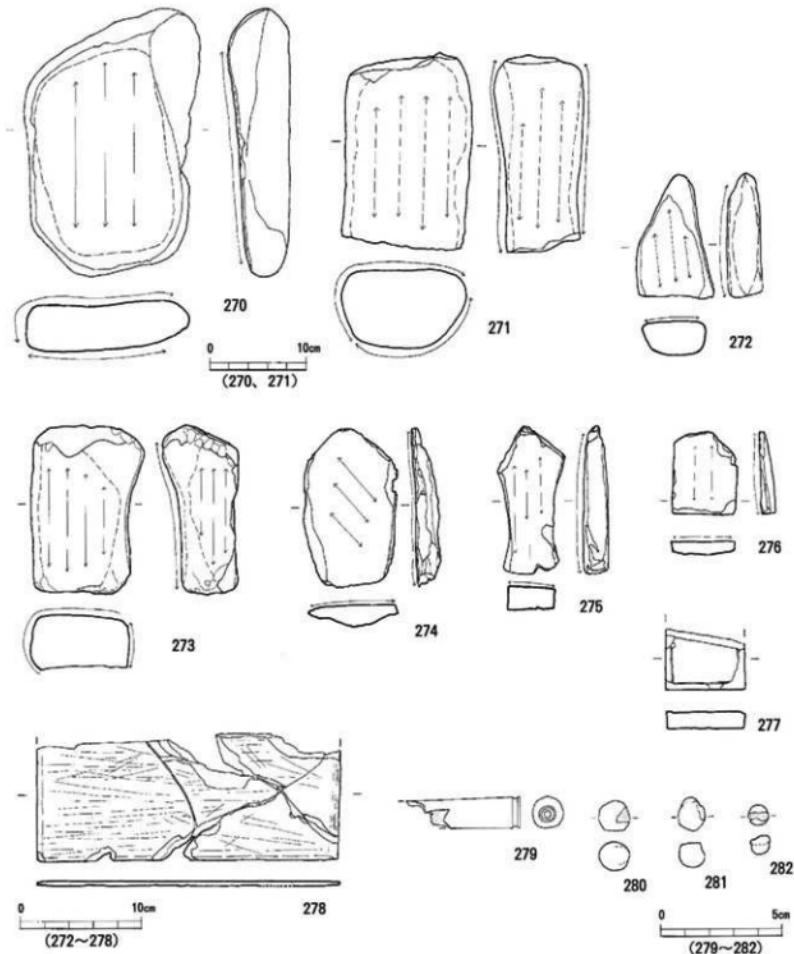
277は頁岩（赤色）製の硯である。直方体に成形され縁は5mm幅、深さは1.5mmで統一されている。



第87図 中世～近世調査区内出土遺物（1）



第88図 中世～近世調査区内出土遺物（2）



第89図 その他の遺物

観面と側面は研磨されているが、観背は若干の凹凸がある。

278は粘土岩製の石盤である。周囲5~10mmの幅で石盤を囲っていた枠の跡が認められる。

279は薬莢である。

280~282は弾丸である。280は、使用時に砂利がめり込んで変形したものと思われる。

第62表 中世～近世出土遺物觀察表(1)

番号	移別	出土地名	器種位	法面(m)	手作・模様・文様ほか			魚類		漁の特徴	備考
					外側	内側	外側	内側	外側		
102	陶器	SE15	青磁 体部～底部	6.0	油脂	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	鰐が入る	複数底糸	
103	陶器	SE15	脚部 口縁部			ナデ	ナデ	塊灰、黒	塊灰		
104	陶器	SE13	脚部 口縁部			ナデ	ナデ、墨目	塊灰黄	にふい赤鰐	塊灰、Tenai以下の白地船を含む。	複数底糸
105	陶器	SE15	脚部 口縁部～体部	(14.0)	油脂、眞入、透文	施釉、眞入	ナデ	眞灰	明黄色	塊灰、4m以上の底糸、块灰、底糸の松枝を含む。	複数底糸
106	陶器	SE3	青磁 体部～底部						明黄色		複数底糸
107	陶器	SE2	青磁 脚部～底部	(7.6)	油脂	施釉、块灰、 花文スタンプ		オーリーブ灰	オーリーブ灰	塊灰	複数底糸
108	陶器	SE1	青磁 体部～底部	(5.8)	油脂、眞入	施釉、眞入、 花文スタンプ		オーリーブ灰	オーリーブ灰	塊灰	複数底糸
109	陶器	SE3	青磁 体部～底部	5.8	油脂、透文	施釉、 透文花文スタンプ		块灰	明黄色	複数底糸	
110	陶器	SE1	青花 底部	(6.4)	油脂	施釉		灰白	灰白	塊灰	複数底糸
111	陶器	SE2	脚部 口縁部			ナデ	ナデ、透目	塊灰	灰黄色	塊灰、にふい赤鰐、 塊灰など多くの い青磁を多く含む。	複数底糸
112	陶器	SE7	青磁 口縁部		油脂	交差横目	灰、 にふい赤鰐		灰灰	塊灰、Tenai以下の 底糸を含む。	複数底糸
113	陶器	SE3	脚部 口縁部	(23.2)	油脂、自然鉢	墨目：単色2条		塊灰	塊灰	塊灰、块灰	中田
114	陶器	SE7	印紋 口縁部			ナデ	ナデ	塊灰、 オーリーブ灰	塊灰		複数底糸
115	陶器	SE6	青磁 底部～底部	(3.5)	油脂、露胎	施釉	灰オリーブ、 块灰場		塊灰、Tenai以下の 底糸を含む。	塊灰、块灰	
116	陶器	SE3	青磁 口縁部		油脂	施釉	灰白	灰白	塊灰	にふい塊、块灰	海螺田
117	陶器	SE3	青磁 底部～底部	4.4	油脂、露胎	施釉	墨	墨	灰灰	塊灰、塊灰	越戸・清瀬 天然英鉄
118	陶器	SE3	口縁部	(13.6)	油脂	施釉、露胎	塊	塊	塊	にふい塊、 塊など	
119	陶器	SE3	青磁		油脂	施釉、眞入	塊	塊	塊	にふい塊、 塊など	
120	陶器	SE3	染付青 口縁部～底部	(14.0)	油脂	施釉	灰白	灰白	塊灰	塊灰、塊灰	伊賀伊万里
121	陶器	SE1	染付青 底部	(7.4)	油脂	施釉	灰白	灰白	塊灰	塊灰	初代伊万里
122	陶器	SE1	青磁 口縁部～底部	(11.5) 5.7	油脂	施釉	灰白	灰白	塊灰	塊灰	東京窯
123	陶器	SE7	青磁 底部		油脂、露胎	施釉、上繪付	淡黃	淡黃	灰白、塊灰	青磁底、青白地鉢	
124	陶器	SE1	青磁 底部～底部	(4.5)	油脂、露胎	施釉	灰白	灰白	灰白、块灰	青磁底、青白地鉢	
125	陶器	SE1	青磁 底部～底部	8.2	油脂、露胎	施釉、 油白目、露胎	オーリーブ灰、 明黄色	灰オリーブ	灰、块灰	内野山山系、内野山 込み谷目×3	
126	陶器	SE2	青磁 底部～底部		油脂、露胎	施釉	淡黃	淡黃	灰白	青磁底、青白地鉢 「淡水」	
127	陶器	SE3 SE7	体部～底部	3.6	油脂、眞毛目	施釉、眞毛目、 眞毛目、眞毛目	にふい塊、 にふい眞毛目	淡黃、 にふい眞毛目	塊灰、块灰	青磁底に込み目、 眞毛目	
128	陶器	SE7	青磁 底部～底部	(7.0)	油脂、眞毛目	施釉、眞毛目	にふい眞、 眞毛目	にふい眞、 眞毛目	塊灰、块灰	にふい眞、 块灰	
129	陶器	SE3 SE7	青磁 口縁部～体部	(24.0)	油脂、眞毛目	施釉、眞毛目	淡黃、 にふい眞、淡黃	淡黃、 にふい眞、淡黃	淡黃、 にふい眞、淡黃	にふい眞、 2m大 の水槽を含む。	
130	陶器	SE1	青磁 底部～底部	(7.4)	油脂、眞毛目、露胎	施釉、 眞毛目、露胎	淡黃、 にふい眞	淡黃、 にふい眞	淡黃	にふい眞、 眞毛目	
131	陶器	SE1	青磁 底部～底部	(11.4) (4.1) 5.15	油脂	施釉、眞毛目、 眞毛目	施釉、眞毛目、 眞毛目	施釉、 眞毛目	塊灰	塊灰、 眞毛目	
132	陶器	SE1 SE7	青磁 口縁部～底部	(20.2)	油脂、眞毛目	施釉、タキ	淡黃	淡黃	淡黃	淡黃、 眞毛目	
133	陶器	SE7	青磁 口縁部		油脂によるナデ	墨目：単色6条	にふい眞	にふい眞	塊灰、 眞毛目	にふい眞、 眞毛目	
134	陶器	SE5	青磁 口縁部～底部		油脂	墨目	淡黃	淡黃	淡黃	淡黃、 眞毛目	
135	陶器	SE1	青磁 口縁部		油脂	墨目：単色8条	にふい眞	にふい眞	塊灰、 眞毛目	にふい眞、 眞毛目	青白
136	陶器	SE23	青磁 底部～底部		油脂～ヘアリ	玉葉模印	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色、 Tenai以下の 水槽を含む	白磁
137	陶器	SE23	青磁 底部～底部	5.0	油脂、眞入	施釉、眞入	淡黃	淡黃	灰白、块灰		
138	陶器	SE1 SE5	青磁 底部～底部	(4.7)	油脂、眞入	施釉、眞入	淡黃	淡黃	淡黃	にふい眞、块灰	
139	陶器	SE3.5 26	青磁 底部～底部	(23.0) (8.3)	油脂、 透文	施釉、 透文透文	施釉、 透文透文	施釉	施釉	施釉、 Tenai以下の 水槽を含む	
140	陶器	SE38	青磁 底部	(5.8)	油脂、眞入	施釉、眞入	施釉、眞入	施釉、眞入	施釉	施釉	複数底糸
141	陶器	SE35	青磁 底部	(5.8)	油脂、眞入	施釉、眞入	施釉、眞入	施釉、眞入	施釉	施釉	複数底糸
142	陶器	SE38	青磁 底部～底部	(11.7) 4.6	油脂	施釉	施釉	施釉	施釉	くらわんか手	
143	陶器	SE38	青磁 底部～底部	(10.2) 5.1	油脂	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	複数底糸
144	陶器	SE38	青磁 底部～底部	(4.0)	油脂、眞入	施釉	施釉	施釉	施釉	青磁底、 Tenai以下の 水槽を含む	

第63表 中世～近世出土遺物觀察表(2)

番号	種別	出土地點	器種	法量(cm)			手法・調査・文書ほか		色・質		出土の特徴	備考
				口徑	底徑	高さ	外 観	内 観	外 観	内 観		
145	陶器	SE38	色鉢	口徑39	底徑~四脚	(5.2)	錐孔、穿孔、 凹痕	施物、上締付	灰白	淡黃	灰白、褐黄	京焼鍋、高台内鉢印
146	陶器	SE35	深鉢	口徑39~四脚			凹痕、 凹槽へつ削り	備目：半径12mm?	赤褐	赤褐	赤褐、1cm乳白色 を全体に有す。	
147	陶器	SE41	色鉢	口徑39~四脚	(10.0)	3.4	59.8	錐孔、穿孔、色鉢	施物	明暦灰	淡黃色	褐黄、色鉢が削り花序は赤 あり
148	陶器	SE41	唐	口徑39~四脚		5.4		錐孔、穿孔、 ヘララッズ	施物、ナデ	にぶい黃	にぶい黃	灰黄色、1m大の 灰陶器を有す。
149	磁器	SE41	染付玉	口徑39~四脚	(8.0)		錐孔	施物	灰白	灰白	褐黄	初期伊万里
150	磁器	SE41	向付玉	口徑39~四脚	(13.8)	8.4	3.9	錐孔	施物	明暦灰	明暎灰	褐黄
151	磁器	SE41	染付玉	口徑39~四脚	(13.5)	8.2	4.1	錐孔	施物	灰白	灰白	褐黄
152	磁器	SE41	染付玉	口徑39~四脚	(10.5)	(4.9)	5.0	錐孔	施物	灰白	灰白	褐黄
153	陶器	SE41	井	口徑39~四脚	(21.0)	8.5	9.9	錐孔、穿孔	施物	淡黃	淡黃	青白、褐黄
154	陶器	SE41	油利	口徑39~四脚		3.8		錐孔、貫入	口縁部以外施物	灰オリーブ	にぶい黃	青白のみに輪郭線 有る。
155	陶器	SE41	寒利	腰附、 腰附~底部		6.9		錐孔、穿孔、 沈拂2~3個	施物	灰オリーブ		淡黃、1cm以下の 陶灰器を有す。
156	青磁	SE45	唐	腰附		5.6		錐孔	施物、 花文スタンプ	灰オリーブ灰	明オリーブ灰	豆白、1cm以下の 支承部を有す。
157	青磁	SE45	林	口縁部~脚部				錐孔	施物、 巴形花弁形	灰オリーブ	灰オリーブ	褐青系
158	磁器	SE9	白磁	口縁部~底部	(9.7)	4.4	2.1	錐孔	施物	灰白	灰白	中白、見込みに胎土目 有る。
159	磁器	SE25	青花仕	体付、一握	(4.8)			錐孔、穿孔	施物、藍染	灰白	灰白	復興、古式、青花底
160	磁器	SE25	青花仕	口縁部				錐孔	施物	明暎灰	明暎灰	復興、古式
161	磁器	SE45	青花仕	脚部~底部	(7.5)			錐孔、穿孔	施物	明暎灰	明暎灰	中白
162	磁器	SE45	青花仕	口縁部~脚部				錐孔、貫入	施物、貫入	灰白	灰白	復興、古式
163	陶器	SE25	深鉢	口縁部					ナデ	ナデ	褐灰、黒	褐灰、1cm以下の 陶灰器を有す。
164	陶器	SE25	深鉢	体付、一握					ナデ、 備目：半径10mm	ナデ、 備目	褐灰、黒	褐灰、1cm以下の 陶灰器を有す。
165	陶器	SE25	深鉢	体付、一握	(20.1)				ナデ、 備目	ナデ、 備目	褐灰、黒	褐灰、1cm以下の 陶灰器を有す。
166	陶器	SE49	深	低底	(5.4)			錐孔、貫入	施物、貫入	白灰	淡黃	淡黃、褐黄
167	陶器	SE48	菊花仕	口縁部				錐孔	施物、 巴形花弁形	灰白	灰白	青白、褐黄
168	陶器	SE33	朝	腰附		5.7		錐孔、穿孔	施物	灰オリーブ	灰オリーブ	青白のみに胎土目 有る。
169	陶器	SE45	口縁部~底部		11.2	3.7	3.7	錐孔、穿孔	施物	灰白、黒鳥	灰白、黒鳥	中白、見込みに胎土目 有る。
170	陶器	SE48	脚部~底部	足	4.8			錐孔、穿孔	施物	にぶい黃	にぶい黃	にぶい黃、褐黄
171	陶器	SE48	脚部~底部	足	4.8			錐孔、穿孔	施物	にぶい黃	にぶい黃	にぶい黃、褐黄
172	陶器	SE48	脚部~底部	足	(31.0)			錐孔、穿孔	施物、 新毛目、 新毛目	灰オリーブ	灰オリーブ	青白、1cm大の 陶灰器を有す。
173	陶器	SE45	脚部~底部	足	(11.8)	7		錐孔	施物	褐灰	褐灰、 にぶい黃	褐灰、1cm大の 陶灰器を有す。
174	陶器	SE45	脚部~底部	足	(9.3)	4.7	7.1	錐孔、貫入	施物、貫入	淡黃、綠灰	淡黃	青白、褐黄
175	陶器	SE9	口縁部~底部	足	4.0			錐孔	施物、 足輪削り	灰黄、青灰	灰黄、青灰	青白、褐黄
176	陶器	SE8	体付、一握	足	5.0			錐孔、 軸孔、 軸孔削り	施物	オーリーブ、 淡黃	オーリーブ灰	淡黃、褐黄
177	陶器	SE45	足	口縁部~底部	(19.1)	(5.4)	5.2	錐孔、穿孔、 穿孔	施物、新毛目、 新毛目	淡黃、 施物、 軸孔削り	淡黃、 施物、 軸孔削り	青白、1cm以下の 陶灰器を有す。
178	陶器	SE45	染付玉	口縁部~底部	9.9	4.4	4.9	錐孔	施物	明オリーブ	明オリーブ	青白、 くわらわか手
179	磁器	SE45	口縁部~底部	染付玉	(8.6)	3.2	5.6	錐孔	施物	明オリーブ	明オリーブ	褐青底
180	磁器	SE45	染付玉	口縁部~底部	11.9	4.2	5.3	錐孔	施物	明オリーブ	明暎灰	青白底付 刷毛形
181	磁器	SE45	染付玉	口縁部~底部	(10.9)	5.6	5.0	錐孔	施物	灰白	灰白	褐黄
182	磁器	SE45	染付玉	口縁部~底部	(8.6)	(3.4)	4.7	錐孔	施物	灰白	灰白	灰白、 淡黃、口直邊削り
183	陶器	SE45	唐	口縁部~底部	(5.6)	3.9	5.4	錐孔	施物、貫入	青白、 灰オリーブ、 灰白	青白	青白、1cm以下の 陶灰器を有す。
184	磁器	SE45	染付玉	口縁部~底部	(18.1)	(9.4)	4.1	錐孔、 軸孔削り	施物、 足輪削り	灰白	灰白	青白、 1cm以下の乳白色 を全體に有す。
185	陶器	SE45	染付	脚部~底部	(26.2)	(12.3)	9.5	錐孔	備目：半径11mm	褐	褐	青白、見込みに胎土 有る。
186	陶器	SE45	染付	口縁部~底部	(32.0)			ナデ、スズ付着	ナデ	にぶい黃	にぶい黃	にぶい黃、金色の 鋸歯形少子頭。
187	陶器	SE45	土器	注口付、一握	(9.0)			錐孔、穿孔	施物	灰黃褐	灰黃褐	褐青底、体部の穴は 1つ

第64表 中世～近世出土遺物觀察表(3)

番号	種別	出土地点	形質	古法(㎝)			手法・経路・文様ほか			色	周	胎土の特徴	備考
				口径	底径	高さ	外	内	外				
188	磁器	S B47 S H26	白磁質 口縁部 口縫部	[10.5]			無釉	無釉	灰白	灰白		胎具	中国、口壳
189	陶器	S B17 S H12	口縫部～底部	[12.0]	4.6	4.3	無釉	無釉、竪線	灰オーリーブ	灰オーリーブ	灰オーリーブ、稍風	清酒缸	
190	陶器	S B17 S H11	口縫部 口縫部				ナデ	ナデ	褐灰	褐灰		尾丸、1cm以下の 黄色、白色部分を含む。	東北系
191	土器器	S B10 S H 5	小皿 口縫部～底部	7.6	6.3	1.2	回転ナデ	回転ナデ	淡黄褐	淡黄褐	1cmの大いの薄板 を含む。	ヘラ切り版	
192	土器器	S B10 S H 3	小皿 全体～底部	[7.8]	[6.0]	1.3	回転ナデ	回転ナデ	褐	褐	1cmの大いの赤褐色 を含む。	ヘラ切り版	
193	土器器	S B10 S H10	小皿 口縫部～底部	[7.4]	6.0	1.3	回転ナデ	回転ナデ	褐、淡黄褐	褐、淡黄褐	1cm以下の赤褐色 を含む。	ヘラ切り版	
202	陶器	2区 ビット	深鉢 口縫部～脚部	[26.7]			ナデ、スス付替	ナデ	にぶい黃褐	にぶい黃褐		にぶい黃褐、2cm 以下の小石を含む。	東北系
203	土器器	2区 ビット	小皿 口縫部～底部	7.6	5.4	1.7	回転ナデ	回転ナデ	褐	褐	1cm以下の浅、茶 色の粘土を含む。	ヘラ切り版	
204	土器器	2区 ビット	皿 壳形	10.4	6	2.5	回転ナデ、 スス付替	回転ナデ、 スス付替	にぶい褐	にぶい褐	1cm以下の赤褐色 を含む。	ヘラ切り版	
205	土器器	2区 ビット	小皿 口縫部～底部	7.6	5.6	1.5	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	使物な青白、河 の水を含む。	ヘラ切り版	
206	土器器	2区 ビット	小皿 口縫部～底部	8.0	5.8	1.7	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1cm以下の赤褐色 を含む。	ヘラ切り版	
207	土器器	2区 ビット	小皿 口縫部～底部	7.3	5.6	1.8	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	1cm以下の赤褐色 を含む。	ヘラ切り版	
208	陶器	2区 ビット	皿 全体～底部		6.1		落釉、露胎	落釉、竪線 軸、脚部削刃	白灰	暗灰、灰白	オーリーブ灰、 暗灰、灰白 暗オーリーブ	灰白、暗灰	内側山脈系
209	陶器	S C 10	鉢 口縫部～脚部				ナデ、スス付替	ナデ	オーリーブ灰	にぶい黄褐	にぶい黄褐、2cm 以下の土を含む。		
210	陶器	S C 9 S E 5	壺 口縫部～底部	[11.0]			自然釉、 蠟錆状紋付	自然釉	褐灰	褐灰	青灰、褐灰		
211	陶器	S C 2 5	土窯燒 壳形	7.0		2.5	無釉	無釉	褐オーリーブ褐、 褐灰	褐褐	赤茶、2cm以下の 赤褐色粘土を含む。	東北系	
213	土器器	S D 2	灰 脚部削刃	12.9	7.7	4.4	回転ナデ	回転ナデ	淡黄褐	にぶい黄褐	2cm以下の赤褐色 粘土を含む。	ヘラ切り版	
214	土器器	S D 2	灰 壳形	12.2	6.7	3.9	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐	灰黄褐	2cm以下の赤褐色 粘土を含む。	ヘラ切り版	
217	陶器	S G 3 S E 49	深鉢 口縫部	[21.8]			ナデ	ナデ	白灰、暗灰褐	無灰	黄灰、1cm以下の の白色、褐色を含む。	東北系	
218	陶器	S G 2	深鉢 口縫部				ナデ	ナデ	褐灰	褐灰	1cm以下の赤褐色 を含む。	東北系	
219	陶器	S G 3	深 底部				タタキ後ナデ	暗褐色	褐	褐	1cm以下の赤褐色 を含む。	東北系	
220	陶器	S E 45 S G 3	深 底部				自然釉、 印記付	ナデ	褐オーリーブ	褐	1cmの大いの白色 粒、3mmの大いの 白色粘土を含む。	青森県	
221	磁器	2区	青白質 口縫部～底部	[15.1]	5.3	7.5	無釉、蘿井文	無釉、刻花文	オリーブ灰	オリーブ灰	オリーブ灰、 無釉	青空、深青	青空、深青
222	磁器	1区	青白質 口縫部～底部	[12.5]	4.4	6.6	無釉、 印記、通文付	無釉	灰オーリーブ	灰オーリーブ	灰灰に黒が入る。	東北系	
223	陶器	2区	青白質 口縫部～底部	[13.0]	[5.6]	3.3	無釉、竪線	無釉、 軸、脚部削刃	男オーリーブ灰	男オーリーブ灰	強烈な黒が入る。	中國	
224	磁器	2区	青白質 底部	2.6		0.9	無釉、花卉	無釉	灰白	灰白	胎具	中國	
225	磁器	鋼雀区内	青白質 脚部～底部	[7.2]			無釉	無釉	明緑灰	明緑灰	強烈な黒が入る。	中國、海南	
226	磁器	1・2区	青花瓷 脚部～底部	15.1	5.3	5.7	無釉	無釉	明青灰	明青灰	強烈な黒が入る。	青花、底裏	
227	陶器	2区	青花瓷 脚部～底部	4.6			無釉	無釉	明緑灰	明緑灰	強烈な黒が入る。	中國	
228	磁器	1区	青花瓷 脚部～底部	5.6			無釉、實入	無釉、實入	灰白	灰白	胎具	福井、近東	
229	磁器	2区	青花瓷 全体	4.4			無釉	無釉	灰白	灰白	強烈な黒色粘多 量付。	中國	
230	磁器	2区	青白質 口縫部～底部	[14.5]	[8.8]	3.9	無釉、露胎	無釉、脚部削 刃	灰白	灰白	強烈な黒が入る。	中國	
231	磁器	2区	青白質 底部	[4.5]			無釉	無釉	明オーリーブ灰	明オーリーブ灰	灰、黒灰	和洋争財	
232	陶器	2区	水注？ 脚部？				無釉、博取文	無釉	青、青綠	にぶい褐	にぶい青、 青綠	東南三列？	
233	磁器	1区	碗 脚部～底部	3.8			無釉、露胎	無釉	黑褐	黑褐	灰灰、確かに黒が 入る。	瀬戸、美濃	
234	陶器	2区	深鉢 口縫部				ナデ	ナデ	碧灰、黑	碧灰、黑	碧灰、2cm以下の 赤褐色粘土を含む。	東北系	
235	陶器	3区	水呑？ 全体	[12.8]			四転ナデ、 自然釉	四転ナデ	にぶい黄褐	暗灰	暗灰、2cm以下の 赤褐色粘土を含む。		
236	土器器	2区	面 口縫部～底部	13.2	8.0	3.5	回転ナデ	回転ナデ	像	像	2cm以下の深、赤 褐色粘土を含む。	ヘラ切り版	
237	土器器	2区	小皿 口縫部～底部	(8.4)	(6.4)	1.9	回転ナデ	回転ナデ	淡黄褐	淡黄褐	2cm以下の深、赤 褐色粘土を含む。	ヘラ切り版	

第65表 中世～近世 土製品観察表

番号	器種	出土地點	最大径 (mm)	最小徑 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
194	土器	S65-SH7	4.0	1.1	1.0	24	
195	土器	S65-SH7	4.2	1.0	1.0	36	

第66表 中世～近世 ガラス製品観察表

番号	器種	出土地點	最大径 (mm)	最小徑 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
216	ガラス瓶	SC68	1.0	1.0	1.0	1.5	

第67表 中世～近世 錢貨観察表

番号	通銭名	出土地點	正規	初期年	薄片 (mm)	鑄件 (g)	備考
118	洪武通寶	S8月 SH8	洪宋	1368年	—	24.5	所に「福」の字、一枚欠け
117	貞祐通宝	S8月 SH8	江戸	1359年	22	22.5	
119	貞祐通宝	S8月 SH8	江戸	1359年	25.5	—	一枚欠け
120	貞祐通宝	S8月 SH8	江戸	1359年	24.5	2枚重なり	
203	貞祐通宝	S8月 SH8	江戸	1359年	24.5	2枚重なり	
204	貞祐通宝	S8月 SH8	江戸	1359年	25.0	2枚重なり	
212	五铢銅錢	SDQ1	四?	—	—	他の然成と2枚重なり	
213	開元通寶	SDQ3	四	1365年	2.25	2.3	劣化著しい
241	開元通寶	7区	北宋	1066年	26	23.5	
242	開元通寶	2区	北宋	1066年	26	23.5	
243	開元通寶	2区	北宋	1071年	23	22.5	
244	大和通寶	2区	北宋	1059年	24	24.5	
245	大和通寶	2区	北宋	1078年	24	24	
246	大和通寶	2区	北宋	1078年	28	24	
247	大和通寶	2区	白17	1359年	28	25	

第68表 中世～近世 石器・石製品観察表

番号	器種	出土地點	最大径 (mm)	最小径 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
226	石臼	Z区	19.0	9.0	1.6	988.6	砂岩	
230	石臼	Z区	19.2	9.5	1.6	171.1	石灰岩	
240	火打石	Z区	—	—	—	931.6	砂岩	
251	火打石	Z区	1.8	1.4	0.8	1.9	玉髓	
252	火打石	Z区	2.1	1.7	0.9	2.7	玉髓	
253	火打石	Z区	2.0	1.3	1.2	2.2	玉髓	
254	火打石	Z区	2.0	1.6	0.4	1.8	玉髓	
255	火打石	Z区	1.8	2.1	1.1	3.3	玉髓	
256	火打石	Z区	1.8	1.4	0.9	2.8	玉髓	
257	火打石	Z区	1.8	1.7	1.4	3.5	石灰岩	
258	火打石	Z区	2.7	1.9	1.7	6.2	石灰岩	
259	火打石	Z区	1.8	1.3	1.9	4.0	石灰岩	
260	火打石	Z区	2.3	1.9	1.3	5.1	石灰岩	
261	火打石	Z区	4.2	1.8	1.6	10.6	チート	
262	火打石	Z区	2.1	2.1	1.6	8.3	チート	
263	火打石	Z区	2.3	2.1	1.1	5.1	チート	
264	火打石	Z区	2.3	2.2	1.4	7.8	チート	
265	火打石	Z区	2.4	1.6	1.6	8.7	チート	
266	火打石	Z区	3.5	2.1	2.5	22.3	チート	
267	火打石	Z区	4.1	3.2	1.8	16.8	チート	
268	火打石	Z区	3.2	2.1	1.0	8.4	チート	
269	火打石	Z区	1.8	1.4	0.7	2.1	チート	

第69表 中世～近世 鉄製品観察表

番号	器種	出土地點	最大径 (mm)	最小径 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
248	馬頭鎧	7区	13.0	2.3	0.7	27.1	赤鉄
249	鎧	Z区	2.5	2.6	—	1.8	
250	鎧	Z区	5.6	1.3	—	2.9	

第70表 中世～近世 土坑一覧表

番号	区	平面形態	規 模			出土遺物	備 考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
SC1	1	圓丸長方形	3.0	1.3	0.2		
SC2	1	橢円形	1.0	0.7	0.6		
SC3	1	圓丸長方形	2.8	2.3	0.5		
SC4	1	圓丸長方形	2.5	1.9	0.4		
SC5	1	圓丸長方形	2.6	1.2	0.2		
SC6	1	圓丸長方形	2.2	1.3	0.1		
SC7	2					調査区外にかかる	
SC8	2	橢円形	1.2	1.0	0.3		SE 5mか切る
SC9	2	円形	1.0	0.9	0.1	陶器壺	
SC10	2	円形	1.1	1.0	0.1	土蜘蛛の跡	
SC11	2	不整形	1.2	0.8	0.5		
SC12	2	円形	1.6	1.4	0.3		
SC13	2	円形	0.6	0.6	0.1		
SC14	2	円形	0.9	0.9	0.3		
SC15	2	円形	0.6	0.9	0.7		
SC16	2	橢円形	2.3	1.2	0.2		土蜘蛛小片多数出土
SC17	2	円形	0.9	0.9	0.1		
SC18	2	圓丸長方形	1.3	1.2	0.2		SE 22mか切る
SC19	2	円形	1.0	0.9	0.2		
SC20	2	円形	0.9	0.9	0.2		
SC21	2	円形	0.6	0.9	0.2		
SC22	2	不整形	0.8	0.5	0.2		
SC23	3	橢円形	1.0	0.5	0.1		銛片、鐵刃を多く含む
SC24	3	不整形	1.1	0.8	0.2		鐵斧を多く含む
SC25	3	圓丸長方形	1.5	0.9	0.3	土瓦蓋	
SC26	3	橢円形	6.0	4.5	0.4		
SC27	4	圓丸長方形	0.9	0.4	0.1		
SC28	4	橢円形	1.3	1.0	0.2~0.3		

第71表 中世～近世 土墳一覧表

番号	区	平面形態	規 模			出土遺物	備 考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
SD1	2	圓丸長方形	0.9	0.5	0.2	五輪塔	
SD2	2	圓丸長方形	1.2	0.8	0.4	土蜘蛛環(2)	
SD3	4	圓丸長方形	1.7	1.0	0.2	ガラス玉、洪武漢字	

第72表 その他の遺物(1)

番号	型種	出土地點	最大幅(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	重さ(t)	台材	備 考
270	礫石	2 区	27.7	18.1	5.4	4000.0	砂岩	
271	礫石	2 区	16.3	10.5	7.4	1972.4	砂岩	
272	礫石	2 区	16.5	8.2	2.8	348.0	頁岩	
273	礫石	2 区	13.9	9.3	8.7	1098.1	砂岩	
274	礫石	3 区	13.5	7.8	2.1	339.6	頁岩	
275	礫石	2 区	7.1	5.4	2.1	172.0	頁岩	
276	礫石	3 区	6.8	5.4	1.9	89.0	頁岩 (38)	
277	砾	2 区	4.5	5.1	1.9	89.3	頁岩 (55)	
278	石板	2 区	16.8	28.1	0.4	210.7	砂岩	

第73表 その他の遺物(2)

番号	型種	出土地點	最大幅(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	重さ(g)	備 考
279	鉄劍	2 区	4.6	1.3	1.3	9.6	沙利のり込み
280	鉄劍	2 区	1.4	1.1	1.0	7.3	
281	鉄劍	2 区	1.25	1.3	1.2	6.5	
282	鉄劍	3 区	0.9	0.9	0.76	2.1	

# 第V章 自然科学分析

## 第1節 目的

前ノ田村上第1遺跡は、十文字層状地Ⅱ面と思われる台地上にあるため、流れ込みによる疊層の堆積が見られる等、基本層序を把握しづらい状況にある。そこで、土層や遺物などの層位や年代を明らかにし、当時の植生を把握するための資料として、テフラ及び植物珪酸体の分析を実施した。これら自然科学分析は嶺古環境研究所に業務委託した。

## 第2節 テフラ分析

### 1 調査地点

調査の対象となった地点は、2区東部を疊層まで掘り下げた土層断面（A地点）および2区調査区南壁面（B地点）の2地点である。

### 2 分析結果及びまとめ

CグリッドA地点の資料23に含まれる火山ガラスは、その特徴から、約2.4～2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995）に由来すると考えられる。実際のATの降灰層準は、資料23より下位にあたると考えられる。

また、資料7に含まれるテフラは、層位や斜方輝石の屈折率などから、約1.4～1.6万年前に霧島火山から噴出した霧島小林軽石（Kr-kb、伊田ほか、1956、町田・新井、1992、早田、1997）に由来すると考えられる。またB地点の資料7付近に降灰層準があると考えられるテフラは、その特徴から10～13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア（Kr-ThS、井ノ上、1988、早田、1997）に由来すると考えられる。なお、A地点の資料3やB地点の資料に含まれる無色透明のバブル型ガラスの一部や有色ガラスのはほとんどは、その特徴からK-Ahに由来すると考えられる。

前ノ田村上第1遺跡において地質調査を行って土層層序を記載するとともに、火山ガラス比分析や屈折率測定を行った。その結果、下位より始良Tn火山灰（AT、約2.4～2.5万年前）、霧島小林軽石（Kr-kb、約1.4～1.6万年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-

Ah、約6,300年前）、霧島高原スコリア（Kr-ThS、10～13世紀）などの指標テフラを検出することができた。

## 第3節 植物珪酸体分析

### 1 試料

分析試料は、A、B、C地点の3地点から採取された計28点である。

### 2 分析結果及びまとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、霧島高原スコリア（Kr-ThS、10～13世紀）混層より上位の各層ではイネが比較的多量に検出され、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、同層準ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

始良Tn火山灰（AT、約2.4～2.5万年前）混層から霧島小林軽石（Kr-kb、約1.4～1.6万年前）混層にかけては、クマザサ類（おもにミヤコザサ節）などのササ類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、積雪の少ない比較的寒冷で乾燥した環境であったと推定される。また、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

その後、Kr-kb混層から鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約6,300年前）の下層にかけては、メダケ属（メダケ節やネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生に移行したと考えられる。このような植生変化は後氷期から完新世初頭における気候温暖化の影響に加えて、森林伐採や火入れなど人間による植生干渉の増加を示していると考えられる。

K-Ahの上層から霧島高原スコリア（Kr-ThS、10～13世紀）混層にかけては、メダケ属（メダケ節やネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られる草原植生が継続されたと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、Kr-ThS混層もしくはその上層の時期には、稻作およびムギ類の栽培が開始されたと推定される。





## 第VI章

### まとめ

前ノ田村上第1遺跡は旧石器時代～縄文時代早期、弥生時代、中世～近世の遺構・遺物が確認された。そこで、その成果についてまとめを行いたい。

#### 【旧石器時代～縄文時代】

本遺跡の性格を考えるうえで、その立地条件が重要である。すなわち、多くの遺構・遺物が確認された中ノ迫第1・第3遺跡（旧石器時代・縄文時代早期ほか）から見下ろした低地に本遺跡が立地する点である。この立地条件に加え、相対的に遺構・遺物が少量である点を考慮すれば、本遺跡は両時期とともに小規模な活動の場であったと想定される。

特に縄文時代早期については、石礫が調整剥片等を伴わず単独で出土したこと、浅い谷に接する立地条件等から、狩猟の場といった推測も可能である。

個別の遺物では、特記されるものとして、宮崎平野部では出土例の少ない彫器とその彫面作出剥片が出土・接合したこと、縄文早期の粘土型石礫の出土が挙げられ、小規模ながらも大きな成果となった。

#### 【弥生時代】

弥生時代では、竪穴住居1軒と周溝状遺構1基が検出された。これら2つの遺構の位置関係は、北に竪穴住居が位置し、そこから南に50m程の間をおいて周溝状遺構が検出された。調査の対象地が南北に広く東西に狭い状況から考えると調査区東側を中心とする未調査区に集落の広がりが推定される。

竪穴住居は面積が19m<sup>2</sup>と花弁状間仕切り住居を除くと当時の方形プランの竪穴住居としては標準的である。

周溝状遺構については、県内では日向市百町原地区遺跡、都農町下別府下原遺跡や川南町野福尾遺跡、松ヶ迫遺跡をはじめ新富町鬼付女遺跡や宮崎市熊野原A地区、同C地区、それに都城市年見川遺跡や向原遺跡等から弥生時代後期～古墳時代に係わる「周溝状遺構」が発見されている。また、川南町では弥生時代終末期とされる東平下1号、2号周溝墓も調査されている。また、現在調査中である赤坂遺跡では、円形周溝墓1基と周溝状遺構3基が検出されている。

竪穴住居に接する周溝状遺構の類例は増えてきたものの、その性格については以前として特定したい。1号周溝状遺構は、高壇を一部含んでいるものの、器台、その他特殊な用途を伺わせる遺物はほとんど欠落し、火を用いた痕跡もないなど、いわゆる「祭祀」と断言できる証拠には乏しい。また、周溝内及び内側台状部には土坑を伴わず方形周溝墓の範疇に入れることも難しい。さらに、周溝内に1基柱穴が確認されているが、周溝状遺構に伴うものかどうかは不明であり、わずか1基のみであることからも平地式住居としての可能性は低いと言わざるを得ない。従って、その性格については特定できない。

出土土器の時期については、松永幸寿氏による編年案<sup>1</sup>を参考にした。その結果、甕については合致するものを見つけることができなかったが、複合口縁帯等、他の器種をもとに判断すると竪穴住居、周溝状遺構とともに弥生時代終末期の土器群と位置づけられる。

#### 【中世～近世】

柱穴の組み合わせから建物として確認した掘立柱建物は52棟である。これらの掘立柱建物と有機的関連性をもって併存し、集落の一角を占めていたと考えられる遺構に、溝がある。

そこで、まず溝の性格についてみていくことにする。溝は、大きく分けてある一定の敷地を区画するようにして配置された区画溝と、それ以外の溝に大別できる。本遺跡で区画溝として認定した溝の特徴として次の四点を挙げることができる。

一点目は、区画を構成する溝の軸が、ほぼ東西、南北軸線上にあるということである。このことから、溝掘削に関して、何らかの地割りを基本にして掘られたものであることが考えられる。

二点目は、方形、長方形状に並び、建物の主軸と溝の主軸とが一致するものが多い。また、区画溝8の西辺は約62mを測り、区画溝5の東辺は約39mを測る等、溝の一辺が1町（106～110m）、又は半丁に近い単位を基にしている傾向が見られる。建物の

多くの軸と重なることを考えると、初めから区画としての機能を持たせるために溝を掘削したのではないかと考えられる。

三点目は、溝幅が狭く、浅い。このことから、防御としての施設というよりも敷地を区画するということに重きを置いた施設だと考えられる。

四点目は、区画溝同士の重複が見られる。これは、集落の変遷と共に溝が再掘削されていると考えることができ、建物と溝とはセット関係にあることが想定される。

次に掘立柱建物について述べてみたい。

1区南部から3区にかけて多数の柱穴が検出された。特に、2区の掘立柱建物の重複は著しい。多数の区画溝との関係からも、中世から近世にかけて区画が再編されながら、あるまとまった期間長期的に存続していたことが伺える。

全調査区で4面庇建物が3棟、2面庇建物が5棟確認されている。もっとも大きな建物は、S B47で、南端が調査区外にかかるが、庇部分を含めた面積が約98m<sup>2</sup>と想定される。2面庇の建物では、2区西部に位置するS B11が最大である。庇部分を含めた面積が74.2m<sup>2</sup>を測る。次いでS B10で庇部分を含めた面積が71.2m<sup>2</sup>である。S B11はS B10の建て替えで、敷地内での中心となる建物だったと考えられる。しかし、いずれの柱穴も径が小さく、使用された柱材が細かったことが想定される。

全体的な柱穴の分布を見てみると、3区から4区北部にかけては、柱穴の検出はそれほど密ではない。特に4区北部では、建物同士の重複関係もあり見られない。このことから考えると、屋敷地の利用がある一定の期間に限定されており、存続期間が短いことが伺える。

その他の造構に目を向けてみると、区画溝、溝状造構の中に拳大の鉄滓が少なからず出土している。また、上抗の中には、S C23のように、鍛造鉄片等を廃棄したと考えられる製鉄関連の造構も見られた。これらのことから、敷地内に製鉄関連の施設と手工業に携わった工人の存在が想定される。

次に出土遺物について述べてみたい。出土遺物については、造構ごと、グリッドごと（3、4区）に、

中世（16世紀以前）、近世前半（17世紀）、近世後半（18～19世紀）の時代による3分類を行い、種別（陶器、磁器、土器など）、産地（中国産、国産など）、器種（碗、皿、壺、甕など）について分類を行った。その後、分類した集団ごとに、総破片数・総重量の2項目について、計数・計量を行った。総破片数は接合前の数である。その結果は、第26～32表のとおりである。3区と4区については、三次調査時に、グリッドを基礎として10mメッシュで遺物取り上げを実施し、分類・計測を行ったところ、一次調査の2区との埠付近（L～N・17～18グリッド）にあたる3区北西部に中世遺物が集中する傾向が看取できた。このことから3区北西部は、中世のある時期、2区南西部とともに同一の敷地内に含まれる可能性が高いのではないかと考えられる。

最後に出土遺物、埋土等から時期の特定ができる造構を示しておく。中世の造構は、S B10、S B11、S B44、S B47、S B49、S B51、S B52、S D1、S D2、S D3、S G2、S G3、1号石組造構である。近世の造構は、S B5、S B17、S B32、S B37、S C6、S C25である。

以上、簡単にまとめを述べてきたが、今回の調査では、特に中世～近世に至る豊富な造構・遺物が確認された。内容は多岐に渡り、検討すべき課題も多い。特に、集落の変遷を考えていく上では、溝と掘立柱建物とのセット関係でその変遷を検討していくことが重要であると考えられる。しかしながら、ほとんどの溝から出土している遺物が、ある一定の時代に限定されるものではなく、広い時代幅を持っていることから、明確に時代を決定することができず集落の変遷を考察するまでには至らなかった。

残された課題も多いが、今後、検出された造構・遺物が再検討され中世～近世の集落の変遷が明らかにされることを期待したい。

### 【注】

注1 松永幸壽2004 「日向における古式土師器の成立と展開—宮崎平野部を中心として—」『西南四国～九州間の交流に関する考古学的研究』 研究代表者 下條信行

## 【参考文献】

郡城市教育委員会1990 「向原第1・2遺跡」「郡城市文化財調査報告書」

第11集

佐賀県教育委員会1991 「木村遺跡」「佐賀県文化財調査報告書」第10集

宮崎県都城市教育委員会1993 「並木添遺跡」「郡城市文化財調査報告書」

第24集

日向市教育委員会1994 「百町原地区遺跡」「高畠は場整備事業百町原地区工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」

大和市教育委員会1998 「下醍醐城山(伝山中野理助貞信城跡・大和市N0.181)遺跡」「大和市文化財調査報告書」第66集

宮崎県埋蔵文化財センター1999 「西下本庄遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第15集

宮崎県教育委員会2002 「白ヶ野第2・3遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第52集

宮崎県教育委員会2002 「枯木ヶ迫遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第55集

宮崎県埋蔵文化財センター2003 「大岩田遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第77集

宮崎県都城市教育委員会2004 「馬鹿遺跡」「郡城市文化財調査報告書」第62集

宮崎県埋蔵文化財センター2005 「竹瀬C遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第96集

上田秀夫1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」「貿易陶磁研究」

第2号 日本貿易陶磁研究会

小野正敏1982 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」「貿易陶磁研究」

第2号 日本貿易陶磁研究会

九州近世陶磁学会2000 「九州陶磁の編年」

東北中世考古学会2003 「獨立と壺穴 中世遺構論の課題」東北中世考古学叢書2 高志書院

長谷部泰樹・今井敦1995 「日本出土の中国陶磁」平凡社版中国の陶磁1

平凡社

大橋康二2001 「肥前陶磁」考古学ライブリー56 ニュー・サイエンス社

西田宏子・大橋康二監修1988 「古伊万里」別冊太陽No.63 平凡社

第77表 出土遺物集計表(1)

施設名	位置	土器	白磁								青磁								総合								件数	
			有田窯		伊賀窯		飯森窯		吉野窯		白磁		青磁		吉野窯		伊賀窯		白磁		青磁		吉野窯		伊賀窯			
			有	田	伊	賀	飯	森	吉	野	白	青	吉	野	伊	賀	白	青	吉	野	伊	賀	白	青	吉	野	伊	賀
S E 1	E 780.8	11	158.9		34.1		26		1		26	4		1	1		1	1	19		1		346.4	4	670.1	74.4	365.6	56.9
S E 2	E 285.4	13	541.3		28		2		2		51	4		1	1		1	1	82.3		2		87.5	5	20	7	174.6	34.6
S E 3	E 164.2	15	158.5		16		2		2		26.7	4		1	1		1	1	46.9	2.1	71.2		47.9	0	21	1	165.7	45.5
S E 4	E 164.2	15	159.3		16		3		3		51.3	4		1	1		1	1	47.7	2.1	70.9		46.5	2	16.0	1	160.4	57.6
S E 5	E 165.5										67.5	5		2	1		1	1	51.1		5		176.2	12.3	192.9	40.4	57.6	1
S E 6	E 165.5										51.2								51.2									
S E 7	E 899.5	27.2	302.6		11.5		33.3		31	253.7		67.5	5		1	1		1	51.2		5		7.8					

第78表 出土遺物集計表(2)

測量番号	土器	小口										大口										合計	
		直徑	底径	高さ	厚さ	腹幅	腹深	底幅	底深	腹幅	腹深	底幅	底深	腹幅	腹深	底幅	底深	件数	重量	件数	重量	件数	重量
SE 6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 14	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 16	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 18	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 22	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 23	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 24	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 26	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 28	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 29	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 30	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 32	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 34	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 36	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 38	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 40	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 42	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 44	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 46	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 48	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
SE 50	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1